



Informatica®
10.5.6

バージョン 10.2 からのア ップグレード (10.5.6)

Informatica バージョン 10.2 からのアップグレード (10.5.6)

10.5.6

2024 年 5 月

© 著作権 Informatica LLC 2006, 2024

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

Informatica、Informatica ロゴ、PowerCenter、および PowerExchange は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

オプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

特許については、<https://www.informatica.com/legal/patents.html> を参照してください。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2024-07-16

目次

序文	8
Informatica のリソース.....	8
Informatica Network.....	8
Informatica ナレッジベース.....	8
Informatica マニュアル.....	9
Informatica 製品可用性マトリックス.....	9
Informatica Velocity.....	9
Informatica Marketplace.....	9
Informatica グローバルカスタマサポート.....	9
 第 1 章 : アップグレードの概要	10
Informatica のアップグレード.....	10
アップグレードパス.....	10
アップグレードプロセス.....	11
 第 2 章 : Linux でドメインをアップグレードする前に	13
リリースノートの確認.....	13
システム要件の確認.....	13
一時ディスクスペースと権限の確認.....	13
ドメインアップグレード要件の確認.....	14
パッチ要件の確認 Linux の場合.....	15
ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX.....	17
環境変数の確認.....	17
インストーラファイルのダウンロードと抽出.....	18
Linux でインストーラパッケージのチェックサムを確認.....	19
Informatica Upgrade Advisor を実行します.....	19
構成ファイルのバックアップ.....	20
 第 3 章 : UNIX でドメインをアップグレードする前に	21
リリースノートの確認.....	21
システム要件の確認.....	21
Dropped Support for Solaris.....	22
UNIX でのパッチ要件の確認.....	22
Java Runtime Environment のインストール (AIX の場合).....	22
ドメインアップグレード要件の確認.....	22
一時的なディスク容量の要件.....	23
サイトキーの確認.....	23
ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX.....	23
環境変数の確認.....	24
最大ヒープサイズの確認.....	25

インストーラファイルのダウンロードと抽出.	26
UNIX でのインストーラパッケージのチェックサムの確認.	26
Informatica Upgrade Advisor を実行します.	27
構成ファイルのバックアップ.	28
第 4 章 : Windows でドメインをアップグレードする前に.	29
リリースノートの確認.	29
システム要件の確認.	29
ドメインアップグレード要件の確認.	30
一時ディスクスペースと権限の確認.	30
サイトキーの確認.	31
ディストリビューションパッケージ要件の確認 (Windows)	31
環境変数の確認.	32
最大ヒープサイズの確認.	33
インストーラファイルのダウンロードと抽出.	33
Windows でのインストーラパッケージのチェックサムの確認.	34
Informatica Upgrade Advisor を実行します.	34
構成ファイルのバックアップ.	35
第 5 章 : アップグレードの準備.	36
データトランスフォーメーションファイルのバックアップ.	36
PowerCenter リポジトリの準備.	37
モデルリポジトリのバックアップ.	37
データ統合サービスの準備.	37
Profiling ウェアハウスの準備.	37
参照データのディレクトリの準備.	38
Metadata Manager の準備.	38
Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ.	38
Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ.	39
データベースのバックアップ.	39
Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbc.ini ファイルのバックアップ.	39
ドメインの準備.	39
ドメインのシャットダウン.	39
ドメインのバックアップ.	40
第 6 章 : ドメインのアップグレード.	42
Informatica ドメインのアップグレード.	42
グラフィカルモードでのアップグレード.	42
コンソールモードでのアップグレード.	53
サイレントモードでのアップグレード.	55
プロパティファイル内のパスワードの暗号化.	55
プロパティファイルの作成.	56
サイレントインストーラの実行.	57

ドメインアップグレードのトラブルシューティング.....	58
------------------------------	----

第 7 章 : ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード..... 60

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要.....	60
別のデータベースへの移行.....	61
別のマシンへのインストールの移行.....	61
インストールディレクトリのコピー.....	62
Windows 上のポートの使用可否の判定.....	62
手順 3. システムユーザーアカウントの作成.....	63
手順 4. サービスマシンへのネイティブ接続の設定.....	63
手順 5. データベースクライアントソフトウェアのインストール.....	64
手順 6. UNIX 上でのデータベースクライアントの環境変数の設定.....	65
グラフィカルモードでのアップグレード.....	67
コンソールモードでのアップグレード.....	79
サイレントモードでのアップグレード.....	86
ノード設定の変更の完了.....	86
ブラウザのキャッシュをクリアする.....	86
ロケール環境変数の設定.....	86
ライブラリパス環境変数の設定.....	87
動的ポート番号の範囲の確認.....	88
ノードバックアップディレクトリの確認.....	88
PowerExchange アダプタの設定.....	88

第 8 章 : アプリケーションサービスをアップグレードする前に..... 89

Informatica の環境変数の設定.....	89
ロケール環境変数の設定.....	90
Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認.....	90
ブラウザのキャッシュをクリアする.....	91

第 9 章 : アプリケーションサービスのアップグレード..... 92

アプリケーションサービスのアップグレードの概要.....	92
サービスをアップグレードする特権.....	92
以前のバージョンからのサービスアップグレード.....	93
アップグレードウィザードの実行.....	94
モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認.....	94
オブジェクト依存関係のグラフ.....	95
Model Repository サービスの詳細プロパティ.....	95

第 10 章 : Informatica クライアントのアップグレード..... 96

Informatica クライアントのアップグレードの概要.....	96
Informatica クライアントをアップグレードする前に.....	96
グラフィカルモードでのアップグレード.....	98
サイレントモードでのアップグレード.....	99

プロパティファイルの作成.	99
サイレントインストーラの実行.	100
アップグレードした後に.	100
第 11 章 : アップグレードした後に.	101
Informatica ドメイン.	101
ログイベントディレクトリの更新.	101
Transport Layer Security (TLS) を有効にする.	102
Informatica クライアントをアップグレードします。	102
別のデータベースへの移行.	102
ドメインへのクライアントの接続の保護.	104
Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード.	105
PowerCenter リポジトリサービス.	105
PowerCenter 統合サービス.	105
Data Integration Service.	105
ログイベントディレクトリの更新.	106
構成ファイルの更新.	106
スケジューラサービス.	107
アナリストサービス.	107
フラットファイルキャッシュの場所の確認.	107
一時エクスポートファイルの場所の確認.	107
Business Glossary 添付ファイルディレクトリ (AS) の確認.	108
アナリストサービスのリサイクル.	108
Metadata Manager エージェント.	108
Metadata Manager サービス.	109
Metadata Manager プロパティファイルの更新.	109
UNIX での ODBCINST 環境変数の確認.	109
Cognos 依存関係の JAR ファイルの更新.	109
リソースのパージおよびリロード.	110
Informatica Platform リソースのアップグレード.	110
ユニバーサルリソース用のプラグインの再生成.	111
DataDirect Drivers の更新.	112
Informatica Cassandra ODBC データソースのアップグレード.	112
Data Transformation ファイルのコピー.	113
Hive エンジンのサポート終了のためのプロファイルの更新.	113
Hive エンジンのサポート終了のためのマッピングの更新.	113
新機能および変更点の確認.	114
付録 A : アップグレードチェックリスト.	115
アップグレードチェックリストの概要.	115
ドメインをアップグレードする前に.	115
ドメインのアップグレード.	117
アプリケーションサービスをアップグレードする前に.	117

アプリケーションサービスのアップグレード.....	117
Informatica クライアントのアップグレード.....	118
アップグレードした後に.....	118
付録 B: ディストリビューションパッケージの管理.....	120
ディストリビューションパッケージの管理の概要.....	120
作業を開始する前に.....	121
コンソールモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除.....	121
サイレントモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除.....	122
インストールした後に.....	123
索引.....	124

序文

製品をアップグレードするには、このアップグレードガイドの手順に従ってください。

Informatica ドメインのサービスとクライアントをアップグレードするには、アップグレードガイドを参照してください。データベース要件を確認して、データベースをドメイン用に設定します。サポートされている製品のディストリビューションは、ネイティブ環境でも非ネイティブ環境でも確認できます。使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

複数台のマシンに製品サービスとクライアントをアップグレードできます。すべてのノードでサーバインストローを実行してアップグレードします。ドメインをアップグレードした後、Administrator ツールにログインして、アプリケーションサービスをアップグレードする必要があります。その後、すべてのマシンの Informatica クライアントをアップグレードできます。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica ナレッジベースや Informatica グローバルカスタマサポートなど、多くのリソースへの入口です。Informatica Network を利用するには、<https://network.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica Network メンバーは、次のオプションを利用できます。

- ナレッジベースで製品リソースを検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- サポートケースを作成して確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica PAM は、<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices> で参照できます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスが開発したヒントとベストプラクティスのコレクションで、多数のデータ管理プロジェクトから得た実体験に基づいています。Informatica Velocity には、世界中の組織と連携してデータ管理ソリューションを計画、開発、デプロイ、管理する Informatica コンサルタントによる集合知を表しています。

Informatica Velocity リソースには、<http://velocity.informatica.com> からアクセスしてください。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を拡張したり強化したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Marketplace で、Informatica デベロッパーやパートナーからの多数のソリューションを活用すれば、生産性を向上したり、プロジェクトでの実装時間を短縮したりできます。Informatica Marketplace は、<https://marketplace.informatica.com> からアクセスしてください。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話または Informatica Network を介してグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト (<https://www.informatica.com/services-and-training/customer-success-services/contact-us.html>) を参照してください。

Informatica Network のオンラインサポートリソースを見つけるには、<https://network.informatica.com> にアクセスして eSupport オプションを選択します。

第 1 章

アップグレードの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica のアップグレード, 10 ページ](#)
- [アップグレードパス, 10 ページ](#)
- [アップグレードプロセス, 11 ページ](#)

Informatica のアップグレード

Informatica Platform は、サーバーコンポーネントおよび 1 つ以上のクライアントコンポーネントで構成されます。Informatica では、Informatica サービスおよびクライアントをアップグレードするために別々のインストーラが提供されます。

ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。

アップグレードパス

実行するアップグレードパスは、現在使用している製品とバージョンによって異なります。

HotFix またはアップグレードを適用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮してください。

- メジャーリリースに関連付けられているバージョンを使用している場合は、HotFix を適用できます。例えば、10.5 はメジャーリリースなので、10.5.x のどのバージョンからでも HotFix を適用できます。
- 現在メジャーリリースに関連付けられたバージョンを使用していない場合は、サポートされている以前のリリースから現在のリリースにアップグレードできます。
- 直接アップグレードすることができないバージョンを使用している場合は、サポートされるバージョンにアップグレードしておく必要があります。
- サポートされている更新には、HotFix、サービスパック、累積パッチも含まれます。

重要: Informatica インストーラでサポートされている他の製品と同じドメインに Data Engineering がある場合は、10.5.6 にアップグレードする前に、すべての製品がサポートされている同じアップグレードバージョンにアップグレードされていることを確認してください。

以下の表に、ルールとガイドラインの詳細を示します。

製品	バージョン
PowerCenter	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.6 バージョンにアップグレードできます。
Informatica Data Quality	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.6 バージョンにアップグレードできます。
Data Engineering Integration	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.6 バージョンにアップグレードできます。
Data Engineering Quality	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.6 バージョンにアップグレードできます。
Data Engineering Streaming	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 10.2.2 から 10.4.1 のバージョンから、10.5.6 バージョンにアップグレードできます。
Data Privacy Management	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.6 HotFix を適用します。
Enterprise Data Catalog	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.6 HotFix を適用します。
Enterprise Data Preparation	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.6 HotFix を適用します。
Test Data Management	10.5.6 HotFix は 10.5.x のどのバージョンにも適用できます。 現在、バージョン 10.2 HotFix 2、10.4 または 10.4.1 を使用している場合は、バージョン 10.5 にアップグレードしてから、10.5.6 HotFix を適用します。

アップグレードプロセス

Informatica サービスと Informatica クライアントのアップグレードは、複数のフェーズで構成されています。

アップグレードは以下のフェーズで構成されます。

1. ドメインに対するアップグレード前タスクを実行し、正常にインストーラを実行できるようにします。
2. ドメインをアップグレードします。ドメインをアップグレードするには、Informatica サーバーインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。ドメインアップグレードウィザードでサーバーファイルをインストールし、ドメインを設定します。ドメインに複数のノードがある場合、すべてのノードをアップグレードする必要があります。ドメイン内の各ノードをアップグレードする際に、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定の変更を選択することができます。

以下の表に、ドメインをアップグレードするときにインストーラが実行する処理を示します。

タスク	内容
Informatica Upgrade Advisor を実行します。	インストーラがアップグレード前タスクを実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。 アップグレードを進める前に、競合を解決します。
Informatica のインストール。	Informatica のディレクトリとファイルを新しいディレクトリにインストールします。
infa_shared ディレクトリのコピー。	infa_shared ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにコピーします。
暗号化キーファイルをコピーします。	ドメイン暗号化キーファイルを、既存のインストールディレクトリからアップグレード時に指定したディレクトリにコピーします。
既存のドメインで Kerberos 認証を使用する場合は、Kerberos 構成ファイルおよびキータブファイルをコピーします。	既存インストールディレクトリの Kerberos 構成ファイルを、新しいインストールディレクトリにコピーします。既存インストールディレクトリのキータブファイルを、アップグレード時に指定した暗号化キーディレクトリにコピーします。
既存ドメインで Metadata Manager サービスが使用されている場合は、mm_files ディレクトリをコピーします。	mm_files ディレクトリの内容を、既存のインストールディレクトリのデフォルトの場所から新しいインストールディレクトリにコピーします。
ドメインのアップグレード。	このアップグレードでは、ドメイン内のユーザーアカウントおよび管理者アカウントが保持されます。
Informatica サービスの開始。	ノード上で Informatica サービスを開始します。

- アプリケーションサービスをアップグレードします。ドメインをアップグレードした後、Administrator ツールにログインしてアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードでは、アップグレードが必要なすべてのアプリケーションサービスの一覧が表示されます。依存オブジェクトに必要な順序に基づいてサービスがアップグレードされます。
- Informatica クライアントをアップグレードします。クライアントインストーラを使用して次の Informatica クライアントツールをアップグレードします。

- PowerCenter Client
- Informatica Developer

Informatica クライアントをアップグレードするには、Informatica クライアントインストーラを実行し、アップグレードオプションを選択します。クライアントが複数のマシンにインストールされている場合は、すべてのマシンのクライアントをアップグレードします。

- アップグレード後のタスクを実行します。

注: Informatica のインストールを複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、付録のアップグレードチェックリストを利用して実行できます。

第 2 章

Linux でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 13 ページ](#)
- [システム要件の確認, 13 ページ](#)
- [インストーラファイルのダウンロードと抽出, 18 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 19 ページ](#)
- [構成ファイルのバックアップ, 20 ページ](#)

リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、このリリースでの既知および修正済みの問題についての情報も確認できます。

リリースノートは Informatica の [documentation portal](#) で参照できます。

システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

一時ディスクスペースと権限の確認

一時ディスク容量、一時ファイルに対する権限、Informatica クライアントツールに関する最小システム要件を、現在の環境が満たしていることを確認します。

一時ファイル用のディスク容量

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートするディスク容量 1 GB がマシンにあることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

次の表に、PowerCenter または Data Engineering 製品をインストールするための最小ディスク容量とメモリ要件を示します。

オプション	最小要件
インストーラを実行するための一時ディスク領域	1GB のディスク容量
Data Engineering 製品のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、8GB RAM、8 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。
PowerCenter のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、4GB RAM、6 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。

一時ファイルの権限

/tmp ディレクトリの読み取り、書き込み、実行の権限があることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

ドメインアップグレード要件の確認

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。マルチノードドメインでは、ワーカーノードをアップグレードする前にゲートウェイノードをアップグレードします。アップグレードを実行する前に、Informatica ドメインのトラストストアファイルに TrustedCertEntry のみが含まれていることを確認してください。このファイルからすべての PrivateKeyEntry エントリを削除する必要があります。

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

Informatica ドメインをアップグレードするには、50GB 以上のディスク容量と 6GB の RAM があることを確認してください。

注: アップグレードする際、既存の infa_shared ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップも必要になります。また、暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。生成されたサイトキーは、各ノードにコピーするか、各ノードからアクセスできる共有の場所に配置する必要があります。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードする必要があります。ドメインのアップグレード後、必ずサイトキーを移行してください。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

サイトキーの確認

アップグレードする前にサイトキーを確認します。生成されたサイトキーをバックアップし、古いサイトキーを使用してアップグレードインストーラを実行します。ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。

生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップします。暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。

生成されたサイトキーを各ノードにコピーするか、生成されたサイトキーを各ノードからアクセスできる共有の場所に配置します。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードします。

ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

パッチ要件の確認 Linux の場合

Informatica サービスをインストールする前に、必要なオペレーティングシステムのパッチとライブラリがマシンにインストールされていることを確認します。

Linux 上の PowerCenter

The following table lists the patches and libraries that the Informatica services require for PowerCenter on Linux:

Platform	Operating System	Operating System Patch
AWS Linux	Linux 2 - 2.0.20220805.0	All of the following packages: <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-libs-1.42.9-19.amzn2.x86_64- keyutils-libs-1.5.8-3.amzn2.0.2.x86_64- libsepol-2.5-8.1.amzn2.0.2.x86_64- libselineux-2.5-12.amzn2.0.2.x86_64
Ubuntu	20.04.1	All of the following packages: <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs/focal,now 1.45.5-2ubuntu1 amd64 [installed]- libkeyutils1/focal,now 1.6-6ubuntu1 amd64 [installed,automatic]- libsepol1/focal,now 3.0-1build2 amd64 [installed,automatic]- libselinux1/focal,now 3.0-1build2 amd64 [installed,automatic]
Ubuntu	18.04	All of the following packages: <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs/focal,now 1.45.5-2ubuntu1 amd64 [installed]- libkeyutils1/focal,now 1.5.9-9.2ubuntu2 amd64 [installed,automatic]- libsepol1/focal,now 2.7-2build2 amd64 [installed,automatic]- libselinux1/focal,now 2.7-1ubuntu0.1 amd64 [installed,automatic]
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 7.3	All of the following packages, where <version> is any version of the package: <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-libs-<version>.el7- keyutils-libs-<version>.el7- libsepol-<version>.el7- libselinux-<version>.el7
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 8	All of the following packages, where <version> is any version of the package: <ul style="list-style-type: none">- e2fsprogs-libs-<version>.el8- keyutils-libs-<version>.el8- libsepol-<version>.el8- libselinux-<version>.el8

Platform	Operating System	Operating System Patch
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 12	Service Pack 2
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 15	Service Pack 0 and Service Pack 1.

Linux 上の Data Engineering

The following table lists the patches and libraries that the Informatica services require on Linux:

Platform	Operating System	Operating System Patch
AWS Linux	Linux 2 - 2.0.20220805.0	All of the following packages: <ul style="list-style-type: none"> - e2fsprogs-libs-1.42.9-12.amzn2.0.2.x86_64 - keyutils-libs-1.5.8-3.amzn2.0.2.x86_64 - libselinux-2.5-12.amzn2.0.2.x86_64 - libsepol-2.5-8.1.amzn2.0.2.x86_64
Ubuntu	20.04.1	All of the following packages: <ul style="list-style-type: none"> - e2fsprogs/focal,now 1.45.5-2ubuntu1 amd64 [installed] - libkeyutils1/focal,now 1.6-6ubuntu1 amd64 [installed,automatic] - libselinux1/focal,now 3.0-1build2 amd64 [installed,automatic] - libsepol1/focal,now 3.0-1 amd64 [installed,automatic]
Ubuntu	18.04	All of the following packages: <ul style="list-style-type: none"> - e2fsprogs/focal,now 1.45.5-2ubuntu1 amd64 [installed] - libkeyutils1/focal,now 1.5.9-9.2ubuntu2 amd64 [installed,automatic] - libselinux1/focal,now 2.7-2build2 amd64 [installed,automatic] - libsepol1/focal,now 2.7-1ubuntu0.1 amd64 [installed,automatic]
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 6.7	All of the following packages, where <version> is any version of the package: <ul style="list-style-type: none"> - e2fsprogs-libs-<version>.el6 - keyutils-libs-<version>.el6 - libselinux-<version>.el6 - libsepol-<version>.el6
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 7.3	All of the following packages, where <version> is any version of the package: <ul style="list-style-type: none"> - e2fsprogs-libs-<version>.el7 - keyutils-libs-<version>.el7 - libselinux-<version>.el7 - libsepol-<version>.el7
Linux-x64	Red Hat Enterprise Linux 8	All of the following packages, where <version> is any version of the package: <ul style="list-style-type: none"> - e2fsprogs-libs-<version>.el8 - keyutils-libs-<version>.el8 - libselinux-<version>.el8 - libsepol-<version>.el8

Platform	Operating System	Operating System Patch
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 12	Service Pack 2
Linux-x64	SUSE Linux Enterprise Server 15	Service Pack 0 and Service Pack 1.

ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX

Informatica ドメインを Hadoop 環境または Databricks 環境と統合するために、サードパーティのディストリビューションパッケージを使用できます。

Informatica ドメインとクライアントでは、Informatica ドメイン内で複合ファイル进行处理したり、Informatica ドメイン内で処理する際に Hadoop または Databricks に接続したりするために、統合パッケージが必要です。

ディストリビューションパッケージが必要な場合は、インストーラまたは Integration Package Manager（パッケージマネージャ）を使用していつでもインストールできます。

Informatica ドメイン内で複合ファイル进行处理する場合、または Hadoop または Databricks に接続するが Informatica ドメイン内で処理する場合には、以前の Informatica バージョンで使用していたディストリビューションパッケージを使用できます。

次のアダプタには、Informatica ドメイン内で処理するためのディストリビューションパッケージが必要です。

- PowerExchange for Amazon S3
- PowerExchange for Google Cloud Storage
- PowerExchange for Google Cloud Storage for PowerCenter
- PowerCenter 用 PowerExchange for Hadoop
- PowerExchange for HBase
- PowerExchange for HDFS
- PowerExchange for Hive
- PowerExchange for JDBC V2
- PowerExchange for Kafka for PowerCenter
- PowerExchange for MapR-DB
- PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen2

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、確認する環境変数を示します。

変数	説明
IATEMPDIR	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
LANG および LC_ALL	ロケールを変更してターミナルセッションに適切な文字エンコードを設定します。例えば、フランス語の場合は Latin1 または ISO-8859-1 に、日本語の場合は EUC-JP または Shift JIS に、中国語と韓国語の場合は UTF-8 にエンコードを設定します。文字エンコードにより、UNIX 端末に表示される文字の種類が決まります。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。 DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
SKIP_VENDOR_CHECK	環境変数を構成して Linux または AIX へのインストーラから sudo プロンプトを削除します。 環境変数を true に設定すると Linux または AIX に対するアップグレードインストーラから sudo プロンプトが削除されます。 注: sudo 権限がない場合は、アップグレードする前に環境変数を true に設定します。sudo 権限がある場合は、環境変数を設定する必要はありません。

インストーラファイルのダウンロードと抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして配布されます。Informatica インストールファイルとディストリビューションパッケージは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。

Informatica インストール tar ファイルと必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードします。これらは、ローカルディレクトリ、またはマシンにマッピングされている共有ネットワークドライブにダウンロードできます。

その他の圧縮ファイルやユーティリティをダウンロードするには、Informatica グローバルカスタマサポートに配送要求を送信してください。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーには、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限が必要です。

注: マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできないため、インストーラファイルをローカルディレクトリに抽出してください。

ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Informatica インストーラファイル>/source

注: ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、インストーラは失敗します。

Linux でインストーラパッケージのチェックサムを確認

Informatica サービスのアップグレードインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドは、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、Linux 用の Informatica サービスインストーラのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1056_server_linux-x64.tar	2774164387	12477583360

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータ エラーが発生した場合、またはディスク上のファイルでデータの破損が発生した場合に発生する可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#) を参照してください。

Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

注: ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります、それらの不具合は無視できます。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。

環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。

5. Informatica をアップグレードするには、**2** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。
【ようこそ】 セクションが表示されます。
7. **Enter** キーを押します。
【インストールディレクトリ】 セクションが表示されます。
8. 現在のインストールディレクトリを入力します。
9. **Enter** キーを押します。
【ドメインおよびノードの設定】 セクションが表示されます。
10. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /`
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。初回はこのユーザー名を使用して Informatica Administrator にログインできます。次のガイドラインを使用します。 名前では大文字と小文字が区別されず、128 文字以内であることが必要です。 名前には、タブ、改行文字、または次の特殊文字を使用できません: % * + / ? ; < > - 名前には、先頭と末尾の文字以外に ASCII スペース文字を使用できます。その他のスペース文字は使用できません。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。パスワードは、3 文字以上で 16 文字を超えないようにする必要があります。 Kerberos 認証を使ったネットワーク上で実行されるように Informatica ドメインを設定する場合は使用できません。

11. **Enter** キーを押します。
【Informatica Upgrade Advisor のサマリ】 セクションが表示されます。
12. Advisor の結果をログファイル (Summary_<timestamp>.log) で確認します。
13. **Enter** キーを押して、Informatica Upgrade Advisor を閉じます。

構成ファイルのバックアップ

いずれかの構成ファイルに、カスタマイズ、更新されたプロファイル、または新しいプロパティが含まれている場合は、インストール構成ファイルをバックアップします。

第 3 章

UNIX でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 21 ページ](#)
- [システム要件の確認, 21 ページ](#)
- [UNIX でのパッチ要件の確認, 22 ページ](#)
- [Java Runtime Environment のインストール \(AIX の場合\) , 22 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 22 ページ](#)
- [ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX, 23 ページ](#)
- [環境変数の確認, 24 ページ](#)
- [最大ヒープサイズの確認, 25 ページ](#)
- [インストーラファイルのダウンロードと抽出, 26 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 27 ページ](#)
- [構成ファイルのバックアップ, 28 ページ](#)

リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、このリリースでの既知および修正済みの問題についての情報も確認できます。

リリースノートは Informatica の [documentation portal](#) で参照できます。

システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

Dropped Support for Solaris

Effective in version 10.4.0, Informatica dropped support for Solaris.

To upgrade to a supported operating system, refer to [第 7 章, 「ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード」 \(ページ 60\)](#) chapter.

UNIX でのパッチ要件の確認

Informatica サービスをインストールする前に、必要なオペレーティングシステムのパッチとライブラリがマシンにインストールされていることを確認します。

UNIX 上の PowerCenter

The following table lists the patches and libraries that the Informatica services require for PowerCenter on UNIX:

Platform	Compiler Version	Operating System	Operating System Patch
AIX	16	7.1 TL5	OS level: 7100-05 bos.adt.debug Version 7.1.5.32
AIX	16	7.2 TL4	OS level: 7200-04 bos.adt.debug Version 7.2.4.0

Java Runtime Environment のインストール (AIX の場合)

Informatica には、AIX 対応の Java ライブラリは付属していません。AIX に Informatica をインストールする場合は、事前に Java Runtime Environment ビルド 8.0.8.10 - pap6480sr8fp10-20230703_02(SR8 FP10)をダウンロードする必要があります。

java8_64_installp_8.0.0.810.tar.gz ファイルをダウンロードしてください。

JRE のインストール中にエラーが発生する場合は、JRE ベンダーにお問い合わせください。

参照リンクでダウンロード可能なソフトウェアは、Informatica ではなく、サードパーティに属しています。ダウンロード元リンクは、誤りがある可能性や、削除または変更される可能性があります。Informatica LLC は、そのようなリンクやソフトウェアに対し、明示的、黙示的にかかわらず、商品性、特定目的への適合性、権原、および非侵害についてのいかなる保証についても、その責任を一切負わないものとします。

ドメインアップグレード要件の確認

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。マルチノードドメインでは、ワ

ーカーノードをアップグレードする前にゲートウェイノードをアップグレードします。アップグレードを実行する前に、Informatica ドメインのトラストストアファイルに TrustedCertEntry のみが含まれていることを確認してください。このファイルからすべての PrivateKeyEntry エントリを削除する必要があります。

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

Informatica ドメインをアップグレードするには、50GB 以上のディスクスペースと 6GB の RAM があることを確認してください。

注: アップグレードする際、既存の infa_shared ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

一時的なディスク容量の要件

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートする、マシンに十分な利用可能なディスク容量があることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

インストーラを実行するには、1 GB の一時ディスク容量が必要です。

サイトキーの確認

アップグレードする前にサイトキーを確認します。生成されたサイトキーをバックアップし、古いサイトキーを使用してアップグレードインストーラを実行します。ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。

生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップします。暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。

生成されたサイトキーを各ノードにコピーするか、生成されたサイトキーを各ノードからアクセスできる共有の場所に配置します。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードします。

ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

ディストリビューションパッケージ要件の確認 Linux および UNIX

Informatica ドメインを Hadoop 環境または Databricks 環境と統合するために、サードパーティのディストリビューションパッケージを使用できます。

Informatica ドメインとクライアントでは、Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理したり、Informatica ドメイン内で処理する際に Hadoop または Databricks に接続したりするために、統合パッケージが必要です。

ディストリビューションパッケージが必要な場合は、インストーラまたは Integration Package Manager (パッケージマネージャ) を使用していつでもインストールできます。

Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理する場合、または Hadoop または Databricks に接続するが Informatica ドメイン内で処理する場合には、以前の Informatica バージョンで使用していたディストリビューションパッケージを使用できます。

次のアダプタには、Informatica ドメイン内で処理するためのディストリビューションパッケージが必要です。

- PowerExchange for Amazon S3
- PowerExchange for Google Cloud Storage
- PowerExchange for Google Cloud Storage for PowerCenter
- PowerCenter 用 PowerExchange for Hadoop
- PowerExchange for HBase
- PowerExchange for HDFS
- PowerExchange for Hive
- PowerExchange for JDBC V2
- PowerExchange for Kafka for PowerCenter
- PowerExchange for MapR-DB
- PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen2

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、UNIX 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
IATEMPDIR	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infra ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_JRE_HOME	サポートされている Java Runtime Environment (JRE) が含まれているフォルダの場所。Informatica を AIX にインストールする場合は、INFA_JRE_HOME 環境変数を設定します。 シェルの構成ファイル、例えば.bashrc ファイルでは、INFA_JRE_HOME 環境変数を JRE が含まれるディレクトリに設定します。ログインシェルが INFA_JRE_HOME 環境変数にアクセスできることを確認します。

変数	説明
JRE_HOME	Informatica サービスを UNIX マシンにインストールする場合、インストールを開始する前に環境変数 JRE_HOME をクリアします。
LANG および LC_ALL	ロケールを変更してターミナルセッションに適切な文字エンコードを設定します。例えば、フランス語の場合は Latin1 または ISO-8859-1 に、日本語の場合は EUC-JP または Shift JIS に、中国語と韓国語の場合は UTF-8 にエンコードを設定します。文字エンコードにより、UNIX 端末に表示される文字の種類が決まります。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
SKIP_VENDOR_CHECK	環境変数を構成して UNIX へのインストーラから sudo プロンプトを削除します。 環境変数を true に設定すると UNIX に対するアップグレードインストーラから sudo プロンプトが削除されます。 注: sudo 権限がない場合は、アップグレードする前に環境変数を true に設定します。sudo 権限がある場合は、環境変数を設定する必要はありません。

最大ヒープサイズの確認

Informatica サービスが使用しているヒープサイズが、ドメイン内のユーザー数に対する必要な最大ヒープサイズであることを確認します。

以下の表に、ドメイン内のユーザーとサービスの数に基づく、最大ヒープサイズ設定の最小要件を示します。

ドメインのユーザー数	最大ヒープ サイズ (1~5 個のサービス)	最大ヒープ サイズ (6~10 個のサービス)
最大 1,000	512MB (デフォルト)	1024MB
5,000	2048MB	3072MB
10,000	3072MB	5120MB
20,000	5120MB	6144MB
30,000	5120MB	6144MB

注: この表の最大ヒープサイズの設定内容は、ドメイン内のアプリケーションサービスの数に基づいています。

ドメインのユーザー数が 1,000 を超える場合、ドメインのユーザー数に基づいて最大ヒープサイズを更新します。

1. インストールファイルを抽出します。
2. <インストーラファイルディレクトリ>/source/tomcat/bin ディレクトリに移動します。
3. テキストエディタを使用して、infaservice ファイルを開きます。
4. テキスト「INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX」を検索します。
5. -Xmx の値を、Informatica ドメインのユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズに設定します。
例えば、最大ヒープサイズを 3072MB に設定するには、以下の設定を使用します。
set INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX:GCTimeRatio=9 -Xmx3072m

インストーラファイルのダウンロードと抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして配布されます。Informatica インストールファイルとディストリビューションパッケージは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。

Informatica インストール tar ファイルと必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードします。これらは、ローカルディレクトリ、またはマシンにマッピングされている共有ネットワークドライブにダウンロードできます。

その他の圧縮ファイルやユーティリティをダウンロードするには、Informatica グローバルカスタマサポートに配送要求を送信してください。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーには、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限が必要です。

注: マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできないため、インストーラファイルをローカルディレクトリに抽出してください。

ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Informatica インストーラファイル>/source

注: ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、インストーラは失敗します。

UNIX でのインストーラパッケージのチェックサムの確認

サービスインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドで、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、UNIX 用の Informatica サービスのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1056_server_linux-x64.tar	2774164387	12477583360
informatica_1056_server_aix-ppc64.tar	4224348454	10385756160

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータエラーが発生した場合、またはディスク上のファイルでデータの破損が発生した場合に発生する可能性があります。チェックサムエラーの

詳細については、[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#) を参照してください。

Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

注: ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります、それらの不具合は無視できます。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

1. システムユーザーアカウントを使用してマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
5. Informatica をアップグレードするには、**2** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。
[ようこそ] セクションが表示されます。
7. **Enter** キーを押します。
[インストールディレクトリ] セクションが表示されます。
8. 現在のインストールディレクトリを入力します。
9. **Enter** キーを押します。
[ドメインおよびノードの設定] セクションが表示されます。
10. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。

プロパティ	説明
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。初回はこのユーザー名を使用して Informatica Administrator にログインできます。次のガイドラインを使用します。 名前では大文字と小文字が区別されず、128 文字以内であることが必要です。 名前には、タブ、改行文字、または次の特殊文字を使用できません: % * + / ? ; < > - 名前には、先頭と末尾の文字以外に ASCII スペース文字を使用できます。その他のスペース文字は使用できません。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。パスワードは、3 文字以上で 16 文字を超えないようにする必要があります。 Kerberos 認証を使ったネットワーク上で実行されるように Informatica ドメインを設定する場合は使用できません。

11. **Enter** キーを押します。
[Informatica Upgrade Advisor のサマリ] セクションが表示されます。
12. Advisor の結果をログファイル (Summary_<timestamp>.log) で確認します。
13. **Enter** キーを押して、Informatica Upgrade Advisor を閉じます。

構成ファイルのバックアップ

いずれかの構成ファイルに、カスタマイズ、更新されたプロファイル、または新しいプロパティが含まれている場合は、インストール構成ファイルをバックアップします。

第 4 章

Windows でドメインをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [リリースノートの確認, 29 ページ](#)
- [システム要件の確認, 29 ページ](#)
- [ドメインアップグレード要件の確認, 30 ページ](#)
- [ディストリビューションパッケージ要件の確認 \(Windows\) , 31 ページ](#)
- [環境変数の確認, 32 ページ](#)
- [最大ヒープサイズの確認, 33 ページ](#)
- [インストーラファイルのダウンロードと抽出, 33 ページ](#)
- [Informatica Upgrade Advisor を実行します, 34 ページ](#)
- [構成ファイルのバックアップ, 35 ページ](#)

リリースノートの確認

リリースノートで、インストールとアップグレードプロセスの最新情報を参照してください。また、このリリースでの既知および修正済みの問題についての情報も確認できます。

リリースノートは Informatica の [documentation portal](#) で参照できます。

システム要件の確認

使用する環境が、インストールプロセス、一時ディスク領域、ポートの可用性、データベース、アプリケーションサービスハードウェアの最小システム要件を満たしていることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

ドメインアップグレード要件の確認

アップグレードを開始する前にアップグレード前のタスクを完了します。アップグレードする Informatica の以前のバージョンをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。マルチノードドメインでは、ワーカーノードをアップグレードする前にゲートウェイノードをアップグレードします。アップグレードを実行する前に、Informatica ドメインのトラストストアファイルに TrustedCertEntry のみが含まれていることを確認してください。このファイルからすべての PrivateKeyEntry エントリを削除する必要があります。

マシンが Informatica ドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。

以下の表に、Informatica ドメインのアップグレードに必要な最小のメモリおよびディスク容量を示します。

RAM	ディスクスペース
6GB	50GB

注: アップグレードする際、既存の infa_shared ディレクトリが使用している追加のディスク領域がインストーラで必要です。

次の表に、Informatica クライアントツールを実行するための最小システム要件を示します。

クライアント	プロセッサ	RAM	ディスクスペース
PowerCenter Client	1 CPU	1 GB	3 GB

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップも必要になります。また、暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。生成されたサイトキーは、各ノードにコピーするか、各ノードからアクセスできる共有の場所に配置する必要があります。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードする必要があります。ドメインのアップグレード後、必ずサイトキーを移行してください。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

一時ディスクスペースと権限の確認

一時ディスク容量、一時ファイルに対する権限、Informatica クライアントツールに関する最小システム要件を、現在の環境が満たしていることを確認します。

一時ファイル用のディスク容量

インストーラによりハードディスクに一時ファイルが書き込まれます。インストールをサポートするディスク容量 1 GB がマシンにあることを確認します。インストールが完了した場合、インストーラにより一時ファイルが削除され、ディスク容量が解放されます。

次の表に、PowerCenter または Data Engineering 製品をインストールするための最小ディスク容量とメモリ要件を示します。

オプション	最小要件
インストーラを実行するための一時ディスク領域	1GB のディスク容量
Data Engineering 製品のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、8GB RAM、8 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。
PowerCenter のアプリケーションサービスを使用したインストール	50GB のディスク容量、4GB RAM、6 コア。50GB のうち 25GB は製品インストールバイナリ用に使用されます。

一時ファイルの権限

/tmp ディレクトリの読み取り、書き込み、実行の権限があることを確認します。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

サイトキーの確認

アップグレードする前にサイトキーを確認します。生成されたサイトキーをバックアップし、古いサイトキーを使用してアップグレードインストーラを実行します。ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

バージョン 10.5 以降では、サイトキーのサイズが 128 ビットから 256 ビットに拡大しました。

生成されたサイトキーは復元できないため、Informatica インストーラを実行するときは、生成されたサイトキーのバックアップします。暗号化キーを生成するときにキーワードとドメイン名を指定する必要はありません。

生成されたサイトキーを各ノードにコピーするか、生成されたサイトキーを各ノードからアクセスできる共有の場所に配置します。アップグレードインストーラを実行するときは、古いサイトキーでアップグレードします。

ドメインのアップグレード後、サイトキーを移行します。

ディストリビューションパッケージ要件の確認 (Windows)

ドメインとクライアントでは、ドメイン内で複合ファイルを処理したり、Informatica ドメイン内で処理する際に Hadoop または Databricks に接続したりするために、統合パッケージが必要です。

ディストリビューションパッケージが必要な場合は、インストーラまたは Integration Package Manager (パッケージマネージャ) を使用していつでもインストールできます。

Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理する場合、または Hadoop または Databricks に接続するが Informatica ドメイン内で処理する場合には、以前の Informatica バージョンで使用していたディストリビューションパッケージを使用できます。

次のアダプタには、Informatica ドメイン内で処理するためのディストリビューションパッケージが必要です。

- PowerExchange for Amazon S3
- PowerExchange for Google Cloud Storage
- PowerExchange for Google Cloud Storage for PowerCenter
- PowerExchange for Kafka for PowerCenter
- PowerExchange for Microsoft Azure Blob Storage
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen1
- PowerExchange for Microsoft Azure Data Lake Storage Gen2

環境変数の確認

Informatica のインストールで使用する環境変数を設定します。

以下の表に、Windows 上で確認する環境変数を示します。

変数	説明
%TEMP%	インストール中に作成される一時ファイルの場所。Informatica は一時ファイル用に 1 GB のディスク容量が必要です。 デフォルトのドライブに一時ファイルを作成しない場合に、この環境変数を設定します。
PATH	PATH 環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
ライブラリパス	ライブラリパス環境変数が Informatica の以前のバージョンを含んでいないことを確認します。
INFA_HOME	Informatica インストールディレクトリの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
INFA_DOMAINS_FILE	domains.infa ファイルの場所を含みます。アップグレードを開始する前にこの変数を取り消します。
DISPLAY	インストーラを実行する前に DISPLAY 環境変数を設定解除します。 DISPLAY 環境変数に何らかの値が設定されている場合、インストールに失敗する可能性があります。

最大ヒープサイズの確認

Informatica サービスがドメイン内のユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズを使用しているかどうかを確認します。

以下の表に、ドメイン内のユーザーとサービスの数に基づく、最大ヒープサイズ設定の最小要件を示します。

ドメインのユーザー数	最大ヒープ サイズ (1~5 個のサービス)	最大ヒープ サイズ (6~10 個のサービス)
最大 1,000	512MB (デフォルト)	1024MB
5,000	2048MB	3072MB
10,000	3072MB	5120MB
20,000	5120MB	6144MB
30,000	5120MB	6144MB

注: この表の最大ヒープサイズの設定内容は、ドメイン内のアプリケーションサービスの数に基づいています。ドメインのユーザー数が 1,000 を超える場合、ドメインのユーザー数に基づいて最大ヒープサイズを更新します。

1. インストールファイルを抽出します。
2. <インストーラファイルディレクトリ>/source/tomcat/bin ディレクトリに移動します。
3. テキストエディタを使用して、infaservice ファイルを開きます。
4. テキスト「INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX」を検索します。
5. -Xmx の値を、Informatica ドメインのユーザー数に対して必要な最大ヒープサイズに設定します。
例えば、最大ヒープサイズを 3072MB に設定するには、以下の設定を使用します。

```
set INFA_JAVA_OPTS=% INFA_JAVA_OPTS% -XX:GCTimeRatio=9 -Xmx3072m
```

インストーラファイルのダウンロードと抽出

インストーラファイルは圧縮ファイルとして配布されます。Informatica インストールファイルとディストリビューションパッケージは、注文処理電子メールに含まれている FTP リンクから取得できます。

Informatica インストール tar ファイルと必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードします。これらは、ローカルディレクトリ、またはマシンにマッピングされている共有ネットワークドライブにダウンロードできます。

その他の圧縮ファイルやユーティリティをダウンロードするには、Informatica グローバルカスタマサポートに配送要求を送信してください。

インストーラファイルをマシンのディレクトリに抽出します。インストーラを実行するユーザーには、インストーラファイルディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限が必要です。

注: マッピングされたファイルからインストーラを実行することはできないため、インストーラファイルをローカルディレクトリに抽出してください。

ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Informatica インストーラファイル>/source

注: ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、インストーラは失敗します。

Windows でのインストーラパッケージのチェックサムの確認

サービスインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドは、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、Windows での Informatica サービスのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1056_server_winem-64t.zip	2648366939	10523381459

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータエラーが発生した場合や、ディスク上のファイルのデータが破損した場合に起こる可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、『[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#)』を参照してください。

Informatica Upgrade Advisor を実行します

アップグレードを実行する前に、Informatica Upgrade Advisor を実行してサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

注: ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります。それらの不具合は無視できます。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. Informatica Upgrade Advisor を実行する前に、ドメインとサービスが実行されていることを確認します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックし、**[管理者として実行]**を選択します。

Informatica 10.5.6 ページが表示されます。

4. **[Informatica 10.5.1 Informatica 10.5.6]** を選択します。

デフォルトでは、**[Informatica Upgrade Advisor を実行します]** がオンになっています。この場合、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービス、サポートされているデータベース、およびサポートされているオペレーティングシステムについて確認します。

5. **【開始】** をクリックします。
【ようこそ】 ページが表示されます。
6. **【次へ】** をクリックします。
【インストールディレクトリ】 ページが表示されます。
7. 現在のインストールディレクトリを入力します。
8. **【次へ】** をクリックします。
【ドメインおよびノードの設定】 ページが表示されます。
9. 次のドメイン情報を入力します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。
ゲートウェイノードのポート名	ゲートウェイノードのポート番号。
ドメインユーザー名	ドメイン管理者のユーザー名。
ドメインのパスワード	ドメイン管理者のパスワードです。

10. **【次へ】** をクリックします。
【Infomatica Upgrade Advisor のサマリ】 ページが表示されます。
11. Advisor の結果をログファイル (Summary_<timestamp>.log) で確認します。
12. **【完了】** をクリックして、Infomatica Upgrade Advisor を閉じます。

構成ファイルのバックアップ

いずれかの構成ファイルに、カスタマイズ、更新されたプロファイル、または新しいプロパティが含まれている場合は、インストール構成ファイルをバックアップします。

第 5 章

アップグレードの準備

この章では、以下の項目について説明します。

- [データトランスフォーメーションファイルのバックアップ, 36 ページ](#)
- [PowerCenter リポジトリの準備, 37 ページ](#)
- [モデルリポジトリのバックアップ, 37 ページ](#)
- [データ統合サービスの準備, 37 ページ](#)
- [Profiling ウェアハウスの準備, 37 ページ](#)
- [参照データのディレクトリの準備, 38 ページ](#)
- [Metadata Manager の準備, 38 ページ](#)
- [データベースのバックアップ, 39 ページ](#)
- [Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbc.ini ファイルのバックアップ, 39 ページ](#)
- [ドメインの準備, 39 ページ](#)

データトランスフォーメーションファイルのバックアップ

アップグレードの前に、以前のバージョンで作成されたデータトランスフォーメーションファイルをバックアップする必要があります。アップグレードの完了後、新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

以下の表に、バックアップする必要があるファイルまたはディレクトリを示します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (TGP ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (DLL および JAR ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
構成ファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CMConfig.xml
ライセンスファイル	<Informatica installation directory>\DataTransformation\CDELicense.cfg

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

PowerCenter リポジトリの準備

ドメインをアップグレードする前に、PowerCenter リポジトリをバックアップします。

PowerCenter リポジトリをバックアップするには、Administrator ツールの PowerCenter リポジトリサービスを選択します。[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] を選択します。

モデルリポジトリのバックアップ

Administrator ツールを使用して、モデルリポジトリのコンテンツをバックアップします。

モデルリポジトリをバックアップするには、Administrator ツールで [モデルリポジトリサービス] を選択します。次に、[ドメインアクション] メニューで、[リポジトリコンテンツ] > [バックアップ] の順にクリックします。

データ統合サービスの準備

ドメインをアップグレードする前に、すべての実行中のジョブが完了していることを確認します。データ統合サービスは、アップグレードプロセス中にユーザーが中断したワークフローをリカバリできません。

Profiling ウェアハウスの準備

ドメインをアップグレードする前に、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。

参照データのディレクトリの準備

参照データファイルをデフォルト以外のディレクトリにインストールまたはコピーする場合は、アップグレードする前にディレクトリをバックアップします。

参照データファイルをインストールディレクトリ構造の外部のディレクトリにインストールまたはコピーする場合、ディレクトリをバックアップする必要はありません。

デフォルトでは、アップグレード操作によって以下の参照データディレクトリの内容が保持されます。

- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA_Content/dictionaries/
参照ディクショナリファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA_Content/av/
アドレス参照データファイルの親ディレクトリ。
- <Informatica installation directory>/services/DQContent/INFA_Content/identity/
ID ポピュレーションデータファイルの親ディレクトリ。

アップグレード後にディレクトリ構造にディレクトリをリストアできるように、ディレクトリの場所を記録します。

Metadata Manager の準備

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager を準備します。

1. Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。
2. Metadata Manager サービスを無効にします。
3. Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

Metadata Manager ウェアハウスのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

ネイティブのデータベースバックアップオプションを使用するか、または Metadata Manager の mmRepoCmd というコマンドラインプログラムを使用して、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。

mmRepoCmd には、Metadata Manager ウェアハウスをバックアップおよびリストアするためのコマンドが含まれます。mmRepoCmd は次のディレクトリにあります。

<Informatica サービスのインストールディレクトリ>\services\MetadataManagerService\utilities\mmrepocmd

Metadata Manager ウェアハウスをバックアップするには、mmRepoCmd backupRepository コマンドを使用します。backupRepository コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
mmRepoCmd backupRepository
[<-dn|--domainName> domainName]
[<-hp|--gateway> gateway_host1:port gateway_host2:port...]
[<-mm|--mmServiceName> mmServiceName]
<<-url> http(s)://<host>:<port>
<<-u|--user> user>
[-ep|--encryptedPassword]
[<-pw|--password> password]
[<-n|--namespace> namespace]
[<-kt|--keyTab> keyTab]
<<-f|--file> file>
[<-nt|--numThreads> numThreads]
```


Metadata Manager プロパティファイルのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica のインストールディレクトリ>\services\shared\jars\pc\classes

データベースのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、プロファイリングウェアハウス、参照データウェアハウス、およびワークフローデータベースをバックアップします。

Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbc.ini ファイルのバックアップ

バージョン 10.2.1 では、Informatica が Cassandra ODBC ファイルをアップグレードします。

アップグレードする前に、次の場所にある odbc.ini ファイルをバックアップする必要があります。

<Informatica installation directory>/tools/cassandra/lib

ドメインの準備

ドメインをアップグレードする前に、ドメインを準備するための手順を実行します。

ドメインのシャットダウン

ドメインをシャットダウンする前に、すべてのアプリケーションサービスを停止できます。ドメインをバックアップしてからアップグレードする前に、ドメインをシャットダウンする必要があります。

ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。

サポートされている環境に応じて、次のいずれかの方法を使用して、各ノードの Informatica サービスプロセスを停止できます。

- Informatica を Windows の [スタート] メニューから停止するには、[プログラム] > [Informatica[バージョン]] > [サーバー] > [Informatica サービスの停止] の順にクリックします。
- UNIX 上で Informatica を停止するには、*infaservice* コマンドを使用します。デフォルトでは、実行可能ファイル *infaservice* は次のディレクトリにインストールされています。

<Informatica installation directory>/tomcat/bin

デーモンを停止するには次のコマンドを入力します。

infaservice shutdown

サポートされている環境に応じて、Windows のコントロールパネルまたは Administrator ツールから Informatica サービスを停止することもできます。

ドメインのバックアップ

ドメインをアップグレードする前に、ドメインの設定メタデータをバックアップする必要があります。

ドメインをバックアップするには、次の手順を実行します。

- infasetup BackupDomain コマンドを実行して、ドメイン環境設定データベーステーブルをファイルにバックアップします。
- メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。

Informatica infasetup には、ドメインのバックアップとリストアを行うためのコマンドラインプログラムが含まれています。infasetup は、以下のディレクトリにあります。

<Informatica installation directory>/isp/bin

infasetup を使用してドメインをバックアップするには、以下の構文を使用します。

```
BackupDomain
<<-DatabaseAddress|-da> database_hostname:database_port|
<-DatabaseConnectionString|-cs> database_connection_string>
<-DatabaseUserName|-du> database_user_name
<-DatabasePassword|-dp> database_password
<-DatabaseType|-dt> database_type
[<-DatabaseServiceName|-ds> database_service_name]
<-BackupFile|-bf> backup_file_name
[<-Force|-f>]
<-DomainName|-dn> domain_name
[<-Tablespace|-ts> tablespace_name (used for IBM DB2 only)]
[<-SchemaName|-sc> schema_name (used for Microsoft SQL Server only)]
[<-DatabaseTlsEnabled|-dbtls> database_tls_enabled]
[<-DatabaseTruststorePassword|-dbtp> database_truststore_password]
[<-TrustedConnection|-tc> trusted_connection (used for Microsoft SQL Server only)]
[<-EncryptionKeyLocation|-kl> encryption_key_location]
```


メタデータコンフィギュレーションファイルを、Informatica をインストールしているマシンからアクセス可能な任意のディレクトリにバックアップします。以下の表は、メタデータファイルと、その場所を示します。

メタデータファイル	説明
nodemeta.xml	<p>ノードのメタデータが含まれます。</p> <p>ドメイン内の各ノード上の <code>isp/config</code> ディレクトリに格納されます。</p> <p>すべてのノードで同じバックアップディレクトリ名を使用する場合、バックアップ場所にコピーする前に <code>nodemeta.xml</code> の名前を変更します。</p> <p>たとえば、<code>nodemeta.xml</code> を、ノード A とノード B の <code>/nodebak</code> ディレクトリにバックアップするとします。ノード A の場合、ファイルが <code>/nodebak/nodemeta_A.xml</code> に、ノード B の場合、<code>/nodebak/nodemeta_B.xml</code> にバックアップされるように、コンフィギュレーションファイルの名前を変更します。</p>
domains.infa	<p>ゲートウェイノードの接続情報が含まれます。</p> <p>次のいずれかの場所に格納されます。</p> <ul style="list-style-type: none">- クライアントおよびサーバーマシン上の Informatica インストールディレクトリ。- <code>INFA_DOMAINS_FILE</code> 環境変数で設定されている場所。

第 6 章

ドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica ドメインのアップグレード, 42 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 42 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 53 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 55 ページ](#)
- [ドメインアップグレードのトラブルシューティング, 58 ページ](#)

Informatica ドメインのアップグレード

アップグレードウィザードは、以前のバージョンのファイルからドメイン情報を読み取り、同じ設定を使用してドメインとサーバーファイルを設定してアップグレードを行います。以前のバージョンと同じデータベースのドメイン環境設定リポジトリのテーブルがアップグレードされます。グラフィカルモード、コンソールモード、またはサイレントモードでアップグレードできます。

アップグレードは、インストールファイルをダウンロードしたディレクトリから実行できます。

グラフィカルモードでのアップグレード

Windows では、グラフィカルモードでドメインをアップグレードできます。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。

管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして **【管理者として実行】** を選択します。

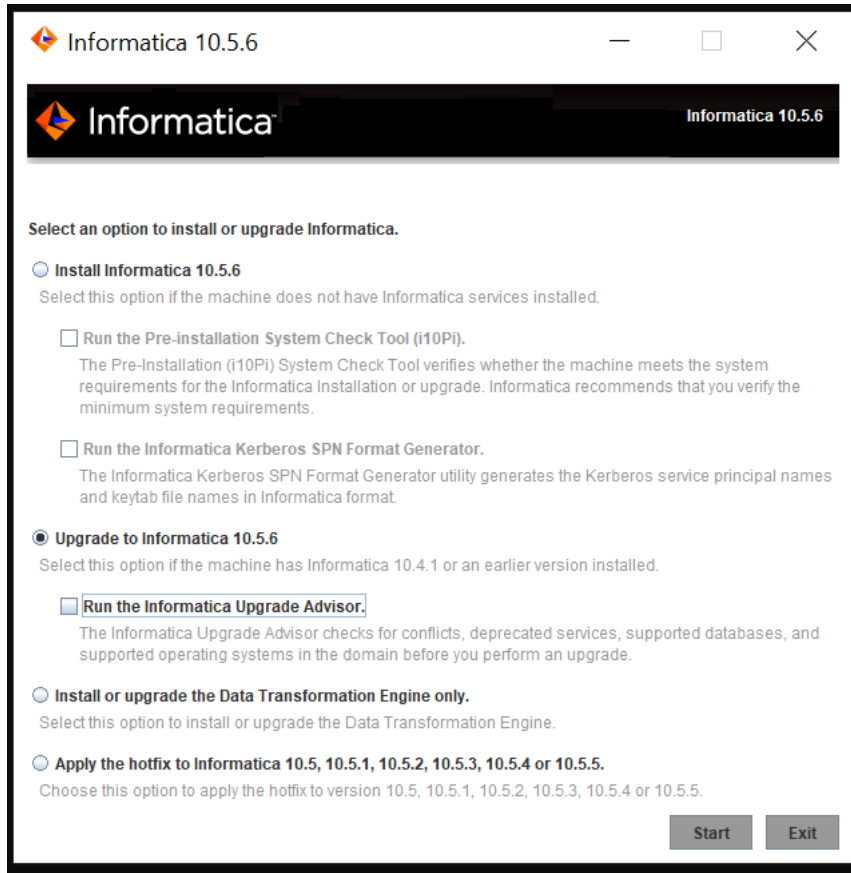
Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次の場所から install.exe を実行します。

```
<Informatica installation directory>/server/install.exe
```

注: **【管理者として実行】** を選択せずにインストーラを実行すると、Windows システム管理者が Informatica インストールディレクトリ内のファイルにアクセスできなくなることがあります。

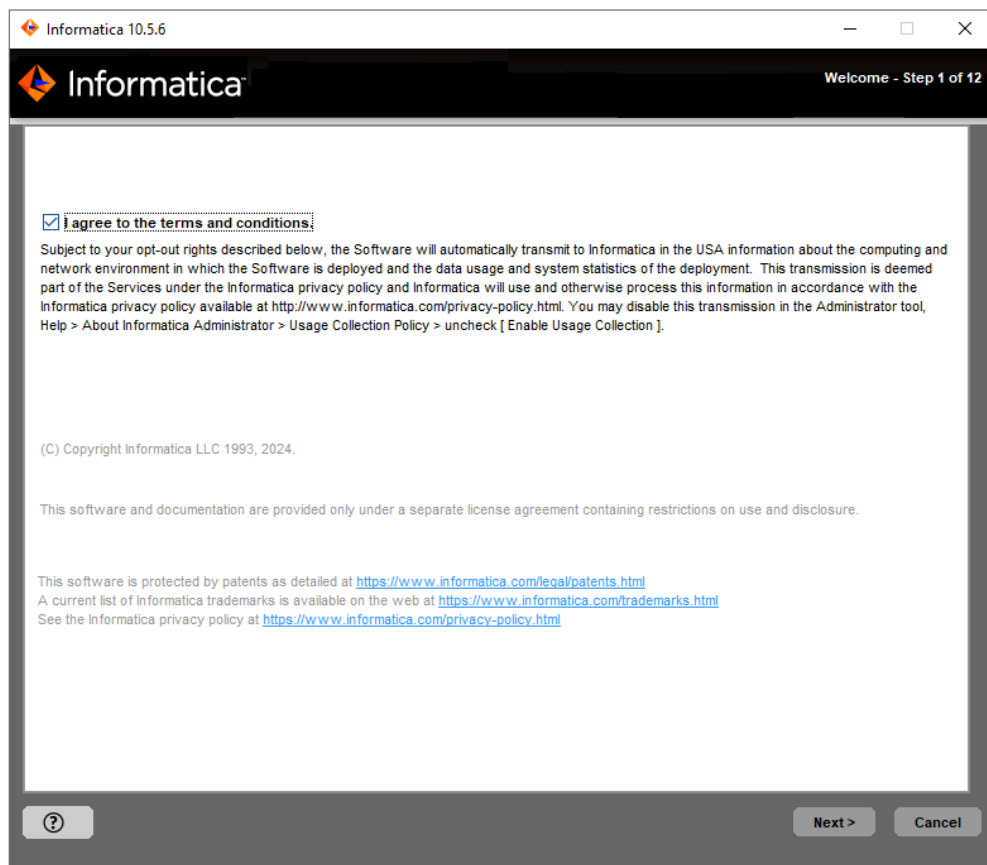
Informatica 10.5.6 ページが表示されます。

4. **「Informatica 10.5.6 にアップグレード」** を選択します。



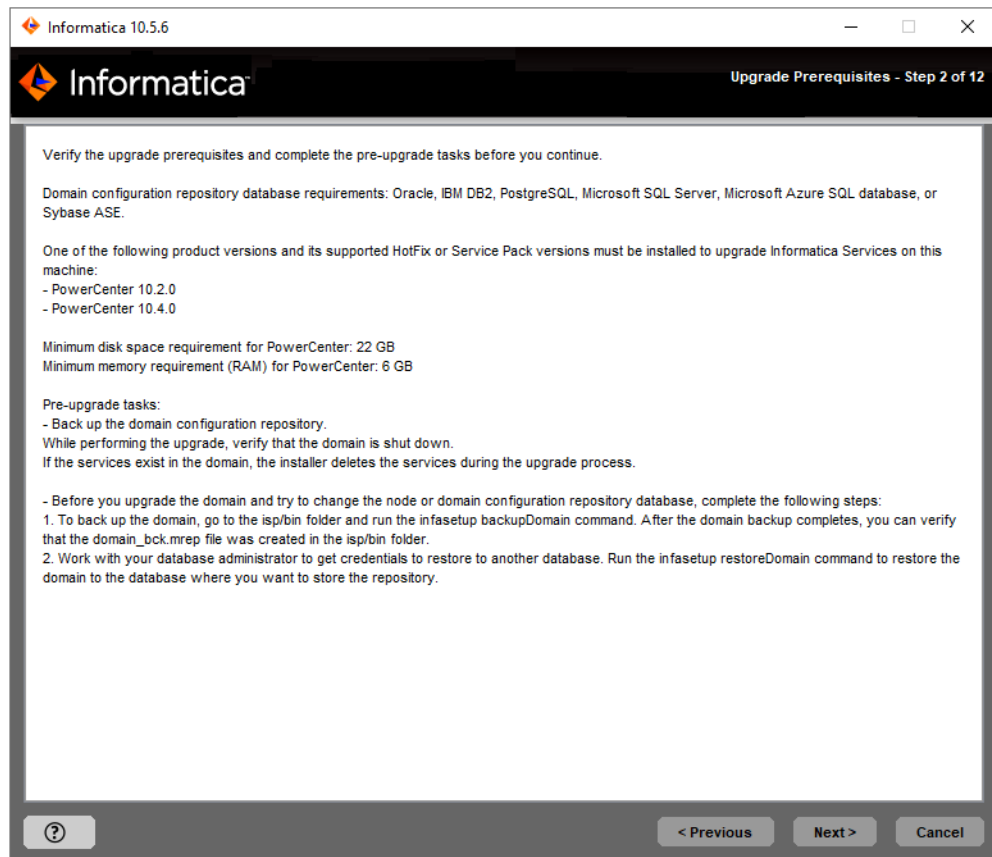
Informatica サービスのインストールプロセスを容易にするためのユーティリティを使用できます。アップグレード前に、Informatica Upgrade Advisor ユーティリティを実行する必要があります。Informatica Upgrade Advisor は、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメイン内にはないか確認します。Informatica Upgrade Advisor の詳細については、[「Informatica Upgrade Advisor を実行します」](#) (ページ 34) を参照してください。

5. **「開始」** をクリックします。
6. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **「契約条項に同意します」** を選択します。以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールでは、使用状況データの収集を無効にすることができます。



Informatica DiscoveryIQ は、データの使用とシステム統計のルーチンレポートを Informatica に送信する製品使用ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。Administrator ツールから使用統計を無効にすることを選択できます。

7. **【アップグレードの前提条件】** ページが表示されます。



アップグレードを続行する前に、要件を確認します。

8. [次へ] をクリックします。

[アップグレードディレクトリ] ページが表示されます。

- アップグレードするバージョンの Informatica が含まれたディレクトリと、Informatica 10.5.6 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica のディレクトリ	<p>Informatica のインストール先ディレクトリ。</p> <p>インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$#!% () {} [] , ; ' "</p> <p>注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。</p> <p>Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。</p>

- 【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】オプションが選択されていないことを確認します。

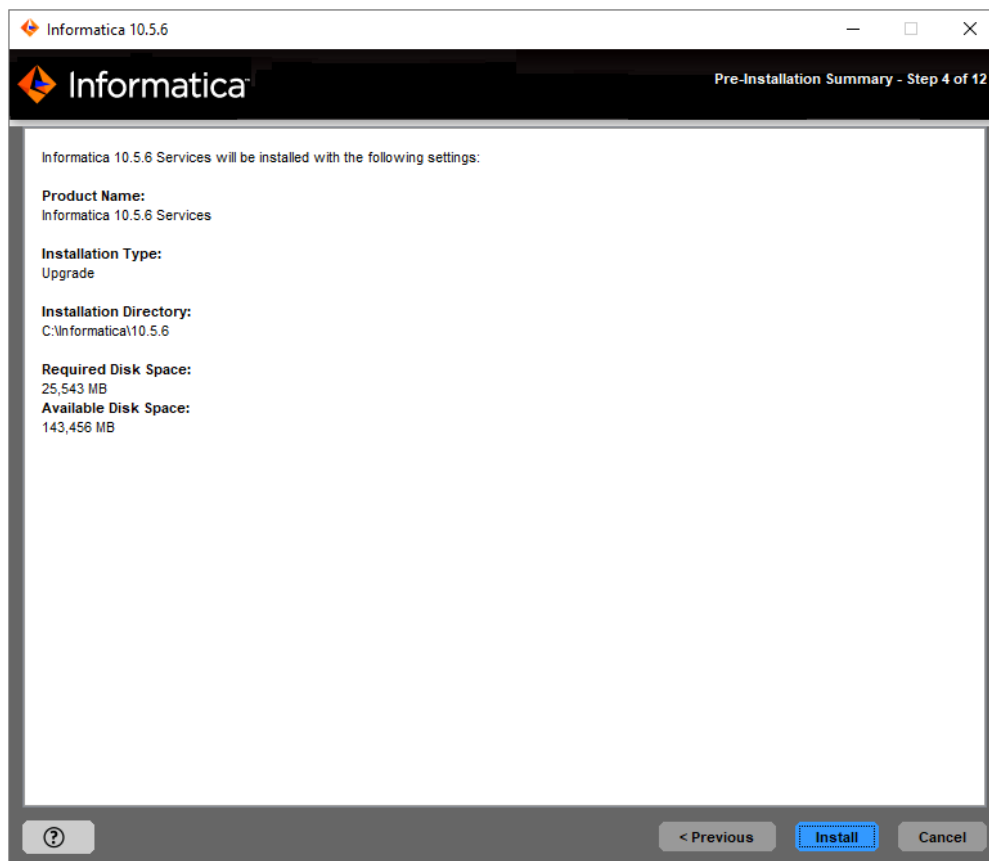
11. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、チェックボックスを選択します。
12. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。
13. [次へ] をクリックします。
[ドメインセキュリティ - 暗号化キー] ページが開かれます。

14. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。
Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしようとしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。
注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは<Informatica installation directory>/isp/config/keys に作成されます。

15. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。

16. **【次へ】** をクリックします。
【インストール前のサマリ】 ページが表示されます。



17. アップグレード情報を確認し、**【インストール】** をクリックして続行します。
アップグレードウィザードによって、Informatica のサーバーファイルが Informatica 10.5.6 のインストールディレクトリにインストールされます。
アップグレードを続行する前に Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
18. **【OK】** をクリックします。

[ドメイン環境設定リポジトリのアップグレード] ページが表示されます。

Informatica 10.5.6

Informatica Domain Configuration Repository Upgrade - Step 5A of 12

Enter database information for the domain configuration repository.

Database type: Oracle

Database user ID: Satish11

Database user password: ●●●●●●

Database connection

☒ Enter the JDBC connection string.

jdbc:informatica:oracle://invbkrh74rnd02.informatica.com:1521;ServiceName=QA18C1.informatica.com

Test Connection

Next > Cancel

ゲートウェイノードをアップグレードしている場合は、アップグレードされるドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウントの情報が表示されます。

作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリについて表示されるプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザーアカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。

以前のバージョンの接続文字列がインストール時に作成された方法に基づいて、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース接続文字列が表示されます。

- 以前のバージョンがインストール時に JDBC URL を使用した場合は、データベースのアドレスとサービス名を含む JDBC 接続プロパティが表示されます。

必要に応じて、追加の JDBC パラメータを指定して JDBC URL に含めることができます。追加の JDBC パラメータを指定するには、JDBC パラメータを選択して、有効な JDBC パラメータ文字列を入力します。

- 以前のバージョンでインストール時にカスタム JDBC 接続文字列が使用された場合は、カスタム接続文字列が表示されます。

追加の JDBC パラメータは指定できません。

19. **【テスト接続】** をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、**【OK】** をクリックして続行します。
20. **【ドメインおよびノードの構成】** ページで、ドメイン名、ノード名、ノードホスト名、およびノードのポート番号を入力します。HTTPS 設定にカスタムキーストアファイルを使用している場合は、カスタムキーストアのパスワードとキーストアファイルを入力します。

Informatica 10.5.6

Domain and Node Configuration - Step 8 of 12

Enter information for the Informatica domain.

Domain name:

Node name:

Node host name:

Node port number:

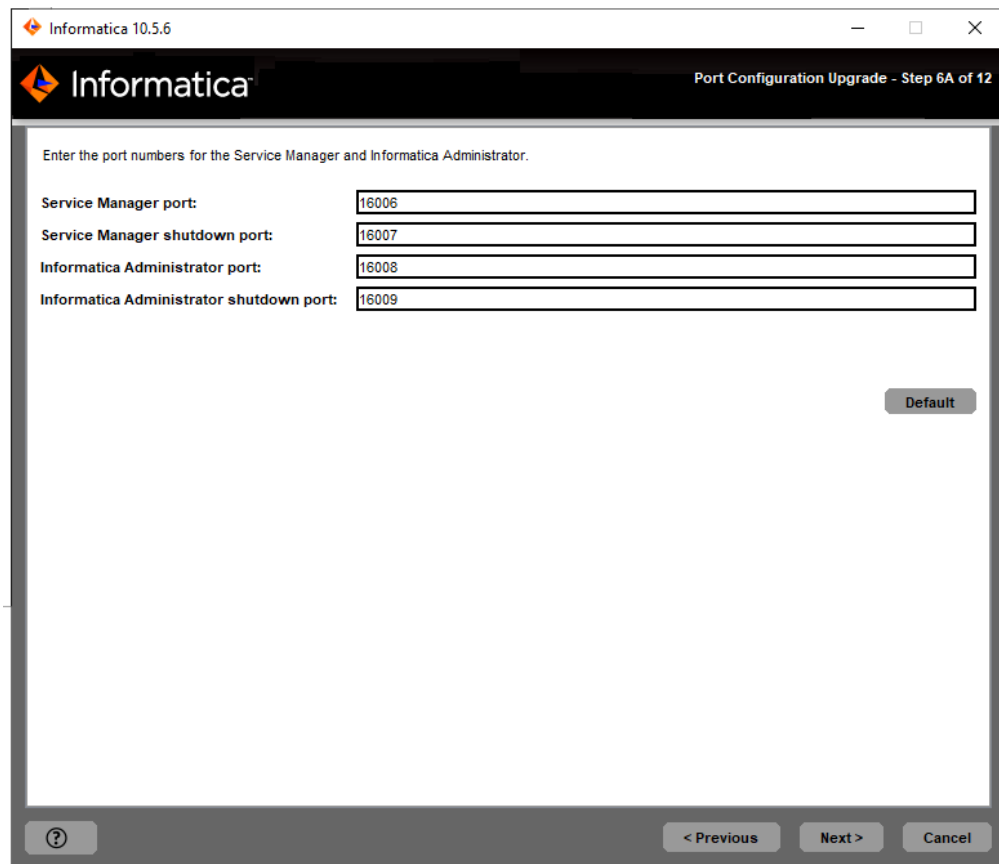
Enter the following custom keystore file information. Required if you use a custom keystore file for HTTPS configuration.

Custom keystore password:

Custom keystore file:

Buttons: ? < Previous Next > Cancel

21. **【次へ】** をクリックします。
【ポート設定のアップグレード】 ページが表示されます。
22. **【ポート設定のアップグレード】** ページで、サービスマネージャおよび Administrator ツールの開始ポート番号とシャットダウンポート番号を入力します。



Informatica 10.5.6

Port Configuration Upgrade - Step 6A of 12

Enter the port numbers for the Service Manager and Informatica Administrator.

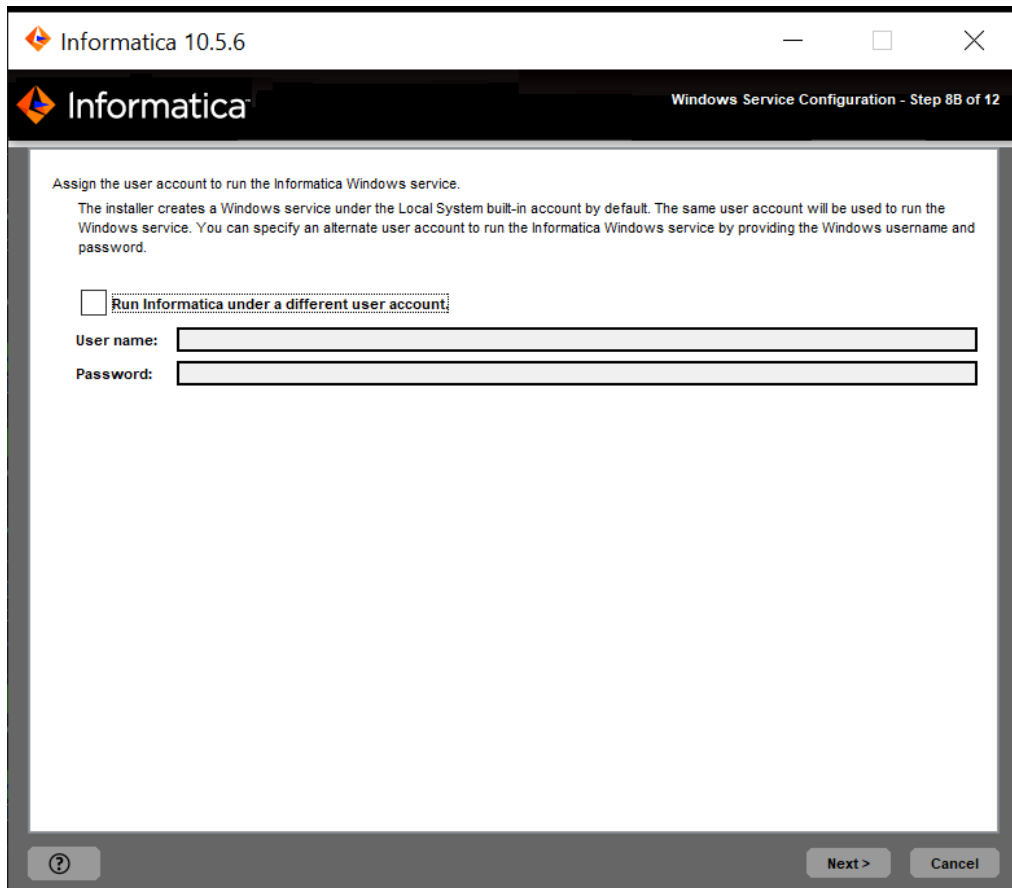
Service Manager port:	16006
Service Manager shutdown port:	16007
Informatica Administrator port:	16008
Informatica Administrator shutdown port:	16009

Default

? < Previous Next > Cancel

23. [次へ] をクリックします。

[Windows サービスの設定] ページが表示されます。



Windows では、アップグレードウィザードによって Informatica を起動するためのサービスが作成されます。デフォルトでは、サービスはインストールに使用されるアカウントと同じユーザーアカウントで実行されます。別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行できます。

24. 別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行することを選択します。

次のユーザーアカウント情報を入力します。

プロパティ	説明
別のユーザーアカウントで Informatica を実行する	別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザー名	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウント。 次の形式を使用します。 <domain name>\<user account> このユーザーアカウントには、[オペレーティングシステムの一部として機能] 権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントのパスワード。

25. [次へ] をクリックします。

[インストール後のサマリ] ページが表示されます。

26. **【完了】** をクリックすると、インストール手順が完了し、インストーラが終了します。

アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

コンソールモードでのアップグレード

UNIX または Linux では、コンソールモードでアップグレードを実行できます。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit、Back および Help という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使用しないでください。

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. シェルコマンドラインで、インストールファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
4. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。

環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。

5. Informatica をアップグレードするために、**[2]** キーを押します。
6. Informatica Upgrade Advisor を実行するには、**1** キーを押します。

Informatica では、Informatica サービスのインストールプロセスを容易にするためのユーティリティを用意しています。このユーティリティは、Informatica サービスをアップグレードする前に実行します。Informatica Upgrade Advisor を使用することで、アップグレードを実行する前にサービスを検証し、ドメイン内の廃止されたサービスを確認することができます。

アップグレードを続行する前に、アップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

7. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **[2]** を押してアップグレードを続行します。
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、
<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールでは、使用状況データの収集を無効にすることができます。
8. **【アップグレードの前提条件】** ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。
アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
9. アップグレード情報を確認し、**[Enter]** キーを押して続行します。
【アップグレードディレクトリ】 パネルが表示されます。
10. プロンプトで、アップグレードする Informatica バージョンのディレクトリ、および Informatica 10.5.6 にアップグレードするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要のあるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica 10.5.6 のディレクトリ	Informatica 10.5.6 のインストール先ディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % () { } [] , ; ' 注: á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。

11. 次のインストールオプションから、要件に基づいてアップグレード環境を選択します。
 - サンドボックス。概念の証明用、または最小限のユーザーによるサンドボックスとして使用します。
 - 開発環境。設計環境用に使用します。
 - テスト。本番環境に近い大規模な処理環境用に使用します。
 - 本番環境。エンドユーザー向けの大規模な処理と高レベルの同時実行性を備えた本番環境で使します。
12. ノードのホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリを変更するかどうかを選択します。以前のバージョンと同じノード設定を使用するには、**[1]** キーを押します。ノード設定を変更するには、**[2]** キーを押します。
[コンポーネントの選択] パネルが表示されます。
13. Informatica サービスをアップグレードするには、**[1]** キーを押します。
14. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを選択します。
 - ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、**1** を押します。
 - インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、**2** を押します。
 デフォルトは 1 です。
15. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。複数のパッケージがある場合はカンマで区切ります。
デフォルトは 1 です。
16. **Enter** キーを押します。
[ドメインセキュリティ - 暗号化キー] パネルが表示されます。
17. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。
[インストール前のサマリ] ページが表示されます。
18. アップグレード情報を確認し、**Enter** キーを押して続行します。
ドメインのアップグレードが完了すると、**[ドメイン設定リポジトリ]** パネルが表示されます。
19. **Enter** キーを押してアップグレードを続行します。

インストーラによって、サーバーファイルが Informatica 10.5.6 のインストールディレクトリにコピーされます。

アップグレードするドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウントの情報が表示されます。以前のバージョンの接続文字列がインストール時に作成された方法に基づいて、ドメイン環境設定リポジトリのデータベース接続文字列が表示されます。

- 以前のバージョンでインストール時に JDBC URL を使用していた場合は、インストーラでデータベースアドレスを含む JDBC 接続プロパティが表示されます。
- 以前のバージョンでインストール時にカスタム JDBC 接続文字列を使用していた場合は、インストーラでカスタム接続文字列が表示されます。

20. JDBC URL を使用する場合は、追加のパラメータを指定して接続文字列に含めることができます。

カスタム接続文字列を使用する場合は、追加のパラメータを指定できません。

21. 情報を確認して、**Enter** キーを押します。

アップグレードが完了し、**[インストール後のサマリ]** パネルが表示されます。

22. **[Enter]** キーを押すとインストール手順が完了し、インストーラが終了します。

アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでは、ユーザーが操作することなくアップグレードを実行できます。

サイレントモードでは、同じマシンのドメインと同じドメイン環境設定リポジトリデータベースのドメインをアップグレードできます。

ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica ドメインサービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシンにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

プロパティファイル内のパスワードの暗号化

インストーラをサイレントモードで実行するときにオプションの指定に使用するプロパティファイルで設定するパスワードを暗号化できるユーティリティが、インストーラには含まれています。Informatica では、複数の 256 ビットキーを含む AES 暗号化を使用してパスワードを暗号化します。

ユーティリティは、暗号化するパスワードごとに実行します。ユーティリティを実行するときは、パスワードの値をコマンドプロンプトでプレーンテキストで指定します。ユーティリティは、暗号化された形式のパスワードを出力として生成します。出力には次のプレフィックスが含まれます。=INSTALLER:CIPHER:AES:256=

プレフィックスを含む完全な出力文字列をコピーして、パスワードプロパティの値としてプロパティファイル内に貼り付けます。インストーラをサイレントモードで実行すると、インストールフレームワークによってパスワードが復号化されます。

1. 以下のユーティリティのディレクトリに移動します。

```
<Installer directory>/properties/utils/passwd_encryption
```

2. ユーティリティを実行します。<password>の値として暗号化するプレーンテキストのパスワードを指定します。

- Linux および UNIX では、次のコマンドを実行します。

```
sh install.sh <password>
```

- Windows では、次のコマンドを実行します。

```
install.bat <password>
```

3. 暗号化されたパスワード文字列を出力からコピーして、対応するパスワードの値として.properties ファイルに貼り付けます。

次の例は、DOMAIN_PSSWD プロパティの値として設定された、暗号化されたパスワードを示しています。

```
DOMAIN_PSSWD==INSTALLER:CIPHER:AES:256=mjkjmdR2kzFJizfRWIOPg==
```

プロパティファイルの作成

Informatica には、2 つのバージョンのプロパティファイルがあります。いずれかのファイルを使用して、インストールのオプションを指定します。

サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイル

ノード設定を変更し、ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイルを使用します。

サイレント入力アップグレード新規設定プロパティファイルには、Informatica ドメインサービスをサイレントモードでアップグレードするために必要な設定プロパティが含まれています。ファイルの各プロパティに設定する適切な値を検討する場合はこのファイルを使用します。

デフォルトサイレント入力アップグレードプロパティファイル

ユーザーの操作なしで Informatica ドメインサービスをアップグレードするには、サイレント入力アップグレードプロパティファイルを使用します。

デフォルトのサイレント入力プロパティファイルには、多数の設定プロパティ用のデフォルト値が含まれます。デフォルトのプロパティ値を使用して Informatica ドメインサービスをアップグレードする場合は、このファイルを使用します。

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのアップグレードプロパティファイルは SilentInput_upgrade.properties という名前で、インストーラのダウンロード場所にあります。ファイルをカスタマイズした後、SilentInput.properties というファイル名で保存します。

1. インストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. SilentInput_upgrade.properties という名前のファイルを検索します。
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。

次の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	Informatica をインストールするか、アップグレードするかを指定します。 値が 0 の場合、インストーラは Informatica の新規インストールを実行します。値が 1 の場合、インストーラは以前のバージョンの Informatica をアップグレードします。
USER_INSTALL_DIR	新しいバージョンの Informatica サービスをインストールするディレクトリ。以前のバージョンの Informatica サービスが存在するディレクトリと同じディレクトリは使用できません。
UPG_BACKUP_DIR	アップグレードする Informatica サービスの以前のバージョンを含むディレクトリ。
INSTALL_HADOOP_LIBRARIES	インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを決定します。インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、値を true に設定します。ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、値を false に設定します。
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	サポートされているパッケージのリストから、インストールする統合パッケージを指定します。インストールするディストリビューションパッケージを入力します。複数の場合はカンマで区切ります。
KEY_DEST_LOCATION	このインストールで作成されたノードの暗号化キーを格納するディレクトリ。
DOMAIN_USER	Informatica ドメインのユーザー名。
DOMAIN_PSSWD	Informatica ドメインのパスワード。
ENABLE_USAGE_COLLECTION	Informatica DiscoveryIQ を有効にします。これは、データの状況とシステムの統計値に関するレポートを定期的に Informatica に送信する製品使用状況ツールです。Informatica DiscoveryIQ は、Informatica ドメインをインストールして設定してから 15 分後に、データを Informatica にアップロードします。その後、ドメインはデータを 30 日ごとに送信します。Informatica に使用統計を送信しないように選択することもできます。使用統計の送信を無効にする方法の詳細については、『 <i>Informatica Administrator ガイド</i> 』を参照してください。 アップグレードするには、値を 1 に設定する必要があります。

4. プロパティファイルを「SilentInput.properties」という名前で保存します。

サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。

Windows で、管理者としてコマンドプロンプトを開きます。管理者としてコマンドプロンプトを開かないと、Windows システム管理者は、Informatica インストールディレクトリのファイルにアクセスするときに問題が生じることがあります。

2. サーバーインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む SilentInput.properties ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントインストール実行可能ファイルを実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。Informatica_<Version>_Services_InstallLog<timestamp>.log がインストールディレクトリに作成されると、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、サイレントアップグレードログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。サイレントアップグレードログファイルの名前は silentErrorLog.log です。

このインストーラは、Windows ではルートディレクトリに、UNIX ではユーザーホームディレクトリにログファイルを作成します。

ドメインアップグレードのトラブルシューティング

ドメインのアップグレード中またはアップグレード後に問題が発生した場合は、次のトラブルシューティングのヒントを考慮してください。

ドメインのアップグレードが失敗します。

アップグレードが正常に完了しない場合は、ログファイルを調べて障害の原因を特定します。アップグレードログファイルは、新しいバージョンの Informatica がインストールされているディレクトリのルートにあります。次のログファイルを確認します。Informatica_<Version>_Services_Upgrade.log

アップグレードが続けて失敗する場合、バックアップからドメイン環境設定リポジトリデータベースをリストアし、インストーラを再度実行します。

Administrator ツールにアクセスすると、404 エラーメッセージが表示されます。

安全な通信のために Administrator ツールが設定されている場合、Administrator ツールにアクセスしたときに、404 Not Found メッセージが表示される場合があります。この問題は、ゲートウェイノードを実行しているマシンが、Administrator ツールへの HTTPS 接続に使用されているキーストアファイルにアクセスできない場合に発生します。キーストアファイルをアクセス可能な場所にコピーしてから、ドメインをシャットダウンします。infasetup UpdateGatewayNode コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

アップグレード中またはアップグレード後にドメインがクラッシュします。

アップグレード中またはアップグレード後にドメインがクラッシュする場合は、ドメインのバックアップから siteKey ファイルを復元するか、ドメインの前のバージョンで siteKey を生成した時に指定したものと同一キーワードとドメイン名を使用して暗号化キーを生成します。

マルチノード設定では、マスターノードとは異なるサイトキーを使用するとエラーが発生する可能性があります。

マルチノード設定の場合に、別のサイトキーを使用すると、次のエラーが発生する可能性があります。

```
021-03-03 12:51:44,795 FATAL [Domain Monitor] [DOM_10061] Cannot register node [newISPNode1]
with the domain because the master gateway node is not running or is not connected to the
domain. Verify that all gateway nodes are running on the domain.
```



```
com.informatica.isp.corecommon.exceptions.ISPException: [CCM_10342] The following exception occurred: [[FrameworkUtils_0018] The encryption key for the node is different from the encryption for the domain. All the nodes in a domain must use the same encryption key. To change the encryption key for the domain, run the infasetup migrateEncryptionKey command on all nodes in the domain.]])
```

この問題を解決するには、マスタノードと同じサイトキーを使用していることを確認します。

第 7 章

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要, 60 ページ](#)
- [別のデータベースへの移行, 61 ページ](#)
- [別のマシンへのインストールの移行, 61 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 67 ページ](#)
- [コンソールモードでのアップグレード, 79 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 86 ページ](#)
- [ノード設定の変更の完了, 86 ページ](#)

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードの概要

ノード設定の変更を伴うドメインのアップグレードを行う前に、アップグレードの準備として以下の手順を実行する必要があります。ノード設定にどのような変更を行うかによって、実行する手順は異なります。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行できます。または、Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行できます。

ドメインをアップグレードする場合は、ノードホスト名、ポート番号、またはドメイン環境設定リポジトリデータベースへの変更を許可するようにノード設定を変更できます。

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいマシンのノードを設定するようにノード設定を変更します。ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行した場合は、ドメインをアップグレードして新しいデータベースを設定するようにノード設定を変更します。

インストーラを実行する前にアップグレード前のタスクを完了します。

ドメイン設定リポジトリデータベースを変更してアップグレードする前に、Informatica インストーラから i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプ、データベースバージョン、オペレーティングシステム、またはマシンのインストールサポートを確認してください。i10Pi の設定に関する詳細については、『*Informatica インストールガイド*』を参照してください。

Windows では、グラフィカルモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。UNIX または Linux では、コンソールモードまたはサイレントモードでインストーラを実行できます。

別のデータベースへの移行

ドメイン環境設定リポジトリのデータベースのタイプまたはバージョンのサポートが終了した場合は、リポジトリを別のサポートされるデータベースに移行する必要があります。ドメインをアップグレードする前に、以前の Informatica インスタンスのリポジトリを移行します。

注: ノード設定を変更しない場合は、アップグレード前に Informatica Upgrade Advisor を実行できます。設定の異なるノードに移行する前に Informatica Upgrade Advisor を実行すると、一部のデータベースやノードの設定に不具合が発生する可能性があります、それらの不具合は無視できます。

別のデータベースに移行する場合は、Informatica インストーラにある i10Pi を実行して、新しいデータベースタイプまたは新しいバージョンのインストールサポートをテストします。i10Pi の設定に関する詳細については、『Informatica インストールガイド』を参照してください。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

1. ドメインをシャットダウンします。
2. infasetup BackupDomain コマンドを使用して、ドメイン環境設定データベーステーブルがファイルにバックアップされていることを確認します。
3. データベーススキーマとユーザーアカウントをサポートされるデータベース中に作成します。
4. 別のデータベースでサポートされているインストールをテストするために作成したデータベースユーザーアカウントを使用して、Informatica インストーラにある i10Pi を実行します。このデータベースユーザーが、アップグレード後のバージョンでサポート対象であると i10pi に表示されることを確認します。
5. infasetup RestoreDomain コマンドを使用して、バックアップファイル中のドメイン環境設定を指定したデータベーススキーマにリストアします。
6. アップグレードインストーラを実行します。
7. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいドメイン環境設定リポジトリデータベースに接続するようにゲートウェイノードを設定できます。すべてのゲートウェイノードには、ドメイン環境設定を取得および更新するためのドメイン環境設定リポジトリへの接続が必要です。作業ノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションをオフにします。

別のマシンへのインストールの移行

サポートが終了しているオペレーティングシステムのマシンに Informatica サービスがインストールされている場合、ドメインをアップグレードする前に、別のマシンにそのインストールを移行する必要があります。

製品要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、「[Product Availability Matrix](#)」を参照してください。

ドメインをアップグレードする前に、新しいバージョンの Informatica を実行するマシン上で、次の手順を実行します。

1. Informatica インストーラから実行可能な i10Pi を使用して、新しいマシンのインストールサポートをテストします。
2. 以前のマシンから新しいマシンへ、すべてのインストールバイナリを含むインストールディレクトリをコピーします。
3. ポート要件を確認します。

4. システムユーザーアカウントを作成します。
5. データベースへのアクセスを必要とするすべてのサービスのネイティブ接続を構成します。
6. サポートされる新しいマシンでアップグレードインストーラを実行します。

移行したノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションを選択します。このオプションを選択すると、新しいマシンのノードの設定を更新できます。別のマシンに移行しなかったドメイン内の他のノードをアップグレードする場合は、**【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】** オプションをオフにします。

手順 1. インストールディレクトリのコピー

以前のバージョンの Informatica のディレクトリを、新しいバージョンの Informatica を実行するマシンにコピーします。

例えば、以前のバージョンの Informatica が `C:\Informatica\<version>` にインストールされている場合、`C:\Informatica\<version>` ディレクトリとサブディレクトリを新しいマシンにコピーします。

アップグレードインストーラを実行するとき、新しいマシン上の Informatica インストールディレクトリを、アップグレード対象のディレクトリとして指定します。

手順 2. ポート要件の確認

インストーラによって Informatica ドメイン内のコンポーネントのポートが設定され、一部のアプリケーションサービスに使用する動的ポートの範囲が指定されます。

コンポーネントに使用するポート番号と、アプリケーションサービスに使用する動的ポート番号の範囲を指定することができます。あるいは、インストーラによって提供されるデフォルトのポート番号を使用することができます。ポート番号が Informatica サービスをインストールするマシンで利用可能かどうかを確認します。

以下の表に、設定できるポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。サービスマネージャは、このポートで受信する接続要求をリスンします。クライアントアプリケーションは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。 Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用して、ドメインと通信します。このポートは、SQL データサービスの JDBC/ODBC ドライバ用のポートでもあります。デフォルトは 6006 です。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6007 です。
Informatica Administrator ポート	Informatica Administrator が使用するポート番号。デフォルトは 6008 です。
Informatica Administrator HTTPS ポート	デフォルトポートはありません。サービスの作成時に必要なポート番号を入力します。このポートを 0 に設定すると、管理者ツールへの HTTPS 接続が無効になります。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Informatica Administrator のサーバーシャットダウンを制御するポート番号。Informatica Administrator は、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。デフォルトは 6009 です。

ポート	説明
最小ポート番号	このノードで実行するアプリケーションサービスプロセスに割り当てられる動的ポート番号範囲の最小ポート番号。デフォルトは 6014 です。
最大ポート番号	このノードで実行するアプリケーションサービスプロセスに割り当てられる動的ポート番号範囲の最大ポート番号。デフォルトは 6114 です。

注: ポートの競合がある場合、サービスおよびノードは起動に失敗する場合があります。アップグレード後に、アプリケーションサービスのポートの範囲を更新することができます。

手順 3。システムユーザーアカウントの作成

システムユーザーアカウントは、Windows または UNIX で作成できます。

Windows の場合:

システムユーザーアカウントを作成し、インストールを行ってから Informatica サービスを実行します。Informatica サービスのインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

マシンにログインしたユーザーアカウントを使用して Informatica をインストールし、別のユーザーアカウントで実行することができます。ローカルアカウントまたはドメインアカウントを作成して、Informatica をインストールするか、または Informatica Windows サービスを実行することができます。

注: Windows の信頼関係接続を使用する Microsoft SQL Server 上のリポジトリにアクセスするには、ドメインアカウントを作成します。

ユーザーアカウントは、インストーラを実行するための、または Informatica Windows サービスを実行するための以下の権限が必要になります。

- **ログインユーザーアカウント。** このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインします。
- **別のユーザーアカウント。** このユーザーアカウントは、管理者グループのメンバであり、サービスとしてログオン、およびオペレーティングシステムの一部として機能の権限が必要です。Informatica をインストールする前に、このユーザーアカウントを使用してログインする必要はありません。インストール中に、Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントを指定することができます。

UNIX の場合:

Informatica のインストールに使用するユーザーアカウントに、インストールディレクトリに対する書き込み権限があることを確認します。

手順 4。サービスマシンへのネイティブ接続の設定

アプリケーションサービスとデータベース間にネイティブ接続を確立するには、アクセスするデータベースのデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

ネイティブドライバは、データベースサーバーおよびクライアントソフトウェアにパッケージ化されています。データベースにアクセスする必要があるマシンに接続を設定します。アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確認するには、データベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールし、適切なデータベースクライアントライブラリを使用します。

データ統合サービスは、ネイティブデータベースドライバを使って次のデータベースに接続します。

- ソースデータベースとターゲットデータベース。ソースデータベースからデータを読み取って、ターゲットデータベースに書き込みます。
- データオブジェクトキャッシュデータベース。データオブジェクトキャッシュを保存します。
- Profiling ソースデータベース。リレーショナルソースデータベースから読み取って、プロファイルソースに対して実行します。
- プロファイリングウェアハウス。プロファイリング結果をプロファイリングウェアハウスに書き込みます。
- 参照テーブル。マッピングを実行して、参照テーブルと外部データソース間でデータを転送します。

データ統合サービスが単一のノードまたはプライマリノードやバックアップノードで実行されている場合は、データ統合サービスが実行されるマシンにデータベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

データ統合サービスがグリッドで実行されている場合は、計算ロールを持つノードまたはサービスロールと計算ロールの両方を持つノードの各マシンに、データベースクライアントソフトウェアをインストールして接続を設定します。

手順 5. データベースクライアントソフトウェアのインストール

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、所定のマシンにデータベースクライアントをインストールする必要があります。

アプリケーションサービスとデータベース間の互換性を確保するには、適切なデータベースクライアントライブラリを使用して、そのデータベースバージョンと互換性のあるクライアントソフトウェアをインストールします。

Informatica サービスをアップグレードするときは、データ統合サービスを実行するマシンに適切なデータベースクライアントをインストールしてください。

アプリケーションサービスがアクセスするデータベースのタイプに基づいて、次のデータベースクライアントソフトウェアをインストールします。

IBM DB2 Client Application Enabler (CAE)

所定のマシンに Informatica サービスを起動するユーザーとして接続し、そのマシンの接続を設定します。

Microsoft SQL Server 2014 Native Client

既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2014 Native Client をインストールする必要があります。

次の Microsoft の Web サイトからクライアントをダウンロードします。

<http://www.microsoft.com/en-in/download/details.aspx?id=42295>.

Oracle クライアント

互換性のあるバージョンの Oracle クライアントと Oracle データベースサーバをインストールします。また、必要とするすべてのマシンに Oracle クライアントの同じバージョンをインストールする必要があります。互換性を確認するには、Oracle に問い合わせてください。

Sybase Open Client (OCS)

Sybase ASE データベースサーバと互換性のあるバージョンの Open Client をインストールします。また、Sybase ASE データベースおよび Informatica をホストするマシンに同じバージョンの Open Client をインストールする必要があります。互換性を確認するには、Sybase に問い合わせてください。

手順 6.UNIX 上でのデータベースクライアントの環境変数の設定

PowerCenter 統合サービス PowerCenter Integration Service プロセスを実行するマシンでデータベースクライアント環境変数を設定します。

データベース環境変数の設定後、データベースとデータベースクライアント間の接続をテストできます。

次の表に、UNIX に設定する必要があるデータベース環境変数を示します。

データベース	環境変数名	データベースユーティリティ	値
Oracle	ORACLE_HOME PATH[PATH] LD_LIBRARY_PATH TNS_ADMIN INFA_TRUSTSTORE	sqlplus	<p>設定: <i><Client InstallDatabasePath></i> 追加: <i><DatabasePath>/bin</i> および <i>USER_INSTALL_DIR/server/bin:\$PATH</i> 設定: <i>\$ORACLE_HOME/lib</i> および <i>USER_INSTALL_DIR/server/bin:\$LD_LIBRARY_PATH</i> tnsnames.ora ファイルの場所に設定: <i>\$ORACLE_HOME/network/admin</i> デフォルトの SSL ドメインの場合、追加: <i>USER_INSTALL_DIR/services/shared/security</i> カスタムの SSL ドメインの場合、 <i>INFA_TRUSTSTORE</i> および <i>INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD</i> を設定 プライベートトラストストアファイルを設定するには、証明書を手動でインポートする必要があります。<i><INFA_JDK_HOME></i>ディレクトリで <i>keytool</i> コマンドを実行し、プライベートトラストストア証明書をインポートします。たとえば、次の <i>keytool</i> コマンドを使用します。</p> <pre>keytool -noprompt -importkeystore -srckeystore <source truststore file path> -srcstorepass <source truststore file password> -srcalias <alias> -srcstoretype JKS -destkeystore <destination truststore file path> -deststorepass <destination truststore file password> -keypass <private key password> -deststoretype JKS</pre>
SQL Server	ODBCHOME ODBCINI ODBCINST PATH LD_LIBRARY_PATH INFA_TRUSTSTORE		<p>設定: <i>USER_INSTALL_DIR/ODBC7.1</i> 設定: <i>\$ODBCHOME/odbc.ini</i> 設定: <i>\$ODBCHOME/odbcinst.ini</i> 追加: <i>/opt/mssql-tools/bin:\$PATH</i> <i>\$PATHUSER_INSTALL_DIR/</i> <i>ODBC7.1:\$PATHUSER_INSTALL_DIR/server/</i> <i>bin:\$PATH</i> 追加: <i>\$ODBCHOME/lib</i> <i>USER_INSTALL_DIR/server/</i> <i>bin:\$LD_LIBRARY_PATH</i> デフォルトの SSL ドメインの場合、追加: <i>USER_INSTALL_DIR/services/shared/security</i> カスタムの SSL ドメインの場合、 <i>INFA_TRUSTSTORE</i> および <i>INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD</i> を設定 プライベートトラストストアファイルを設定するには、証明書を手動でインポートする必要があります。<i><INFA_JDK_HOME></i>ディレクトリで <i>keytool</i> コマンドを実行し、プライベートトラストストア証明書をインポートします。たとえば、次の <i>keytool</i> コマンドを使用します。</p> <pre>keytool -noprompt -importkeystore -srckeystore <source truststore file path> -srcstorepass <source truststore file password> -srcalias <alias> -srcstoretype JKS -destkeystore</pre>

データベース	環境変数名	データベースユーティリティ	値
			<destination truststore file path> -deststorepass <destination truststore file password> -keypass <private key password> -deststoretype JKS

グラフィカルモードでのアップグレード

グラフィカルモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。Windows では、グラフィカルモードでドメインをアップグレードできます。

Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次のファイルを実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

1. 以前のバージョンのインストールに使用したユーザーアカウントでマシンにログインします。
2. アップグレードする Informatica 製品のディレクトリおよびサブディレクトリにアクセスするプロセスを、コマンドプロンプトおよび tail log を含めてすべて停止します。
3. インストールファイルがあるディレクトリのルートに移動して、管理者として install.bat を実行します。
管理者としてファイルを実行するには、install.bat ファイルを右クリックして **【管理者として実行】** を選択します。

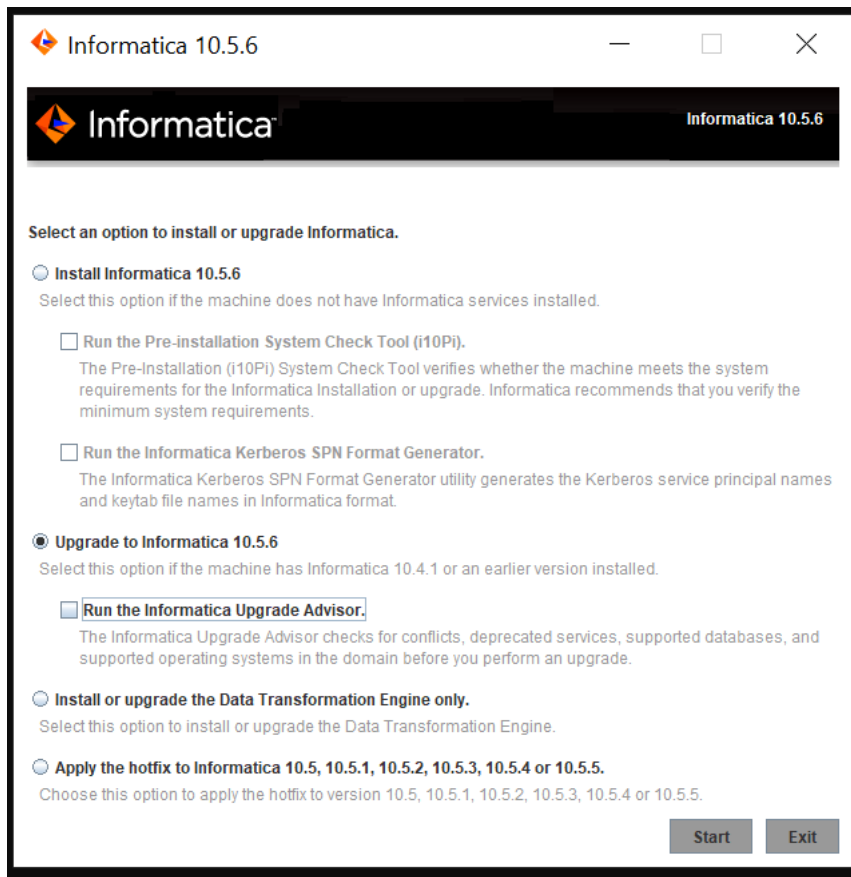
Windows でルートディレクトリから install.bat ファイルを実行して問題が発生した場合、次の場所から install.exe を実行します。

<Informatica installation directory>/server/install.exe

注: **【管理者として実行】** を選択せずにインストーラを実行すると、Windows システム管理者が Informatica インストールディレクトリ内のファイルにアクセスできなくなることがあります。

Informatica 10.5.6 ページが表示されます。

4. **【Informatica 10.5.6 にアップグレード】** を選択します。



Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。

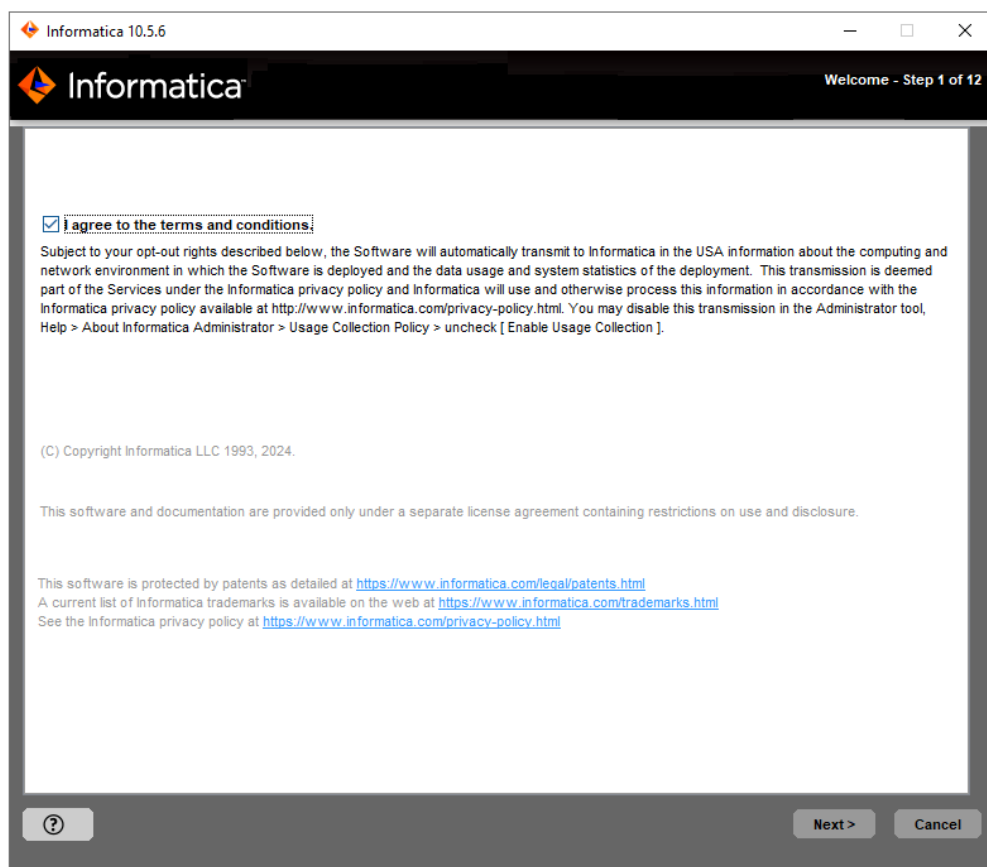
インストール前 (i10Pi) システムチェックツール。

Informatica サービスをインストール中のマシンがインストールに必要なシステム要件を満たしているかを確認します。

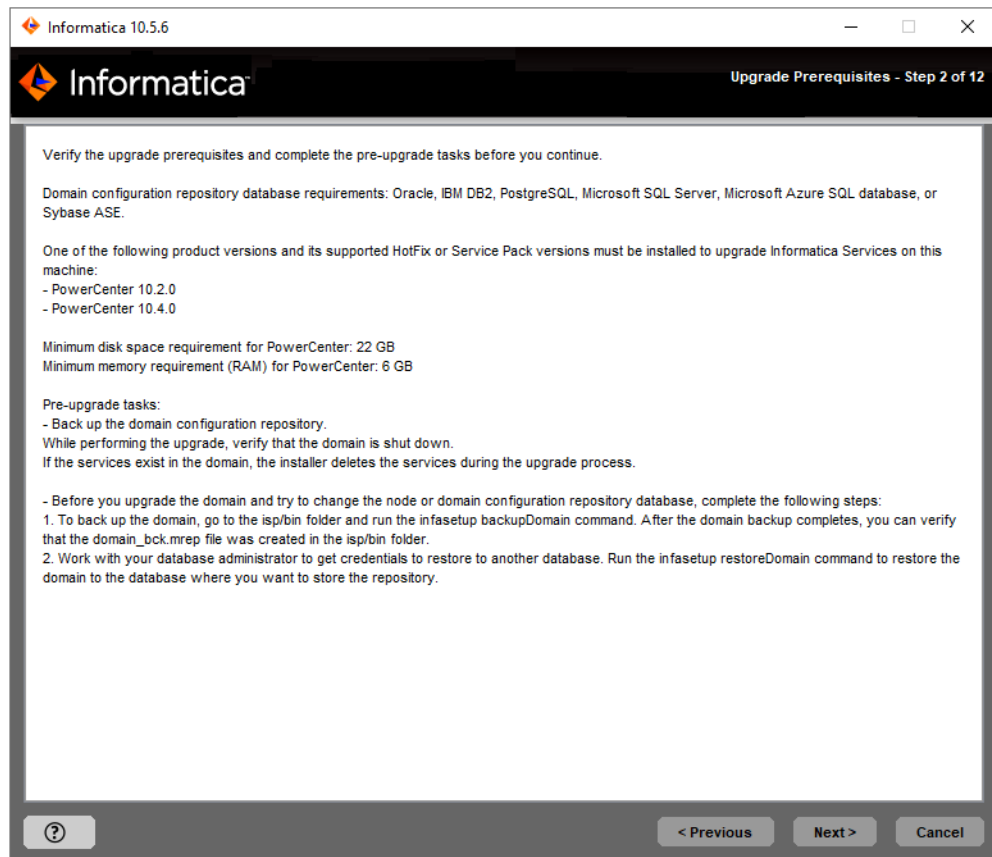
Informatica Upgrade Advisor。

アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメインにないか確認します。

5. **【開始】** をクリックします。
6. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから **【契約条項に同意します】** を選択します。
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。



7. 【アップグレードの前提条件】ページが表示されます。



アップグレードを続行する前に、要件を確認します。

8. [次へ] をクリックします。

【アップグレードディレクトリ】ページが表示されます。

- アップグレードするバージョンの Informatica が含まれたディレクトリと、Informatica 10.5.6 をインストールするディレクトリを入力します。

次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica のディレクトリ	<p>Informatica のインストール先ディレクトリ。</p> <p>インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % () { } [] , ; ' "</p> <p>注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。</p> <p>Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。</p>

- 【ノードのホスト名とポート番号の変更を許可する】を選択します。

アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。

11. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、チェックボックスを選択します。
12. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。
13. **[次へ]** をクリックします。

[ドメインセキュリティ - 暗号化キー] ページが開かれます。

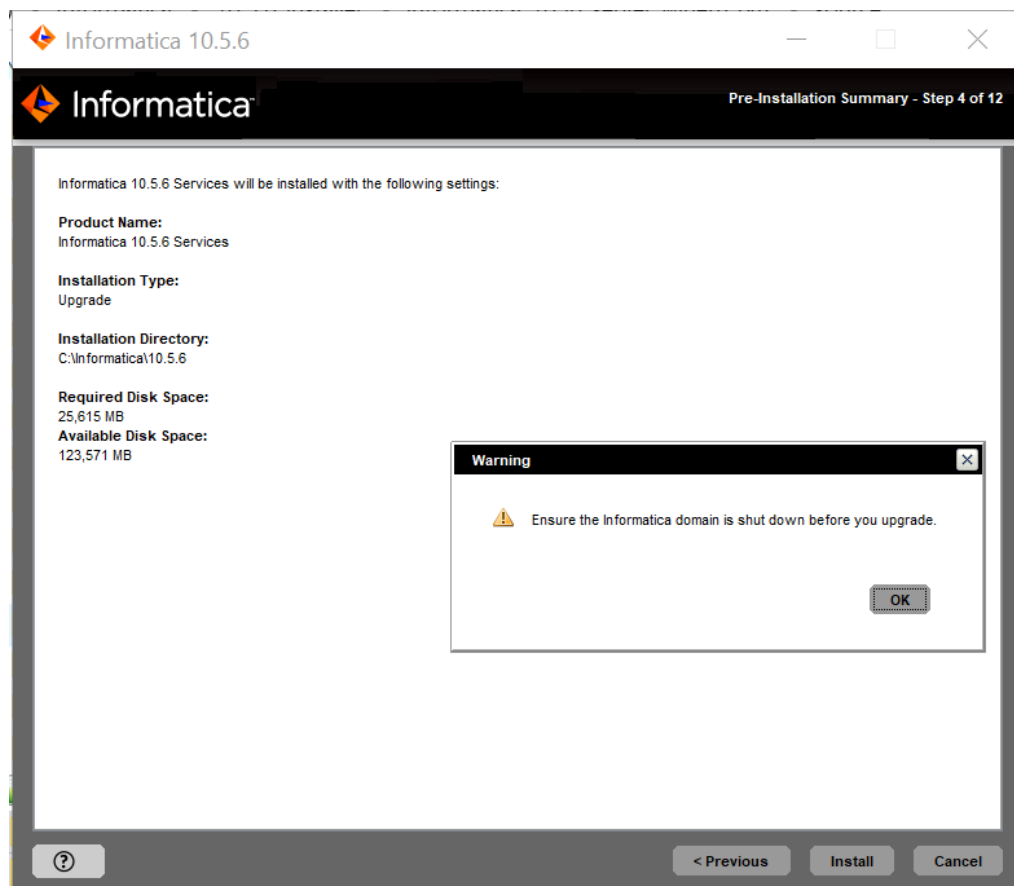
14. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。

Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。

注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは<Informatica installation directory>/isp/config/keys に作成されます。

15. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。
16. **[次へ]** をクリックします。



【インストール前のサマリ】ページが表示されます。

17. アップグレード情報を確認し、**【インストール】** をクリックして続行します。

アップグレードウィザードによって、Informatica のサーバーファイルが Informatica 10.5.6 のインストールディレクトリにインストールされます。

アップグレードを続行する前に Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

18. **【OK】** をクリックします。

19. ゲートウェイノードをアップグレードしている場合は、**【ドメイン環境設定リポジトリのアップグレード】** ページにドメイン環境設定リポジトリのデータベースおよびユーザーアカウント情報を入力します。

Informatica 10.5.6

Domain Configuration Repository Upgrade - Step 5A of 12

Enter database information for the domain configuration repository.

Database type: Oracle

Database user ID: Satish11

Database user password: ●●●●●●

Database connection

☒ Enter the JDBC connection string.

jdbc:informatica:oracle://invkrh74rnd02.informatica.com:1521;ServiceName=QA18C1.informatica.com

Test Connection

Next > Cancel

作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [21 \(ページ 76\)](#)に進みます。

次のデータベースおよびユーザーアカウントを入力します。

プロパティ	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリのデータベース。Oracle、IBM DB2、Microsoft SQL Server、PostgreSQL、または Sybase ASE を選択します。
データベースユーザー ID	ドメイン環境設定リポジトリのデータベースユーザーアカウント。
ユーザーパスワード	データベースユーザーアカウントのパスワード。
テーブルスペース	<p>IBM DB2 で使用できます。テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSize の要件である 32768 バイトを満たすテーブルスペースを指定します。</p> <p>単一パーティションのデータベースでは、このオプションが選択されていない場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。</p> <p>複数パーティションのデータベースでは、このオプションを選択し、データベースのカタログパーティション内に存在するパーティション化されていないテーブルスペースの名前を指定します。</p>

プロパティ	説明
スキーマ名	Microsoft SQL Server および PostgreSQL で使用できます。ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。選択されていない場合、インストーラはデフォルトのスキーマでテーブルを作成します。
信頼関係接続	Microsoft SQL Server で使用できます。信頼関係接続を使用して Microsoft SQL Server に接続するかどうかを示します。信頼認証は、現在のユーザーのセキュリティ資格情報を使用して Microsoft SQL Server へ接続します。選択されていない場合、インストーラは Microsoft SQL Server 認証を使用します。

20. JDBC 接続情報を入力します。

- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、**[JDBC URL]** を選択し、JDBC の URL のプロパティを指定します。
次の表で、指定する必要のある JDBC URL プロパティについて説明します。

プロパティ	説明
データベースアドレス	host_name:port フォーマットのデータベースのホスト名とポート番号。
データベースサービス名	サービスまたはデータベースの名前: <ul style="list-style-type: none"> - Oracle: サービス名を入力します。 - Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。 - IBM DB2: サービス名を入力します。 - Sybase ASE: データベース名を入力します。 - PostgreSQL: データベース名を入力します。
JDBC パラメータ	データベース接続文字列に含めるオプションのパラメータです。パラメータを使用して、データベースのデータベース操作を最適化します。パラメータ文字列が有効であることを確認してください。インストーラは、JDBC URL に文字列を追加する前にパラメータ文字列を検証しません。選択されていない場合、インストーラは追加パラメータなしで JDBC URL 文字列を作成します。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、**[カスタム JDBC 接続文字列]** を選択して接続文字列を入力します。

JDBC 接続文字列で次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://<host name>:<port number>;ServiceName=
```

Oracle database through Oracle Connection Manager を介して Oracle データベースに接続するには、次の接続文字列を使用します。

```
jdbc:Informatica:oracle:TNSNamesFile=<fully qualified path to the tnsnames.ora file>;TNSServerName=<TNS name>;
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```


Windows NT 資格情報を使用する Microsoft SQL Server

Microsoft SQL Server でのモデルリポジトリデータベースの Windows NT 資格情報を指定した場合は、接続文字列構文を指定して、認証方法を NTLM として含めます。

Windows NT 資格情報を持つデフォルトインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:

```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

Windows NT 資格情報を持つ名前付きインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:

```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>\<named instance name>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

Microsoft Azure SQL

```
jdbc:Informatica:sqlserver://  
host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=database_name;SnapshotSerializable=true;EncryptionMethod=SSL;HostNameInCertificate=*.database.windows.net;ValidateServerCertificate=false
```

Active Directory 認証を使用する Azure SQL Database

```
jdbc:informatica: sqlserver://  
<host_name>:<port_number>;database=<database_name>;encrypt=true;AuthenticationMethod=ActiveDirectoryPassword;trustServerCertificate=false;hostNameInCertificate=*.database.windows.net;loginTimeout=<seconds>
```

PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Azure PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database name>;EncryptionMethod=SSL;ValidateServerCertificate=true;CryptoProtocolVersion=TLSv1.2;
```

Sybase

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

21. **【テスト接続】** をクリックしてデータベースに接続できることを確認した後、**【OK】** をクリックして続行します。
22. **【次へ】** をクリックします。
【ドメインおよびノードの設定】 ページが表示されます。
23. 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。

以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	新しいバージョンの Informatica のノードをホストするマシンのホスト名。マシンが 1 つのネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

24. カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルのパスワードと場所を入力します。

次の表に、Informatica Administrator カスタムキーストアのプロパティを示します。

プロパティ	説明
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのプレーンテキストパスワード。
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\

25. **【次へ】** をクリックします。

【ポート設定のアップグレード】 ページが表示されます。

26. 新しいポート番号を入力するか、またはデフォルトのポート番号を使用します。

以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。 ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

27. **【次へ】** をクリックします。

【Windows サービスの設定】 ページが表示されます。

Windows では、アップグレードウィザードによって Informatica を起動するためのサービスが作成されます。デフォルトでは、サービスはインストールに使用されるアカウントと同じユーザーアカウントで実行されます。別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行できます。

28. 別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを選択します。

次のユーザーアカウント情報を入力します。

プロパティ	説明
別のユーザーアカウントで Informatica を実行する	別のユーザーアカウントで Windows サービスを実行するかどうかを指定します。
ユーザー名	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウント。 次の形式を使用します。 <domain name>\<user account> このユーザーアカウントには、[オペレーティングシステムの一部として機能]権限を付与する必要があります。
パスワード	Informatica Windows サービスを実行するユーザーアカウントのパスワード。

29. **【次へ】** をクリックします。

【インストール後のサマリ】 ページが表示されます。

30. **【完了】** をクリックすると、インストール手順が完了し、インストーラが終了します。

アップグレードウィザードで実行されたタスクの詳細と、インストールされたコンポーネントの設定を確認するには、upgrade.log ファイルを参照してください。

コンソールモードでのアップグレード

コンソールモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。Linux または UNIX では、ドメインをコンソールモードでアップグレードできます。

コンソールモードでインストーラを実行する場合、Quit および Back という単語は予約語です。これらの単語を入力テキストで使わないでください。

1. シェルコマンドラインで、ルートディレクトリにある install.sh ファイルを実行します。
ロケール環境変数が設定されていることを確認するよう求めるメッセージが表示されます。
2. 環境変数が設定されていない場合は、**N** キーを押してインストーラを終了し、必要に応じて環境変数を設定します。
環境変数が設定されている場合は、**Y** キーを押して続行します。
3. Informatica をアップグレードするために、**2** キーを押します。
Informatica には、Informatica サービスのインストールプロセスを簡単にするユーティリティがあります。Informatica サービスをアップグレードする前に、次のユーティリティを実行できます。
Informatica Upgrade Advisor。
アップグレードを実行する前にサービスを検証し、廃止されたサービスがドメインにないか確認します。
アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。
4. **Informatica 10.5.3** にアップグレードするには、Informatica 10.5.6 キーを押します。

5. Informatica 製品使用ツールキットの契約条項を読んでから [2] を押してアップグレードを続行します。
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、[Informatica privacy policy](#) に従って、この情報を使用または処理します。Administrator ツールでは、使用状況データの収集を無効にすることができます。
6. **【アップグレードの前提条件】** ページに、アップグレードのシステム要件が表示されます。
アップグレードを続行する前に、要件を確認します。
7. プロンプトで、アップグレードするバージョンの Informatica が含まれるディレクトリと、Informatica 10.5.6 をインストールするディレクトリを入力します。
次の表に、指定する必要があるディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica 製品のディレクトリ	アップグレードする Informatica サービスのバージョンを含むディレクトリ。
Informatica のディレクトリ	Informatica のインストール先ディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。以前のバージョンの Informatica サービスを含むディレクトリと同じディレクトリは使用できません。また、パスのディレクトリ名にスペースまたは次の特殊文字を含めることはできません。@ * \$ # ! % () { } [] , ; ' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。 Windows の場合、インストールディレクトリが、現在のマシンに存在する必要があります。

8. ノードのホスト名とポート番号の変更を許可するには、**2** と入力します。
アップグレードする Informatica のインストールの設定を変更するには、このオプションを使用します。別のマシンにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいマシンの設定に合わせて変更します。別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードしている場合、ノード設定を新しいデータベースの設定に合わせて変更します。
9. Informatica インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを選択します。
 - ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、**1** を押します。
 - インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、**2** を押します。
 デフォルトは 1 です。
10. ディストリビューションパッケージのインストールを選択した場合は、リストからインストールするパッケージを 1 つ以上選択します。複数のパッケージがある場合はカンマで区切ります。
デフォルトは 1 です。
11. Informatica ドメインに使用する暗号化キーのディレクトリを入力します。

Informatica では、Informatica ドメインに保存される機密データ（パスワードなど）を暗号化キーを使用して保護します。アップグレードする場合は、アップグレードしているノード上の暗号化キーを保存するディレクトリを入力する必要があります。

注: Informatica ドメインのすべてのノードは、同じキーワードおよび暗号化キーを使用します。ドメイン名、暗号化キーのキーワード、および暗号化キーファイルは安全な場所に保管する必要があります。ドメインの暗号化キーを変更するときや、リポジトリを別のドメインに移すときに暗号化キーが必要になります。

プロパティ	説明
暗号化キーディレクトリ	ドメインに対する暗号化キーを格納するディレクトリです。デフォルトでは、暗号化キーは次のディレクトリに作成されます: <Informatica installation directory>\isp\config\keys

12. Informatica ドメインのユーザー名とパスワードを入力します。

13. アップグレード情報を確認し、**[Enter]** キーを押して続行します。

インストーラによって、サーバーファイルが Informatica 10.5.6 のインストールディレクトリにコピーされます。

アップグレードを続行する前にアップグレードする Informatica ドメインをシャットダウンするよう求める警告が表示されます。

14. **Enter** キーを押します。

15. ゲートウェイノードをアップグレードする場合は、ドメイン環境設定リポジトリに使用するデータベースを選択します。

作業ノードをアップグレードしている場合は、ドメイン環境設定リポジトリの情報は表示されません。データベース接続情報は変更できません。手順 [18](#) に進みます。

以下の表に、ドメイン環境設定リポジトリに使用できるデータベースを示します。

プロンプト	説明
データベースタイプ	ドメイン環境設定リポジトリ用データベースのタイプ。次のオプションから選択します。 1 - Oracle 2 - Microsoft SQL Server 3 - IBM DB2 4 - Sybase ASE 5 - PostgreSQL

16. データベースユーザーアカウントのプロパティを入力します。

以下の表に、データベースユーザーアカウントのプロパティを示します。

プロパティ	説明
データベースユーザー ID	ドメイン設定データベースのユーザーアカウントの名前。
ユーザーパスワード	ドメイン環境設定データベースのユーザーアカウントのパスワードです。

17. データベースのパラメータを入力します。セキュアなドメイン環境設定リポジトリを作成しない場合は、データベース用のパラメータを入力します。

- a. IBM DB2 を選択した場合は、テーブルスペースを設定するかどうかを選択し、テーブルスペース名を入力します。

以下の表に、IBM DB2 データベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
テーブルスペースの設定	単一パーティションのデータベースでは、いいえを選択した場合、インストーラによりデフォルトのテーブルスペースにテーブルが作成されます。複数パーティションのデータベースでは、はいを選択する必要があります。 テーブルスペースを指定するかどうかを選択します。 1 - いいえ 2 - はい
テーブルスペース	テーブルを作成するテーブルスペースの名前です。pageSize の要件である 32768 バイトを満たすテーブルスペースを指定します。 単一パーティションのデータベースでは、テーブルを作成するテーブルスペースの名前を入力します。 複数パーティションのデータベースでは、データベースのカatalogパーティション内に存在するパーティション化されていないテーブルスペースの名前を指定します。

- b. Microsoft SQL Server を選択した場合は、データベースのスキーマ名を入力します。

以下の表に、Microsoft SQL Server データベースに設定する必要があるプロパティを示します。

プロパティ	説明
スキーマ名	ドメイン設定テーブルを含むスキーマの名前です。このパラメータが空白の場合、インストーラによりデフォルトのスキーマにテーブルが作成されます。

- c. JDBC URL 情報を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**1** を押します。カスタム JDBC 接続文字列を使用して JDBC 接続情報を入力するには、**2** を押します。
- d. JDBC 接続情報を入力します。
- JDBC の URL 情報を使用して接続情報を入力するには、JDBC の URL のプロパティを指定します。

以下の表に、データベース接続情報を示します。

プロンプト	説明
データベースホスト名	データベースのホスト名。
データベースポート番号	データベースのポート番号。
データベースサービス名	サービスまたはデータベースの名前: - Oracle: サービス名を入力します。 - Microsoft SQL Server: データベース名を入力します。 - IBM DB2: サービス名を入力します。 - Sybase ASE: データベース名を入力します。 - PostgreSQL: データベース名を入力します。
JDBC パラメータの設定	追加の JDBC パラメータを接続文字列に追加するかどうかを選択します。 1 - はい 2 - いいえ [はい] を選択する場合は、パラメータを入力するか Enter キーを押してデフォルトを受け入れます。[いいえ] を選択した場合は、インストラによりパラメータを使用せずに JDBC 接続文字列が作成されます。

- カスタム JDBC 接続文字列を使用して接続情報を入力するには、接続文字列を入力します。JDBC 接続文字列で次の構文を使用します。

IBM DB2

```
jdbc:Informatica:db2://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Oracle

```
jdbc:Informatica:oracle://<host name>:<port number>;ServiceName=
```

Oracle database through Oracle Connection Manager を介して Oracle データベースに接続するには、次の接続文字列を使用します。

```
jdbc:Informatica:oracle:TNSNamesFile=<fully qualified path to the tnsnames.ora file>;TNSServerName=<TNS name>;
```

Microsoft SQL Server

```
jdbc:Informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;SelectMethod=cursor;DatabaseName=
```

Windows NT 資格情報を使用する Microsoft SQL Server

Microsoft SQL Server でのモデルリポジトリデータベースの Windows NT 資格情報を指定した場合は、接続文字列構文を指定して、認証方法を NTLM として含めます。

Windows NT 資格情報を持つデフォルトインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:

```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

Windows NT 資格情報を持つ名前付きインスタンスを使用する Microsoft SQL Server:


```
"jdbc:informatica:sqlserver://<host name>\<named instance name>;DatabaseName=<database name>;SnapshotSerializable=true;authenticationMethod=NTLM"
```

Microsoft Azure SQL

```
jdbc:Informatica:sqlserver://  
host_name:port_no;SelectMethod=cursor;DatabaseName=database_name;SnapshotSerializable=true;En  
ryptionMethod=SSL;HostNameInCertificate=*.database.windows.net;ValidateServerCertificate=fal  
se
```

Active Directory 認証を使用する Azure SQL Database

```
jdbc:informatica: sqlserver://  
<host_name>:<port number>;database=<database_name>;encrypt=true;AuthenticationMethod=ActiveDi  
rectoryPassword;trustServerCertificate=false;hostNameInCertificate=*.database.windows.net;log  
inTimeout=<seconds>
```

PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

Azure PostgreSQL

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=<database  
name>;EncryptionMethod=SSL;ValidateServerCertificate=true;CryptoProtocolVersion=TLsv1.2;
```

Sybase

```
jdbc:Informatica:postgresql://<host name>:<port number>;DatabaseName=
```

データベースシステムで必要とされる接続パラメータがすべて接続文字列に含まれていることを確認します。

18. 新しいバージョンの Informatica の設定に合わせて、ノードのホスト名とポート番号を変更します。
以下の表に、指定可能なドメインとノードのプロパティを示します。

プロパティ	説明
ドメイン名	ドメインの名前。デフォルトのドメイン名は、Domain_<MachineName>です。名前は 128 文字以下で、7 ビットの ASCII 文字のみにする必要があります。スペースまたは次のいずれかの文字は使用できません: ` % * + ; " ? , < > \ /
ノード名	アップグレードするノードの名前。
ノードのホスト名	アップグレードするノードをホストするマシンのホスト名。マシンが 1 つのネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を使用します。マシンが複数のネットワーク名を持つ場合は、デフォルトのホスト名を変更して別のネットワーク名を使用します。必要に応じて、IP アドレスを使用できます。 注: localhost は使用しないでください。ホスト名はマシンを明示的に示す必要があります。
カスタムキーストアのパスワード	カスタムキーストアファイルのプレーンテキストパスワード。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアパスワードを入力します。

プロパティ	説明
カスタムキーストアファイル	カスタムキーストアファイルのパスとファイル名。カスタムキーストアファイルを使用して Informatica Administrator を保護し、別のゲートウェイノード設定にアップグレードする場合は、カスタムキーストアファイルを入力します。 このフィールドを空白にすると、インストーラは以下のディレクトリでキーストアファイルを探します。 <Informatica installation directory>\tomcat\conf\
ノードのポート番号	アップグレードするノードのポート番号。ノードのデフォルトのポート番号は 6005 です。
ゲートウェイノードのホスト名	ドメインのゲートウェイノードをホストするマシンのホスト名です。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。
ゲートウェイノードのポート番号	ゲートウェイノードのポート番号。作業ノードをアップグレードする場合に使用できます。

19. ドメインコンポーネントに割り当てられているポート番号が表示されます。
- ポート番号を指定するか、デフォルトのポート番号を使用することができます。
- 以下の表に、指定可能なポートを示します。

ポート	説明
サービスマネージャポート	ノードのサービスマネージャが使用するポート番号。クライアントアプリケーションおよび Informatica コマンドラインプログラムは、このポートを使用してドメインのサービスと通信します。
サービスマネージャのシャットダウンポート	ドメインのサービスマネージャに対するサーバーのシャットダウンを制御するポート番号。サービスマネージャは、このポートでシャットダウンコマンドをリスンします。
Informatica Administrator ポート	Administrator ツールで使用されるポート番号。ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。
Informatica Administrator シャットダウンポート	Administrator ツールがシャットダウンコマンドをリスンするために使用するポート番号。ゲートウェイノードをアップグレードする場合に使用できます。

[インストール後のサマリ] ウィンドウには、アップグレードが正常に完了したかどうかを示すメッセージが表示されます。また、インストールされたコンポーネントとその設定のステータスも表示されます。

アップグレードログファイルを表示して、インストーラが実行したアップグレードタスクの詳細およびインストールされたコンポーネントの設定プロパティを確認できます。

サイレントモードでのアップグレード

サイレントモードでアップグレードする場合は、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードするようにノード設定を変更できます。

ユーザーの操作なしで Informatica サービスをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica サービスをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica インスタンスをホストするマシンにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。
3. アップグレードプロパティファイル内のパスワードを保護します。

ノード設定の変更の完了

Informatica サービスのインストールを別のマシンに移行したという理由で、ドメインのアップグレード中にノード設定の変更を選択した場合は、アプリケーションサービスをアップグレードする前に追加のタスクを実行する必要があります。

次の追加タスクを実行する必要があります。

1. 環境変数を設定します。
2. 動的ポート番号の範囲の確認
3. ノードバックアップディレクトリの場所を確認します。
4. PowerExchange® アダプタを設定します。

注: ドメイン環境設定リポジトリを別のデータベースに移行したという理由で、ドメインのアップグレード時にノード設定の変更を選択した場合、追加のタスクを実行する必要はありません。

ブラウザのキャッシュをクリアする

Administrator ツールにアクセスする前に、ブラウザキャッシュをクリアします。

Windows Internet Explorer では、一時ファイル、クッキー、履歴などの閲覧履歴を削除します。

ブラウザキャッシュをクリアしない場合、以前の Administrator ツールの URL が最新の URL にリダイレクトされず、一部のメニューオプションが表示されないことがあります。

ロケール環境変数の設定

LANG、LC_CTYPE、または LC_ALL を使用して、UNIX コードページを設定します。

異なる UNIX オペレーティングシステムには、同じロケールに対して異なる値が必要です。ロケール変数の値は、大文字と小文字が区別されます。

以下のコマンドを使用して、ロケール環境変数がマシンの言語設定、およびリポジトリで使用するコードページのタイプと互換性があることを確認します。

`locale -a`

このコマンドでは、UNIX オペレーティングシステムにインストールされている言語、および既存のロケールの設定が返されます。

Linux のロケール

Linux 以外のすべての UNIX オペレーティングシステムでは、各ロケールに対して一意の値を持っています。Linux では、さまざまな値を使用して同じロケールを表すことができます。たとえば、「utf8」、「UTF-8」、「UTF8」、および「utf-8」は、Linux マシンでは同じロケールを表しています。Informatica では、Linux マシンでロケールごとに特定の値を使用する必要があります。すべての Linux マシンについて、LANG 環境変数が適切に設定されていることを確認してください。

Oracle データベースクライアントのロケール

Oracle データベースクライアントの場合は、データベースクライアントおよびサーバーへのログインで使用するロケールに NLS_LANG を設定します。ロケール設定は、言語、地域、および文字セットから構成されています。NLS_LANG の値は、設定に応じて異なります。

例えば、値が american_america.UTF8 の場合、C シェルでは次のコマンドで変数を設定します。

`setenv NLS_LANG american_america.UTF8`

マルチバイト文字をデータベースから読み取るには、次のコマンドで変数を設定します。

`setenv NLS_LANG=american_america.AL32UTF8`

データ統合サービスが Oracle データを正常に読み取ることができるように、データ統合サービスマシンに正しい変数を設定する必要があります。

ライブラリパス環境変数の設定

データ統合サービスのプロセスが実行されるマシンで、ライブラリパスの環境変数を設定します。変数名と要件は、プラットフォームとデータベースによって異なります。

LD_LIBRARY_PATH 環境変数を設定します。

以下の表に、各種データベースの LD_LIBRARY_PATH に対して設定する値を示します。

データベース	値
Oracle	<データベースパス>/lib
IBM DB2	<データベースパス>/lib
Sybase ASE	「\${SYBASE_OCS}/lib:\${SYBASE_ASE}/lib:\${LD_LIBRARY_PATH}」
Informix	<データベースパス>/lib
Teradata	<データベースパス>/lib
ODBC	<CLOSEDODBCHOME>/lib
PostgreSQL	\$PGHOME/lib:\${LD_LIBRARY_PATH}

動的ポート番号の範囲の確認

移行されたノードをアップグレードする場合、アップグレードウィザードは、ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるデフォルトの範囲のポート番号を割り当てます。

動的ポート番号のデフォルトの範囲は、6013～6113 です。Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ポート番号のデフォルトの範囲が使用可能になっていることを確認します。このポート番号の範囲を使用できない場合は、Administrator ツールを使用して範囲を更新します。ノードの【プロパティ】ビューの【詳細プロパティ】セクションで、サービスプロセスの動的ポート番号の最小値と最大値を設定します。

ノードバックアップディレクトリの確認

Informatica の新しいバージョンを実行するマシンで、ノードのバックアップディレクトリにアクセスできることを確認します。Administrator ツールで、ノードの【プロパティ】ビューの【詳細プロパティ】セクションの【バックアップディレクトリ】プロパティを表示します。

PowerExchange アダプタの設定

以前のインストールに PowerExchange アダプタが含まれていた場合は、アップグレードされたバージョンの Informatica を実行するマシンで PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。

第 8 章

アプリケーションサービスをアップグレードする前に

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica の環境変数の設定, 89 ページ](#)
- [ロケール環境変数の設定, 90 ページ](#)
- [Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認, 90 ページ](#)
- [ブラウザのキャッシュをクリアする, 91 ページ](#)

Informatica の環境変数の設定

INFA_DOMAINS_FILE および INFA_HOME の各環境変数を設定して、ドメインおよびインストール場所の設定を格納できます。

INFA_DOMAINS_FILE

インストーラにより、domains.infa ファイルが Informatica インストールディレクトリに作成されます。domains.infa ファイルには、ドメイン名、ドメインホスト名、およびドメインホストのポート番号など、ドメイン内のゲートウェイノードの接続情報が含まれています。

INFA_DOMAINS_FILE 変数の値を、domains.infa ファイルのパスおよびファイル名に設定します。

Informatica サービスをインストールするマシンで INFA_DOMAINS_FILE 変数を設定します。Windows では、INFA_DOMAINS_FILE をシステム変数として設定します。

INFA_HOME

INFA_HOME を使用して、Informatica インストールディレクトリを指定します。Informatica ディレクトリ構造を変更する場合は、環境変数に Informatica インストールディレクトリの場所、またはインストールされた Informatica ファイルがあるディレクトリの場所を設定する必要があります。

例えば、任意の Informatica ディレクトリに対してソフトリンクを使用します。いずれの Informatica アプリケーションやサービスでも、実行する必要があるその他の Informatica コンポーネントを見つけられるように INFA_HOME を設定するには、INFA_HOME に Informatica インストールディレクトリの場所を設定します。

ロケール環境変数の設定

LANG、LC_CTYPE、または LC_ALL を使用して、UNIX コードページを設定します。

異なる UNIX オペレーティングシステムには、同じロケールに対して異なる値が必要です。ロケール変数の値は、大文字と小文字が区別されます。

以下のコマンドを使用して、ロケール環境変数がマシンの言語設定、およびリポジトリで使用するコードページのタイプと互換性があることを確認します。

```
locale -a
```

このコマンドでは、UNIX オペレーティングシステムにインストールされている言語、および既存のロケールの設定が返されます。

Linux のロケール

Linux 以外のすべての UNIX オペレーティングシステムでは、各ロケールに対して一意の値を持っています。Linux では、さまざまな値を使用して同じロケールを表すことができます。たとえば、「utf8」、「UTF-8」、「UTF8」、および「utf-8」は、Linux マシンでは同じロケールを表しています。Informatica では、Linux マシンでロケールごとに特定の値を使用する必要があります。すべての Linux マシンについて、LANG 環境変数が適切に設定されていることを確認してください。

Oracle データベースクライアントのロケール

Oracle データベースクライアントの場合は、データベースクライアントおよびサーバーへのログインで使用するロケールに NLS_LANG を設定します。ロケール設定は、言語、地域、および文字セットから構成されています。NLS_LANG の値は、設定に応じて異なります。

例えば、値が american_america.UTF8 の場合、C シェルでは次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG american_america.UTF8
```

マルチバイト文字をデータベースから読み取るには、次のコマンドで変数を設定します。

```
setenv NLS_LANG=american_america.AL32UTF8
```

データ統合サービスが Oracle データを正常に読み取ることができるように、データ統合サービスマシンに正しい変数を設定する必要があります。

Administrator ツールのキーストアファイルの場所の確認

Administrator ツールへの接続を保護するために作成したキーストアファイルを使用していた場合は、Administrator ツールにアクセスする前に、そのキーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前のドメインでインストーラによって作成されたデフォルトのキーストアファイルを使用していた場合は、キーストアファイルの場所を確認する必要はありません。

実行する必要があるタスクは、キーストアファイルを以前に保存した以下の場所に応じて異なります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。

2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、ゲートウェイノードを更新します。

infasetup UpdateGatewayNode コマンドを実行して、キーストアファイルの場所を使用してゲートウェイノードを更新します。ドメイン内の各ゲートウェイノード上でコマンドを実行する必要があります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場合

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場合にキーストアファイルを格納した場合は、ゲートウェイノードを実行するマシンがこのファイルにアクセスできることを確認します。

ブラウザのキャッシュをクリアする

Administrator ツールにアクセスする前に、ブラウザキャッシュをクリアします。

Windows Internet Explorer では、一時ファイル、クッキー、履歴などの閲覧履歴を削除します。

ブラウザキャッシュをクリアしない場合、以前の Administrator ツールの URL が最新の URL にリダイレクトされず、一部のメニューオプションが表示されないことがあります。

第 9 章

アプリケーションサービスのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [アプリケーションサービスのアップグレードの概要, 92 ページ](#)
- [アップグレードウィザードの実行, 94 ページ](#)
- [モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認, 94 ページ](#)

アプリケーションサービスのアップグレードの概要

アプリケーションサービスのアップグレードプロセスは、アップグレード前の Informatica サービスのバージョンによって決まります。

Informatica サービスの各バージョンでは、アプリケーションサービスのアップグレードが必要となります。アプリケーションサービスをアップグレードする場合、依存サービスもアップグレードする必要があります。アプリケーションサービスのアップグレード時には、アップグレードプロセスによって、そのサービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

[サービスアップグレード] ウィザード、各サービスの [アクション] メニュー、またはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードします。サービスアップグレードウィザードは、適切な順序で複数のサービスをアップグレードし、依存関係をチェックします。各サービスの [アクション] メニューまたはコマンドラインを使用してアプリケーションサービスをアップグレードする場合は、適切な順序でアプリケーションサービスをアップグレードし、依存サービスをアップグレードしたことを確認する必要があります。

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、サービスによって異なります。

サービスをアップグレードする特権

アプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権は、アプリケーションサービスによって異なります。

サービスアップグレードウィザードにアクセスするには、ドメインに対する管理者ロールが必要です。

以下のアプリケーションサービスをアップグレードするには、ユーザーにこれらのロール、特権、および権限が必要です。

モデルリポジトリサービス

サービスのアップグレードウィザードを使用してモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに以下の資格情報が必要です。

- ドメインの管理者ロール。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

[アクション] メニューまたはコマンドラインからモデルリポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーに次の資格情報が必要です。

- ドメインに対するサービスの管理特権、およびモデルリポジトリサービスでの権限。
- モデルリポジトリサービスに対する、プロジェクトの作成、編集、および削除の特権、プロジェクトへの書き込み権限。

データ統合サービス

データ統合サービスをアップグレードするには、ユーザーにデータ統合サービスでの管理者ロールが必要です。

コンテンツ管理サービス

コンテンツ管理サービスをアップグレードするには、ユーザーにコンテンツ管理サービスでの管理者ロールが必要です。

PowerCenter リポジトリサービス

PowerCenter リポジトリサービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および PowerCenter リポジトリサービスでの権限が必要です。

Metadata Manager サービス

Metadata Manager サービスをアップグレードするには、ユーザーにドメインに対するサービスの管理特権、および Metadata Manager サービスでの権限が必要です。

以前のバージョンからのサービスアップグレード

以前のバージョンからアップグレードする場合、一部のアプリケーションサービスでアップグレードが必要です。前のバージョンで使用したアプリケーションサービスをアップグレードします。

アップグレード前に、Metadata Manager サービスが無効になっていることを確認します。他のアプリケーションサービスがすべて有効になっていることを確認します。

アプリケーションサービスをアップグレードするには、次のサービスと関連データベースをこの順にアップグレードします。

1. モデルリポジトリサービス
2. データ統合サービス
3. データ統合サービスのプロファイリングウェアハウス
4. Metadata Manager サービス
5. PowerCenter リポジトリサービス

注: 他のアプリケーションサービスをすべてアップグレードする場合は、アップグレードプロセスによって、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツがアップグレードされます。

アップグレードウィザードの実行

アプリケーションサービスと、サービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツのアップグレードには、サービスアップグレードウィザードを使用します。サービスアップグレードウィザードには、アップグレードが必要なサービスと関連するデータベースとともにアップグレード済みのサービスのリストが表示されます。現在または前のアップグレードレポートを保存することもできます。

注: アップグレードの前に Metadata Manager サービスが無効になっている必要があります。その他のすべてのサービスは、アップグレードの前に有効になっている必要があります。

1. Informatica Administrator のヘッダ領域で、**[管理]** > **[アップグレード]** をクリックします。
2. アップグレードするアプリケーションサービスと関連データベースを選択します。
3. 必要に応じて、**[アップグレード後、サービスが自動的に再起動します]** を指定します。
アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択した場合は、アップグレードウィザードによってサービスがアップグレード後に再起動されます。
4. **[次へ]** をクリックします。
5. 依存関係エラーが存在する場合は、**[依存関係エラー]** ダイアログボックスが表示されます。依存関係エラーを確認し、**[OK]** をクリックします。次に、依存関係エラーを解決して **[次へ]** をクリックします。
6. リポジトリログイン情報を入力します。
7. **[次へ]** をクリックします。

サービスアップグレードウィザードによって各アプリケーションサービスと関連データベースがアップグレードされ、ステータスと処理の詳細が表示されます。

8. アップグレードが完了すると、**[サマリ]** セクションにアプリケーションサービスとアップグレードステータスのリストが表示されます。各サービスをクリックすると、**[サービスの詳細]** セクションにアップグレードの詳細が表示されます。
9. 必要に応じて、**[レポートの保存]** をクリックして、アップグレードの詳細をファイルに保存します。
レポートを保存しないことにした場合は、次回サービスアップグレードウィザードを起動したときに **[前のレポートの保存]** をクリックできます。
10. **[閉じる]** をクリックします。
11. アップグレード後にアプリケーションサービスを自動的にリサイクルすることを選択しなかった場合は、アップグレードしたサービスを再起動します。

アップグレードレポートを表示し、保存できます。2 回目にサービスアップグレードウィザードを実行する場合、**[前のレポートの保存]** オプションが表示されます。サービスをアップグレードした後にアップグレードレポートを保存しなかった場合は、このオプションを選択して、前回のアップグレードレポートを表示または保存できます。

モデルリポジトリサービスのアップグレードの確認

モデルリポジトリサービスをアップグレード後は、モデルリポジトリサービスログをチェックしてアップグレードが正常に完了したことを確認します。

オブジェクト依存関係のグラフ

モデルリポジトリサービスをアップグレードする場合、アップグレードプロセスはモデルリポジトリのコンテンツをアップグレードし、オブジェクトの依存関係のグラフを再作成します。

アップグレードプロセスでモデルリポジトリのコンテンツのアップグレード中に致命的なエラーが発生した場合、サービスのアップグレードは失敗します。Administrator ツールまたはコマンドラインプログラムによって、アップグレードをもう一度実行する必要があることが知らされます。

オブジェクト依存関係のグラフの再構築中にアップグレードプロセスで致命的なエラーが発生する場合、サービスのアップグレードは成功します。オブジェクト依存関係のグラフを再構築するまでは、Developer tool でオブジェクトの依存関係を表示することはできません。

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後、モデルリポジトリサービスログに次のメッセージが含まれることを確認します。

```
MRS_50431 "Finished rebuilding the object dependency graph for project group '<project group>'."
```

ログにこのメッセージが存在しない場合は、infacmd mrs rebuildDependencyGraph コマンドを実行してオブジェクト依存関係のグラフを再構築します。この再構築プロセスが完了するまで、モデルリポジトリオブジェクトにユーザーアクセスがあってはなりません。完了前にユーザーがアクセスすると、オブジェクト依存関係のグラフが正確でなくなることがあります。サービスのアップグレードを行う前にモデルリポジトリサービスからログアウトするようユーザーに要請します。

infacmd mrs rebuildDependencyGraph コマンドでは、以下の構文を使用します。

```
rebuildDependencyGraph
<-DomainName|-dn> domain_name
[<-SecurityDomain|-sdn> security_domain]
<-UserName|-un> user_name
<-Password|-pd> password
<-ServiceName|-sn> service_name
[<-ResilienceTimeout|-re> timeout_period_in_seconds]
```

Model Repository サービスの詳細プロパティ

モデルリポジトリサービスをアップグレードした後、最大ヒープサイズと MaxMetaspaceSize 値を設定することができます。サービスをアップグレードする前に、**-Xss** 値を設定します。サービスをアップグレードした後に、**-Xss** 値をリセットする必要があります。

モデルリポジトリサービスについて、以下の詳細プロパティを設定してください。

最大ヒープサイズ

プロセスをアップグレードする前に、モデルリポジトリサービスの**最大ヒープサイズ**プロパティ値が 4GB 未満である場合、このプロパティ値を 4GB に設定することができます。アップグレードした後、プロパティ値をアップグレード前の値にリセットするか、またはグローバルカスタマサポートがお使いの環境で推奨している値へリセットします。

JVM コマンドラインオプション

-Xss JVM コマンドラインオプションを設定します。モデルリポジトリサービスアップグレードをアップグレードする前に、**-Xss** 値を 1m に設定します。アップグレードした後、**-Xss** オプションをアップグレード前の値にリセットします。デフォルト値は 512k です。

モデルリポジトリサービスに詳細プロパティ値を設定するには、> **サービスおよびノードの管理**に移動して、モデルリポジトリサービスを選択し、**プロパティ** > **詳細プロパティ**セクションを編集します。

第 10 章

Informatica クライアントのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica クライアントのアップグレードの概要, 96 ページ](#)
- [Informatica クライアントをアップグレードする前に, 96 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのアップグレード, 98 ページ](#)
- [サイレントモードでのアップグレード, 99 ページ](#)
- [アップグレードした後に, 100 ページ](#)

Informatica クライアントのアップグレードの概要

クライアントインストーラを使用して Informatica クライアントツールの以前のバージョンをアップグレードします。アップグレードする製品に応じて、Developer ツール、PowerCenter Client、またはその両方をアップグレードできます。

アップグレードするクライアントをホストするすべてのマシンでインストーラを実行します。以下のいずれかの方法で Informatica クライアントツールをアップグレードできます。

- グラフィカルモードでのアップグレード。Informatica クライアントツールをグラフィカルモードでアップグレードします。インストーラを使用してアップグレードプロセスを実行できます。
- サイレントモードでのアップグレード。アップグレードオプションを含むプロパティファイルを使用して Informatica クライアントツールをアップグレードします。

アップグレードプロセスでは、JRE ライブラリと DataDirect ODBC ドライバもアップグレードされます。

アップグレードは、インストールファイルをダウンロードしたディレクトリのルートから実行できます。

Informatica クライアントをアップグレードする前に

インストールの前提条件および最小要件を満たしていることを確認します。Informatica クライアントツールをアップグレードするマシンが正しく設定されていない場合、アップグレードに失敗する場合があります。

インストーラパッケージのチェックサムの確認

クライアントインストーラを実行する前に、cksum コマンドを使用してインストールパッケージの整合性を確認します。cksum コマンドは、インストーラのチェックサム値を計算します。

Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトからダウンロードしたインストールファイルのチェックサムに対して、特定のインストーラファイルのチェックサムを確認します。

次の表に、Windows での Informatica クライアントのチェックサムとファイルサイズを示します。

ファイル	チェックサム値	ファイルサイズ
informatica_1056_client_winem-64t.zip	1702676137	3353746081

チェックサムの不一致は、ネットワークの問題が原因でダウンロード中にデータエラーが発生した場合、またはディスク上のファイルでデータの破損が発生した場合に発生する可能性があります。チェックサムエラーの詳細については、[HOW TO: Identify file errors after downloading Informatica installation files](#) を参照してください。

Informatica Developer の要件の確認

以下の表に、Informatica Developer をアップグレードするための最小要件を示します。

コンポーネント	要件
プロセッサ	1 CPU
RAM	1 GB
ディスク容量	8.505GB

PowerCenter Client の要件の確認

以下の表に、PowerCenter Client をアップグレードするための最小要件を示します。

コンポーネント	要件
プロセッサ	1 CPU
RAM	1 GB
ディスク容量	4.255GB

Windows では、zip ファイル名を含むインストールディレクトリパスの全体の長さが 60 文字以下でなければなりません。zip ユーティリティのバージョンが、Windows オペレーティングシステムのバージョンと互換性があることを確認します。ファイルを解凍する場合は、zip ユーティリティが空のフォルダも抽出することを確認します。

グラフィカルモードでのアップグレード

グラフィカルモードでアップグレードする場合は、アップグレードするバージョンに関する情報と、アップグレードに関連付けられているディレクトリに関する情報を指定します。

1. すべてのアプリケーションを終了します。
2. ルートディレクトリから `install.bat` を実行します。
問題が発生した場合は、次の場所から `install.exe` を実行します。
<Informatica installation directory>\client
3. Informatica のインストールおよび製品使用ツールキットの利用規約をお読みになったら **【契約条項に同意します】** を選択します。
以下のオプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーにおいてサービスの一部と見なされ、Informatica は、
<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。
 - a. 契約条項に同意しない場合は、**1** キーを押します。
 - b. 契約条項に同意する場合は、**2** キーを押します。
4. インストールを続行する前に、**【アップグレード前提条件】** ページでシステム要件を確認し、**【次へ】** をクリックします。
5. **【ディレクトリの選択】** ページで、Informatica バージョンのディレクトリとソースディレクトリおよびターゲットディレクトリを入力します。
次の表に、指定するディレクトリを示します。

ディレクトリ	説明
アップグレードする Informatica クライアントのディレクトリ	アップグレードする Informatica クライアントツールのバージョンを含むディレクトリ
のクライアントツールのディレクトリ	クライアントツールをインストールするディレクトリ。 インストールディレクトリへの絶対パスを入力します。インストールディレクトリは、現在のマシンに存在する必要があります。パスのディレクトリ名には、スペースまたは次の特殊文字を含めることはできません: @[* \$ # ! % () { } [] , ; ' 注: インストールディレクトリパスには、英数字を使用することを推奨します。á や € などの特殊文字を使用すると、実行時に予期しない結果が生じることがあります。

6. **【次へ】** をクリックします。
7. **【インストール前のサマリ】** ページで、インストール情報を確認し、**【インストール】** をクリックします。
インストーラによって、Informatica クライアントファイルがインストールディレクトリにコピーされます。
8. **【インストール後のサマリ】** ページで、アップグレードが成功したかどうかを確認し、**【完了】** をクリックしてインストーラを終了します。
9. クライアントのアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。

インストーラログファイルを参照すると、インストーラで実行されるアップグレードタスクの詳細を取得できます。

サイレントモードでのアップグレード

ユーザーの操作なしで Informatica クライアントツールをアップグレードするには、サイレントモードでアップグレードします。プロパティファイルを使用してアップグレードオプションを指定します。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントモードのアップグレードを使用して、ネットワーク上の複数のマシンで Informatica クライアントツールをアップグレードするか、マシン間でアップグレードプロセスを標準化します。

Informatica インストールファイルを、アップグレードする予定の Informatica クライアントをホストするマシン上のハードディスクにコピーします。

サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. アップグレードプロパティファイルを作成し、アップグレードオプションを指定します。
2. アップグレードプロパティファイルを使用して、インストーラを実行します。

プロパティファイルの作成

Informatica は、インストーラに必要なアップグレードパラメータを含むサンプルのプロパティファイルを提供します。サンプルのプロパティファイルをカスタマイズして、アップグレードのオプションを指定できます。

サンプルのプロパティファイルの名前は `SilentInput.properties` で、クライアントインストーラディレクトリのルートにあります。

1. クライアントのインストールファイルを含むディレクトリのルートに移動します。
2. `SilentInput.properties` という名前のファイルを探します。
そのファイルをバックアップしてから変更します。
3. テキストエディタを使用してファイルを開き、アップグレードパラメータの値を変更します。

以下の表に、変更可能なアップグレードパラメータを示します。

プロパティ名	説明
INSTALL_TYPE	Informatica クライアントツールをインストールするか、アップグレードするかを指定します。 以前のバージョンの Informatica からアップグレードするには、値を 1 に設定します。
USER_INSTALL_DIR	新しいバージョンの Informatica クライアントツールをインストールするディレクトリです。
UPG_BACKUP_DIR	アップグレードする Informatica ツールの以前のバージョンのディレクトリです。

プロパティ名	説明
INSTALL_HADOOP_LIBRARIES	インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールするかどうかを決定します。インストーラを使用してディストリビューションパッケージをインストールする場合は、値を <code>true</code> に設定します。ディストリビューションパッケージが必要ない場合、または後でインストールする場合は、値を <code>false</code> に設定します。
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	サポートされているパッケージのリストから、インストールする統合パッケージを指定します。インストールするディストリビューションパッケージを入力します。複数の場合はカンマで区切ります。

4. プロパティファイルを保存します。

サイレントインストーラの実行

プロパティファイルを作成したら、コマンドプロンプトを開いてサイレントアップグレードを開始します。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. クライアントインストーラディレクトリのルートに移動します。
3. ディレクトリにアップグレードオプションを含む `SilentInput.properties` ファイルが保存されていることを確認します。
4. サイレントアップグレードプロセスを開始するには、`silentInstall.bat` を実行します。

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。`Informatica_<Version>_Services_InstallLog.log` がインストールディレクトリに作成されると、サイレントアップグレードプロセスは完了です。

サイレントアップグレードは、プロパティファイルが正しく設定されない場合、または、インストールディレクトリにアクセスできない場合に失敗します。アップグレードが失敗した場合は、インストールログファイルを表示して、エラーを修正します。次に、サイレントインストーラを再実行します。

5. Informatica Developer のアップグレード完了後、Windows マシンをログオフしてからもう一度ログオンし、システム設定を完了します。

アップグレードした後に

アップグレード後、プロファイルにデータドメインをインポートします。

定義済みのデータドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメイングロッサリに追加するには、**[ウィンドウ] > [設定] > [Informatica] > [データドメイングロッサリ] > [インポート]** メニューオプションを使用して `Informatica_IDE_DataDomain.xml` ファイルを Developer tool にインポートします。

データドメインに関連付けられたルールの表示やルールの変更を行うには、Developer tool の **[ファイル] > [インポート]** メニューオプションを使用して `Informatica_IDE_DataDomainRule.xml` ファイルをインポートします。

第 11 章

アップグレードした後に

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica ドメイン, 101 ページ](#)
- [別のデータベースへの移行, 102 ページ](#)
- [ドメインへのクライアントの接続の保護, 104 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード, 105 ページ](#)
- [PowerCenter リポジトリサービス, 105 ページ](#)
- [PowerCenter 統合サービス, 105 ページ](#)
- [Data Integration Service, 105 ページ](#)
- [ログイベントディレクトリの更新, 106 ページ](#)
- [構成ファイルの更新, 106 ページ](#)
- [スケジューラサービス, 107 ページ](#)
- [アナリストサービス, 107 ページ](#)
- [Metadata Manager エージェント, 108 ページ](#)
- [Metadata Manager サービス, 109 ページ](#)

Informatica ドメイン

アップグレードしたら、ドメインのアップグレード後のタスクを実行します。

ログイベントディレクトリの更新

アップグレード後に、ドメインのログイベントディレクトリを更新しなければならない場合があります。

アップグレード後のログイベントディレクトリのデフォルト値は、次のアップグレードタイプによって異なります。

ノード設定を変更しないでドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは、以前のバージョンで指定された場所を指します。

ノード設定を変更してドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは新しいインストールディレクトリ内の `isp/logs` ディレクトリを指します。

別のディレクトリをログに使用するには、Administrator ツールでドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。infasetup updateGatewaynode コマンドを使用してディレクトリを更新することもで

きます。例えば、ログイベントディレクトリを新しいインストールディレクトリの `server/inf_a_shared/logs` ディレクトリに設定できます。

Transport Layer Security (TLS) を有効にする

アップグレード後、AIX で Transport Layer Security (TLS) バージョン 1 および 1.1 が無効になります。TLS バージョン 1 および 1.1 を有効にするには、次の手順を実行します。

1. `$INFA_HOME/Java/jre/lib/security/java.security` に移動します。
2. `java.security` 構成ファイルを編集します。
3. `java.security` 構成ファイル内で、`jdk.tls.disabledAlgorithms` 設定を見つけます。
4. 無効なアルゴリズムのリストから、`TLSv1` と `TLSv1.1` を削除します。
5. `java.security` 構成ファイルを保存して閉じます。
6. ドメインを再起動します。

TLS バージョン 1 および 1.1 が有効になります。デフォルトでは、すべてのオペレーティングシステムで TLS バージョン 1.2 が有効になっています。

Informatica クライアントをアップグレードします。

ドメインをアップグレードした後に、Informatica クライアントツールを同じ Informatica バージョンにアップグレードします。

別のデータベースへの移行

ドメインとサービスをアップグレードした後、既存のサービス用にサポートされているデータベースを構成します。

1. サポートされるデータベースを作成します。データベースの作成に関する詳細については、『*Informatica アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。
2. ドメインとリポジトリをバックアップします。
 - ドメインをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。
`infasetup BackupDomain`
 - PowerCenter リポジトリをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。
`pmrep backup`
 - モデルリポジトリサービスをバックアップするには、以下のコマンドを入力します。
`infacmd mrs BackupContents`
3. ドメインをリストア、更新、および開始します。
 - ドメインをサポートされているデータベースにリストアするには、次のコマンドを入力して、データベースタイプとスキーマ名を更新します。
`infasetup RestoreDomain`
 - ドメイン名、ノード名、およびサポートされているデータベース名を更新するには、次のコマンドを入力します。
`infacmd isp UpdateGatewayNode`

- ドメインを開始するには、次のコマンドを入力します: infaservice Startup
- PowerCenter リポジトリサービスのデータベースを更新し、リサイクルして、PowerCenter リポジトリをリストアします。
 - サポートされているデータベースで PowerCenter リポジトリサービスを更新するには、以下のコマンドを入力します。
infacmd isp UpdateRepositoryService
 - サービスをリサイクルするには、以下のコマンドを入力します。
infacmd isp EnableService
 - サポートされているデータベースタイプで PowerCenter リポジトリをリストアするには、次のコマンドを入力します。
pmrep restore
 - モデルリポジトリサービスのデータベースを更新し、リサイクルして、モデルリポジトリサービスをリストアします。
 - サポートされているデータベースでモデルリポジトリサービスサービスを更新するには、以下のコマンドを入力します。
infacmd mrs UpdateServiceOptions
 - サービスをリサイクルするには、以下のコマンドを入力します。
infacmd isp EnableService
 - サポートされているデータベースでモデルリポジトリサービスサービスをリストアするには、以下のコマンドを入力します。
infacmd mrs restoreContents

- 必要なサービスのデータベース固有の環境変数を設定します。

たとえば、PowerCenter リポジトリサービスに PostgreSQL の以下の環境変数を設定します。

```
PGSERVICE: Set to the location of the pg_service.conf file:
<pg_service.conf file directory>/pg_service.conf
PGHOME: Set to PostgreSQL client install location. For example, /usr/pgsql -10
Add to PATH: $PGHOME/bin:${PATH}
Add to LD_LIBRARY_PATH: $PGHOME/lib:${LD_LIBRARY_PATH}
```

Oracle では、Oracle の PowerCenter リポジトリサービス用の以下の環境変数を設定します。

```
ORACLE_HOME: Set to Oracle client install location. For example, /u01/app/oracle/product/19.0.0.0
Add to PATH: $ORACLE_HOME/bin:${PATH}
Add to LD_LIBRARY_PATH: $ORACLE_HOME/lib:${LD_LIBRARY_PATH}
Add TNS_ADMIN. The TNS entries are in the oratns folder. For example, /misc/platqa/ISPAutomation/oratns
```

DB2 では、DB2 の PowerCenter リポジトリサービス用の以下の環境変数を設定します。

```
DB2DIR: Set to DB2 client install location. For example, /opt/ibm/db2/V11.1
DB2INSTANCE: Instance name of the DB2 client.
Add to PATH: $DB2DIR/bin:${PATH}
Add to LD_LIBRARY_PATH: $DB2DIR/lib:${LD_LIBRARY_PATH} OR $DB2DIR/lib64:${LD_LIBRARY_PATH}
```

DSN を使用する SQL Server では、Informatica サービスを実行するマシンに DSN エントリを作成します。DSN を有効にして、管理者ツールで DSN 名を指定できます。

SQL Server on Linux では、SQL Server の PowerCenter リポジトリサービス用の以下の環境変数を設定します。

```
ODBCHOME=$INFA_HOME/ODBC<version>
ODBCINI=$INFA_HOME/ODBC<version>/odbc.ini
ODBCINST=$INFA_HOME/ODBC<version>/odbcinst.ini
```


ドメインへのクライアントの接続の保護

以前のバージョンで、クライアントアプリケーションと Informatica ドメイン間で安全な通信を有効にした場合は、アップグレード後にキーストアファイルの場所を確認するか、または新しいキーストアを生成する必要があります。Metadata Manager を使用する場合は、アップグレード後に新しいキーストアファイルを生成する必要があります。他のクライアントアプリケーションを使用する場合は、アップグレード後にキーストアファイルの場所を確認する必要があります。

クライアントアプリケーションとサービス間で安全な接続を設定する場合は、セキュアな HTTPS 接続用のキーおよび証明書を含むキーストアファイルを指定します。アップグレード後に、新しいキーストアファイルを生成するか、またはキーストアファイルの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスでは、キーストアファイルも場所も更新されません。

注: 512 ビット未満の RSA 暗号化を使用してプライベートキーと SSL 証明書を作成した場合は、新しい SSL 証明書ファイルを作成する必要があります。FREAK 脆弱性により、512 ビット未満の RSA 暗号化はサポートされていません。

実行する必要があるタスクは、使用しているクライアントアプリケーションによって異なります。

Metadata Manager

Metadata Manager を使用する場合は、アップグレード後に新しいキーストアファイルを生成します。キーストアファイルの生成に使用された Java のバージョンと、Informatica とともにインストールされた Java のバージョンが一致することを確認するために、キーストアファイルを再生成します。Java のバージョンが一致しない場合は、Metadata Manager で操作を実行するユーザーに対して、[Metadata Manager サービスに接続できません] というエラーが表示されます。

新しいキーストアファイルを生成するには、次の手順を実行します。

1. Metadata Manager Web アプリケーションに対して安全な接続を設定するために必要なキーおよび証明書を含む新しいキーストアファイルを生成します。キーストアファイルを生成するには、現在のバージョンの Informatica とともにインストールされたキーツールユーティリティを使用します。

注: Metadata Manager サービスは RSA 暗号化を使用します。そのため、RSA アルゴリズムで生成されたセキュリティ証明書を使用することをお勧めします。

2. Metadata Manager サービスが稼働しているマシンからアクセス可能なディレクトリにキーストアファイルを保存します。
3. Administrator ツールを使用して、Metadata Manager サービスのキーストアファイルを更新します。

他の Web クライアントアプリケーション

他の Web クライアントアプリケーションを使用する場合、実行する必要があるタスクは、次のいずれの場所にキーストアファイルを格納したかによって異なります。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所

以前の Informatica インストールディレクトリ構造内の場所にキーストアファイルを格納した場合は、次の手順を実行します。

1. このファイルを別の場所にコピーします。
2. コピーされたキーストアファイルの場所を使用して、アプリケーションサービスを更新します。

Administrator ツールを使用して、適切なアプリケーションサービスのキーストアファイルの場所を更新します。例えば、Analyst ツールのセキュリティにキーストアファイルが使用されている場合は、アナリストサービスのプロパティでキーストアファイルの場所を更新します。

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場合

以前の Informatica インストールディレクトリ構造外の場合にキーストアファイルを保存した場合は、アプリケーションサービスが実行されるマシンからそのキーストアファイルにアクセスできることを確認します。

Microsoft SQL Server の接続プロバイダタイプのアップグレード

アップグレードを行うと、デフォルトで、Microsoft SQL Server 接続が OLEDB プロバイダタイプに設定されます。

ODBC プロバイダタイプを使用するようにすべての Microsoft SQL Server 接続をアップグレードすることをお勧めします。次の形式で Informatica サービスを使用すると、すべての Microsoft SQL Server 接続を ODBC プロバイダタイプにアップグレードすることができます。

```
ODBCINST=<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini
```

環境変数を設定したら、Informatica サービスをホストするノードを再起動する必要があります。

PowerCenter リポジトリサービス

アップグレード後、PowerCenter リポジトリサービスを排他モードで実行して、リポジトリメタデータをアップグレードします。

リポジトリメタデータをアップグレードしたら、モードを通常モードに変更し、PowerCenter リポジトリサービスを再起動します。

PowerCenter 統合サービス

アップグレード後、PowerCenter 統合サービスのオペレーティングシステムプロファイルに umask を設定します。

オペレーティングシステムプロファイルを使用したバージョンからアップグレードした場合は、umask 設定値を設定し、STM が書き込むファイルのセキュリティを変更してください。

例えば、umask を 077 に変更するとセキュリティを最大化できます。umask の設定を変更した場合は Informatica サービスを再起動する必要があります。

Data Integration Service

アップグレード後に、データ統合サービスの HTTP プロキシサーバーのパスワードをリセットします。

Data Integration Service が Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを実行し、かつ認証付きの HTTP プロキシサーバーを使用するように設定されている場合は、HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

パスワードをリセットしないと、データ統合サービスで Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを正常に処理できません。

Administrator ツールで、データ統合サービス用の HTTP プロキシサーバーのパスワードをリセットします。

ログイベントディレクトリの更新

アップグレード後に、ドメインのログイベントディレクトリを更新しなければならない場合があります。

アップグレード後のログイベントディレクトリのデフォルト値は、次のアップグレードタイプによって異なります。

ノード設定を変更しないでドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは、以前のバージョンで指定された場所を指します。

ノード設定を変更してドメインをアップグレードします。

ログイベントディレクトリは新しいインストールディレクトリ内の `isp/logs` ディレクトリを指します。

別のディレクトリをログに使用するには、Administrator ツールでドメインの [ログディレクトリパス] プロパティを更新します。infasetup updateGatewaynode コマンドを使用してディレクトリを更新することもできます。例えば、ログイベントディレクトリを新しいインストールディレクトリの `server/infra_shared/logs` ディレクトリに設定できます。

構成ファイルの更新

アップグレードを実行すると、`odbc.ini`、`odbcinst.ini`、`sapnwrfc.ini`、`infaservice.sh` などの構成ファイルがインストーラによって上書きされます。いずれかの構成ファイルに、カスタマイズ、更新されたプロファイル、または新しいプロパティが含まれている場合は、インストール構成ファイルをバックアップ済みであることを確認します。その後、バックアップファイルから最新のインストール済みファイルに変更内容を手動でマージできます。例えば、`infaservice.sh` にいくつかの変数または Java オプションが含まれている場合は、変更の内容を最新のインストールファイルパスに手動でマージする必要があります。

アップグレード後、最新の構成の変更内容を次のインストールファイルパスに手動でマージします。

```
$INFA_HOME/ODBC7.1/odbc.ini
```

```
$INFA_HOME /ODBC7.1/odbcinst.ini
```

```
$INFA_HOME/server/bin/sapnwrfc.ini
```

```
$INFA_HOME/tomcat/bin/infaservice.sh
```


スケジューラサービス

ドメイン内のスケジューラサービスの一時ファイルのパスを変更した場合は、以前のインストールからアップグレードしたインストールにスケジューラサービスのファイルをコピーします。

スケジューラサービスの一時ファイルの場所は、デフォルトで `./scheduler/temp` に設定されています。スケジューラサービスのプロパティでこのパスを変更した場合は、以前の場所にあるすべてのファイルを、アップグレードしたドメイン内の場所に手動でコピーする必要があります。

スケジューラサービスがデフォルトの場所を使用している場合、またはパスをドメイン外部のディレクトリに変更した場合は、ファイルをコピーする必要はありません。

注: スケジューラサービスがファイルを見つけられない場合は、パラメータファイルを使用するスケジューラインスタンスが、アップグレードされたドメインで実行されません。

アナリストサービス

アップグレードしたら、アナリストサービスごとにアップグレード後のタスクを実行します。

フラットファイルキャッシュの場所の確認

アップグレード後に、フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内にフラットファイルキャッシュディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。

以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスとデータ統合サービスの両方がそのディレクトリにアクセスできることを確認します。

アナリストサービスとデータ統合サービスが異なるノードで実行されている場合は、共有ディレクトリを使用するようにフラットファイルディレクトリを設定します。データ統合サービスがプライマリおよびバックアップノード、またはグリッドで実行される場合、各データ統合サービスプロセスは共有ディレクトリのファイルにアクセスできる必要があります。

フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認するには、アナリストサービスのランタイムプロパティにある **【フラットファイルキャッシュの場所】** プロパティを表示します。

一時エクスポートファイルの場所の確認

アップグレード後に、一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または指定する必要があります。Analyst ツールはこの場所を使用して、エクスポートするビジネス用語集を保存します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内に一時エクスポートファイルディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスを実行しているマシンがそのディレクトリにアクセスできることを確認します。一時エクスポートファイルディレクトリの場所を設定していない場合は、エクスポート時に Analyst ツールが用語集を保存できる場所を指定します。

一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または指定するには、アナリストサービスのビジネス用語集のプロパティで【一時エクスポートファイルディレクトリ】 **Temporary Export File Directory** プロパティを表示します。

Business Glossary 添付ファイルディレクトリ (AS) の確認

アップグレード後、Business Glossary アセット添付ディレクトリの場所を確認する必要があります。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。

以前の Informatica インストールディレクトリ内にアセット添付ディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリをアップグレードした Informatica インストールディレクトリにコピーし、新しい場所を使用してアナリストサービスのプロパティを更新します。以前の Informatica インストールディレクトリ以外の場所にアセット添付ディレクトリを作成している場合は、アナリストサービスを実行しているマシンがそのディレクトリにアクセスできることを確認します。

アセット添付ディレクトリの場所を確認するには、アナリストサービスの Business Glossary プロパティで **アセット添付ディレクトリ** のプロパティを確認します。

アナリストサービスのリサイクル

アップグレード後に Analyst ツールにアクセスするには、アナリストサービスをリサイクルします。アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスおよびデータ統合サービスのアップグレード手順とアップグレード後の手順を完了します。

アナリストサービスをリサイクルしたら、少なくとも 10 分間待機し、その後で【用語集】ワークスペースにアクセスします。

アナリストサービスをリサイクルする前に、次のタスクが実行されていることを確認します。

- モデルリポジトリサービスのアップグレード
- データ統合サービスのアップグレード

注: アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービスとデータ統合サービスが実行されている必要があります。

Metadata Manager エージェント

アップグレード後、各 Metadata Manager Agent をアンインストールしてから再インストールして、Metadata Manager がメタデータソースからメタデータを抽出できるようにする必要があります。リソースを移行する前に、最新バージョンの Metadata Manager Agent をインストールします。

1. Metadata Manager Agent を停止します。
2. Metadata Manager Agent を再インストールします。

Metadata Manager Agent のインストールの詳細については、*Metadata Manager 管理者ガイド*を参照してください。

Metadata Manager サービス

Metadata Manager エージェントを再インストールしたら、Metadata Manager サービスごとに次のアップグレード後のタスクを実行します。

1. Metadata Manager プロパティファイルにすべてのカスタマイズが含まれるように更新します。
2. Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスを UNIX 上で実行する場合は、ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。
3. Cognos 依存関係の JAR ファイルを更新します。
4. Metadata Manager サービスを有効にします。
5. Netezza リソースを再作成します。
6. 以前のバージョンでいずれかのビジネスインテリジェンスリソースに【ワーカースレッド】設定プロパティを設定した場合は、【マルチスレッド】設定プロパティを同じ値に設定します。

Metadata Manager プロパティファイルの更新

以前のインストールディレクトリ内の imm.properties ファイルを現在のバージョンと比較します。必要に応じて、現在のバージョンの imm.properties ファイルを更新します。

imm.properties ファイルは次のディレクトリにあります。

<Informatica installation directory>\services\shared\jars\pc\classes

変更は、Metadata Manager サービスを有効にすると反映されます。

UNIX での ODBCINST 環境変数の確認

Metadata Manager リポジトリが Microsoft SQL Server データベースで、Metadata Manager サービスが UNIX 上で実行される場合は、PowerCenter 統合サービスを実行するマシンに ODBCINST 環境変数が設定されていることを確認します。

PowerCenter 統合サービスは、IME ベースのファイルからメタデータを抽出してそのメタデータを Metadata Manager ウェアハウスにロードするワークフローを実行します。PowerCenter 統合サービスは、ODBC を使用して Microsoft SQL Server データベースに接続します。UNIX では、ODBCINST 環境変数が odbinst.ini ファイルの場所に設定されている必要があります。このように設定されていないと、PowerCenter 統合サービスは ODBC ドライバにアクセスできません。

PowerCenter 統合サービスを実行するマシンで、ODBCINST 環境変数が次の値に設定されていることを確認します。

ODBCINST=<INFA_HOME>/ODBC7.1/odbcinst.ini

環境変数が設定されていない場合は、設定してからドメインを再起動します。

Cognos 依存関係の JAR ファイルの更新

Cognos 依存関係に関連付けられた JAR ファイルを置き換えます。

1. 次の JAR ファイルをダウンロードします。
 - <https://repo1.maven.org/maven2/org/apache/axis/axis/1.4/axis-1.4.jar>
 - <https://repo1.maven.org/maven2/xerces/xercesImpl/2.12.2/xercesImpl-2.12.2.jar>
2. JAR ファイルを次の場所にコピーします:<Metadata Manager Agent installation directory>\java\CognosRepository

3. Metadata Manager Agent サービスを開始します。

リソースのページおよびリロード

Metadata Manager の各バージョンでは、一部のモデルが変更されています。モデルに新しいクラス属性などの小さな変更点がある場合は、そのモデルをベースにするリソースをページしてリロードする必要があります。

次の表に、ページおよびリロードが必要なリソースを示します。

メタデータソースタイプ	リソースタイプ
ビジネスインテリジェンス	Business Objects Oracle Business Intelligence Enterprise Edition
データモデリング	SAP Power Designer

ビジネスインテリジェンスおよびデータベース管理リソースの接続情報が失われることを防ぐため、次の順序でリソースをページしてリロードします。

1. データベース管理リソース
2. Tableau リソース
3. PowerCenter リソース

Informatica Platform リソースのアップグレード

Informatica アプリケーションからメタデータを抽出する Informatica Platform リソースを作成した場合は、リソースのアップグレードが必要です。リソースをアップグレードするには、リソースを再作成するか、またはコマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定します。

PowerCenter をアップグレードすると、データ統合サービスとモデルリポジトリサービスもアップグレードされます。ただし、Metadata Manager のみをアップグレードした場合、データ統合サービスとモデルリポジトリサービスはデフォルトではアップグレードされません。必要に応じて、Administrator ツールでサービスをアップグレードできます。

Informatica Platform リソースのアップグレード方法は、アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードしたかどうかによって異なります。

PowerCenter をアップグレードした場合

アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードした場合は、アップグレード後にリソースを再作成する必要があります。新しいリソースを作成したら、古いリソースをページおよび削除できます。

Metadata Manager のみをアップグレードした場合

アプリケーションのベースとなるサービスをアップグレードしなかった場合は、コマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定する必要があります。

コマンドラインユーティリティを使用するようにリソースを設定するには、次の手順を実行します。

1. Informatica グローバルカスタマサポートに連絡して、アップグレード後のバージョンで使用するコマンドラインユーティリティの zip ファイルを入手します。
2. Metadata Manager サービスがアクセスできるディレクトリにファイルを抽出します。
最高のパフォーマンスを得るには、Metadata Manager サービスを実行するマシン上のディレクトリにファイルを抽出します。異なるマシンにファイルを抽出した場合、Metadata Manager サービスがディレクトリにアクセスするのに数分かかる可能性があります。

3. リソースを編集し、[<current_version>コマンドラインユーティリティディレクトリ] プロパティを設定します。
このプロパティを、コマンドラインユーティリティをインストールしたディレクトリ（例：
C:\Informatica\1041_CLU）に設定します。
4. Metadata Manager で、リソースをロードします。

Informatica Platform リソースの作成方法と、Informatica Platform リソース用コマンドラインユーティリティのインストール方法の詳細については、『*Metadata Manager 管理者ガイド*』の「データ統合リソース」の章を参照してください。

ユニバーサルリソース用のプラグインの再生成

ユニバーサルリソースを使用する場合は、ユニバーサルリソースごとにプラグインを再生成する必要があります。プラグインを再生成したら、Metadata Manager サービスのプラグインディレクトリにコピーして、Metadata Manager サービスをリサイクルします。

各ユニバーサルリソースで次のタスクを実行します。

1. 以前のバージョンの Metadata Manager からプラグイン定義ファイルをコピーして、別のファイル名で保存します。
2. 新しいプラグイン定義ファイルを編集し、名前要素と所有者の要素のいずれかまたは両方の値を変更して、ファイルを保存します。

次のコードは、QlikView ファイルからメタデータを抽出するために使用する XConnect のプラグイン定義ファイルの例を示しています。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<xconnect xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
xsi:noNamespaceSchemaLocation='xconndef.xsd' xmlns="http://www.informatica.com/XCONDEF">
  <name>QlikView1011</name>
  <owner>HypoStores</owner>
  <domain>Business Intelligence</domain>
  <sourcename>QlikView Files</sourcename>
</xconnect>
```

3. 定義ファイル（-x）オプションを指定して mmXConPluginUtil generatePlugin コマンドを実行し、プラグインを再生成します。

以下に例を示します。

```
mmXConPluginUtil generatePlugin -x C:\MMPlugInDefs\HypoStores_QlikView1011.xml
```

mmXConPluginUtil は、プラグインを XConnect アーカイブ（XAR）ファイルとして生成します。このコマンドは、次のディレクトリにプラグインを生成します。ここで、owner と name はプラグイン定義ファイルで定義されています。

```
<Informatica サービスのインストールディレクトリ>\services\MetadataManagerService\utilities\mmxconpluginutil
\<owner>.\<name>
```

mmXConPluginUtil は、プラグインを mm-<owner>.\<name>-xconnect.xar の形式で命名します。

4. 次の Metadata Manager サービスのプラグインディレクトリにプラグインをコピーします。

```
<Informatica サービスのインストールディレクトリ>\services\MetadataManagerService\mm-plugins\xconnect
\<Metadata Manager サービス名>
```

Metadata Manager サービスのプラグインディレクトリにすべてのプラグインをコピーしたら、Administrator ツールを使用して、Metadata Manager サービスをリサイクルします。サービスが有効にされると、Metadata Manager はモデルをインポートします。

DataDirect Drivers の更新

DataDirect Oracle ODBC および SQL Server ODBC ドライバファイルをアップグレードします。既存の接続が DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバを使用している場合、DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol を使用する必要があります。

DataDirect Oracle ODBC ドライバ

DataDirect Oracle Wire Protocol はバージョン 7.1 から 8.0 にアップグレードされます。Windows 上では、DataDirect Oracle ODBC ドライバは DWora27.dll から DWora28.dll にアップグレードされます。Linux 上では、ドライバは DWora27.so から DWora28.so にアップグレードされます。Oracle ODBC ドライバ DWora27.so を使用している既存の ODBC 接続は失敗します。

アップグレード後、次のタスクを実行します。

- Linux 上で、既存の ODBC 接続を使用して Oracle データベースに接続する場合は、DWora28.so ファイルが含まれる ODBC ドライバパスを指すように odbc.ini ファイルを更新する必要があります。
- Windows 上で、既存の ODBC 接続を使用して Oracle データベースに接続する場合は、DataDirect 8.0 Oracle Wire Protocol ドライバを使用して新しいデータソースを作成する必要があります。

DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバ

Informatica では、DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバファイル (DWmss27.x) のサポートを終了しました。DataDirect でこのドライバがサポートされなくなったためです。アップグレードの後、DataDirect SQL Server レガシ ODBC ドライバファイルの DWmss27.x を使用する既存の ODBC 接続は失敗します。Informatica インストーラに含まれている DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol か、サードパーティベンダーが提供する任意の ODBC ドライバを使用する必要があります。

DataDirect SQL Server ODBC ドライバ

DataDirect SQL Server ODBC ドライバは、Linux では DWsqls27.so から DWsqls28.so にアップグレードされます。Windows では、DataDirect SQL Server ODBC ドライバは DWsqls27.dll から DWsqls28.dll にアップグレードされます。DataDirect SQL Server ODBC ドライバの DWsqls27.so (Linux) または DWsqls27.dll (Windows) を使用する既存の接続は失敗します。

Linux では、アップグレード後に次のタスクを実行します。

- [DSN の使用] プロパティを有効にして既存の Microsoft SQL Server 接続を使用する場合は、DWsqls28.so ファイルを含む ODBC ドライバパスを指すように odbc.ini ファイルを更新する必要があります。
- DWsqls27.so ドライバを使用していた既存の ODBC 接続を使用するには、DWsqls28.so ファイルが含まれる ODBC ドライバパスを指すように odbc.ini ファイルを更新する必要があります。

Windows では、アップグレード後に次のタスクを実行します。

- [DSN の使用] プロパティを有効にして既存の Microsoft SQL Server 接続を使用する場合は、DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol ドライバを使用して Microsoft SQL Server データベース用の新しいデータソースを作成する必要があります。
- DataDirect 7.1 New SQL Server Wire Protocol ドライバを使用していた既存の ODBC 接続を使用する場合は、DataDirect 8.0 New SQL Server Wire Protocol ドライバを使用して Microsoft SQL Server データベース用の新しいデータソースを作成する必要があります。

Informatica Cassandra ODBC データソースのアップグレード

アップグレード後、odbc.ini ファイルを odbc.ini ファイルのバックアップコピーに置き換え、Cassandra ODBC ドライバ名を変更する必要があります。

odbc.ini ファイルを置き換えた後、odbc.ini ファイルの Driver プロパティの値を <Informatica installation directory>\tools\cassandra\lib\libcassandraodbc_sb64.so に更新する必要があります。

Data Transformation ファイルのコピー

Data Transformation のアップグレード後、以前のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにファイルをコピーして、以前のバージョンと同じワークスペース、リポジトリ、およびカスタムグローバルコンポーネントを取得します。

ファイルまたはディレクトリ	デフォルトの場所
リポジトリ	<Informatica installation directory>\DataTransformation\ServiceDB
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (TGP ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\autoInclude\user
カスタムグローバルコンポーネントディレクトリ (DLL および JAR ファイル)	<Informatica installation directory>\DataTransformation\externLibs\user

Data Transformation のライブラリファイルはコピーしないでください。代わりに、Data Transformation のライブラリを再度インストールします。

Hive エンジンのサポート終了のためのプロファイルの更新

バージョン 10.2.2 から、Informatica では Hive エンジンのサポートを終了しました。Hive エンジンで実行するように設定されたプロファイルがある場合は、別のエンジンで実行するように更新する必要があります。Informatica では、Hadoop 環境の Blaze エンジンは引き続きサポートします。

Hive エンジンで実行するように設定されているプロファイルは、手動で特定して変更する必要があります。

Hive エンジンのサポート終了のためのマッピングの更新

アップグレード後、Hadoop 検証環境内で Hive エンジンが設定されているマッピングを更新する必要があります。一連の infacmd コマンドを実行してマッピングを更新し、Hive エンジンの設定を変更します。Informatica では、Hadoop 環境の Blaze エンジンと Spark エンジンは引き続きサポートします。

次の infacmd プラグインを使用してコマンドを実行します。

- **infacmd dis プラグイン**。dis プラグインを使用してコマンドを実行し、データ統合サービスにデプロイされているマッピングを更新します。例: dis enableMappingValidationEnvironment。
- **infacmd mrs プラグイン**。mrs プラグインを使用してコマンドを実行し、データ統合サービスにデプロイされていないマッピングを更新します。例: mrs enableMappingValidationEnvironment。

注: このコマンドを実行する場合、-sn (サービス名) パラメータは使用するプラグインによって異なります。dis コマンドを実行する場合はデータ統合サービスの名前を使用し、mrs コマンドを実行する場合はモデルリポジトリサービスの名前を使用します。

dis プラグインと mrs プラグインの両方に対して、次のコマンドを実行します。

listMappingEngines

検証用に Hive エンジンが設定されているマッピングを特定するには、listMappingEngines コマンドを実行します。次のサンプル構文を検討してください。

```
mrs|dis listMappingEngines -dn domain_3987 -un Administrator -pd Password -vef hive -sn SN_3986
```


enableMappingValidationEnvironment

他の検証環境を有効にする場合は、有効にする各環境に対して enableMappingValidationEnvironment コマンドを実行します。有効にできる環境は、native、blaze、spark、または spark-databricks です。さまざまなコマンドフィルタに基づく、次のサンプル構文例を検討してください。

- すべてのマッピングの変更。
mrs|dis enableMappingValidationEnvironment -dn domain_3987 -un Administrator -pd Password -sn SN_3986 -ve spark -cn HADOOP_cco_hdp619
- マッピング名に基づくマッピングの変更。
mrs|dis enableMappingValidationEnvironment -dn domain_3987 -un Administrator -pd Password -sn SN_3986 -ve spark -cn HADOOP_cco_hdp619 -mnf m_nav327,m_nav376
- 実行環境、マッピング名、およびプロジェクト名に基づくマッピングの変更。
mrs|dis enableMappingValidationEnvironment -dn domain_3987 -un Administrator -pd Password -sn SN_3986 -ve spark -cn HADOOP_cco_hdp619 -eef hadoop -mnf m_nav327,m_nav376 -pn project1

setMappingExecutionEnvironment

実行環境を変更する場合は、setMappingExecutionEnvironment を実行します。マッピング名フィルタに基づく、次のサンプル構文を検討してください。

```
mrs|dis setMappingExecutionEnvironment -dn domain_3987 -un Administrator -pd Password -sn SN_3986 -ee Databricks -mnf m_nav327,m_nav376 -cn DATABRICKS_cco_db619
```

disableMappingValidationEnvironment

モデルリポジトリ内のすべてのマッピングを更新して、Hadoop 検証環境から Hive エンジンが無効にします。次のサンプル構文を検討してください。

```
mrs|dis disableMappingValidationEnvironment -dn domain_3987 -un Administrator -pd Password -sn SN_3986 -ve hive
```

listMappingEngines

listMappingEngines コマンドをもう一度実行して、Hive 検証環境のマッピングが存在していないことを確認します。

コマンドの詳細については、『*Informatica コマンドリファレンス*』を参照してください。

警告

環境を更新しない場合、次の障害点に注意してください。

- 唯一の検証環境として Hive エンジンが設定されている場合、実行時、マッピングが失敗します。
- 唯一の検証環境として Hive エンジンが設定されている Developer tool で検証環境を編集する場合、マッピングから Hadoop 接続が失われます。検証環境を設定して、Hadoop 接続を選択し直す必要があります。これは、以前のバージョンからアップグレードする場合、または以前のバージョンからマッピングをインポートする場合に発生する可能性があります。

新機能および変更点の確認

『*Informatica の新機能および変更点*』では、新機能と拡張機能、バージョン間での動作の変更点、およびアップグレード後に実行する必要があるタスクについて説明しています。実装が必要な新機能、または有効化が必要な新しいオプションのリストを確認するには、『*Informatica の新機能および変更点*』を参照してください。

付録 A

アップグレードチェックリスト

この付録では、以下の項目について説明します。

- [アップグレードチェックリストの概要, 115 ページ](#)
- [ドメインをアップグレードする前に, 115 ページ](#)
- [ドメインのアップグレード, 117 ページ](#)
- [アプリケーションサービスをアップグレードする前に, 117 ページ](#)
- [アプリケーションサービスのアップグレード, 117 ページ](#)
- [Informatica クライアントのアップグレード, 118 ページ](#)
- [アップグレードした後に, 118 ページ](#)

アップグレードチェックリストの概要

アップグレードのチェックリストでは、アップグレードを完了するために実行する必要があるタスクについて要約します。Informatica 製品を複数のマシンでアップグレードする場合は、このガイドの詳細な指示を使用して最初のアップグレードを完了してください。その後のアップグレードは、このチェックリストを利用して実行できます。

ドメインをアップグレードする前に

ドメインをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- ☐ 『Informatica リリースノート』をお読みください。
- ☐ 次のタスクを実行して、オペレーティングシステムの要件を満たすようにマシンを設定します。
 - マシンに必要なオペレーティングシステムパッチおよびライブラリがインストールされていることを確認します。
 - マシンがドメインをアップグレードするための最小システム要件を満たしていることを確認します。
 - マシンがアプリケーションサービスをアップグレードするためのハードウェア要件を満たしていることを確認します。
 - UNIX 上で、Java Runtime Environment (JRE) をダウンロードしてインストールします。
 - 非ネイティブ環境のディストリビューションを確認します。

- 環境変数を確認します。
 - 最大ヒープサイズの設定を確認します。
 - インストーラファイルを抽出します。
 - Informatica Upgrade Advisor を実行します。
 - 構成ファイルをバックアップします。
- ☐ Data Transformation ファイルをバックアップします。
- ☐ Administrator ツールまたは infacmd DisableService を使用して、アナリストサービスを無効にします。
- ☐ 次のタスクを実行して、PowerCenter リポジトリを準備します。
- PowerCenter リポジトリをバックアップします。
 - PowerCenter リポジトリデータベースのユーザーアカウント要件を確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、モデルリポジトリを準備します。
- モデルリポジトリをバックアップします。
 - モデルリポジトリデータベースのユーザーアカウント要件を確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、データ統合サービスを準備します。
- データ統合サービスの各プロセスの実行オプションを記録します。
 - すべてのワークフローが完了したことを確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、プロファイリングウェアハウスを準備します。
- ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウスをバックアップします。
 - データベースのユーザーアカウント権限を確認します。
- ☐ 次のタスクを実行して、参照データのディレクトリを準備します。
- 参照データのディレクトリをバックアップします。
 - ディレクトリの場所を記録します。
- ☐ 次のタスクを実行して、Metadata Manager を準備します。
- Metadata Manager ウェアハウスをバックアップします。
 - Metadata Manager サービスを無効にします。
 - Metadata Manager プロパティファイルをバックアップします。
- ☐ ネイティブデータベースバックアップオプションを使用して、プロファイリングウェアハウス、参照データウェアハウス、およびワークフローデータベースをバックアップします。
- ☐ Informatica Cassandra ODBC ドライバ用の odbc.ini ファイルをバックアップします。
- ☐ 次のタスクを実行して、ドメインを準備してください。
- データベースユーザーアカウントの要件を確認します。
 - ドメインをシャットダウンします。ドメインをシャットダウンするには、ドメイン内の各ノード上で Informatica サービスプロセスを停止します。
 - ドメインをバックアップします。
- ☐ ノード設定を変更するための準備をします。
- ノード設定の変更を選択した場合は、追加のアップグレード前のタスクを実行します。

ドメインのアップグレード

サーバーインストーラを使用してドメインをアップグレードします。サーバーインストーラのドメインアップグレードウィザードを使用してアップグレードプロセスを実行できます。

アップグレードウィザードによって、指定したインストールディレクトリに Informatica ファイルがインストールされます。以前のバージョンのディレクトリにあるファイルは変更されません。

アップグレードウィザードを実行する際に、ドメインを別のマシンまたは別のドメイン環境設定リポジトリデータベースにアップグレードする場合には、ノード設定を変更するオプションを選択します。

アプリケーションサービスをアップグレードする前に

アプリケーションサービスをアップグレードする前に、以下のアップグレード前のタスクを実行します。

- ☐ ロケール環境変数を設定します。
ロケール設定にリポジトリのコードページとの互換性があることを確認します。
- ☐ ブラウザのキャッシュをクリアします。
- ☐ ノード設定を変更して Informatica のインストールを別のマシンに移行するオプションを選択する場合、以下のタスクを実行します。
 - 環境変数を設定します。
 - ライブラリパス環境変数を設定します。
 - ノードで実行されるアプリケーションサービスプロセスに動的に割り当てられるポート番号の範囲を確認します。
 - ノードのバックアップディレクトリがノードからアクセス可能であることを確認します。
 - PowerExchange アダプタを設定します。PowerExchange アダプタのインストーラがある場合は、PowerExchange アダプタを再インストールします。

アプリケーションサービスのアップグレード

各サービスバージョンではサービスのアップグレードが必要です。サービスアップグレードウィザードを使用して、サービスをアップグレードできます。

- ☐ 次のアプリケーションサービスのアップグレードに必要な特権を確認します。
 - PowerCenter リポジトリサービス
 - モデルリポジトリサービス
 - PowerCenter 統合サービス
 - データ統合サービス
 - コンテンツ管理サービス
 - スケジューラサービス

- アナリストサービス
 - Metadata Manager サービス
- ☐ 次のサービスおよび関連するデータベースをアップグレードします。
- PowerCenter リポジトリサービス
 - PowerCenter 統合サービス
 - モデルリポジトリサービス
 - データ統合サービス
 - データ統合サービスのプロファイリングウェアハウス
 - スケジューラサービス
 - アナリストサービス
 - Metadata Manager サービス
- ☐ サービスアップグレードウィザードを実行して、アプリケーションサービスとサービスに関連付けられたデータベースのデータベースコンテンツをアップグレードします。
- ☐ モデルリポジトリサービスのアップグレードを確認します。
- オブジェクト依存関係のグラフ
 - 最大ヒープサイズ

Informatica クライアントのアップグレード

クライアントインストーラを使用してクライアントツールをアップグレードします。クライアントツールは、指定したインストールディレクトリにインストールされます。クライアントインストーラは新しくインストールしたクライアントツールを、以前のバージョンと同じ設定で設定します。

アップグレードした後に

ドメイン、アプリケーションサービスおよびクライアントファイルをアップグレードした後に、以下のアップグレード後のタスクを実行します。

- ☐ ドメインに対して次のタスクを実行します。
- SSL 証明書ファイルを使用して以前のドメイン内の安全な通信を有効にした場合は、キーストアファイルおよびトラストストアファイルの場所を確認します。アップグレードプロセスではこれらの場所が更新されません。
 - 必要に応じて、SSL プロトコルで保護されたデータベース上にドメイン環境設定リポジトリを設定できません。
- ☐ 各データ統合サービスで次のタスクを実行します。
- HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。
データ統合サービスが Web サービスコンシューマトランスフォーメーションを実行し、かつ認証付きの HTTP プロキシサーバーを使用するように設定されている場合は、HTTP プロキシサーバーパスワードをリセットします。

- データ統合サービスを複数ノードで実行し、各サービスプロセスで異なる実行オプションを設定した場合は、[プロパティ] ビューの [実行オプション] で正しい値が使用されていることを確認します。
 - Analyst ツールまたは Developer tool でルール仕様を操作する場合は、最大ヒープサイズの値を確認します。
 - [要求ごとの最大メモリ] プロパティで、データ統合サービスのモジュールごとに適切な値が使用されていることを確認します。
- ☐ 各アナリストサービスで次のタスクを実行します。
- Kerberos 認証を使用するドメインで Business Glossary 承認ワークフローを使用する場合は、モデルリポジトリサービスのユーザー名とパスワードを入力します。
 - フラットファイルキャッシュディレクトリの場所を確認します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。
 - Business Glossary ファイル用の一時エクスポートファイルディレクトリの場所を確認または設定します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。
 - Business Glossary ファイル用のアセット添付ディレクトリの場所を確認または設定します。アップグレードプロセスではこの場所が更新されません。
 - アナリストサービスをリサイクルする。
アナリストサービスをリサイクルする前に、モデルリポジトリサービス、データ統合サービス、コンテンツ管理サービスのアップグレードおよびアップグレード後の手順を完了します。
- ☐ プロファイルおよびスコアカードに次のタスクを実行します。
- データドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメイングロッサリにインポートします。定義済みデータドメイングループおよび関連するデータドメインをデータドメイングロッサリに追加する場合は、Informatica_IDE_DataDomain.xml ファイルをインポートします。
 - infacmd ps restoreProfilesAndScorecards コマンドを実行して、以前のバージョンのプロファイルとスコアカードを現在のバージョンに復元します。
 - スコアカードを実行して、作成したスコアカードの[累積メトリック傾向]ペインの統計情報を表示します。
- ☐ ODBC プロバイダタイプを使用するようにすべての Microsoft SQL Server 接続をアップグレードします。
- ☐ SQL データサービス用の Informatica ドライバをアップグレードします。
- ☐ Informatica Cassandra ODBC データソースをアップグレードします。
- ☐ Data Transformation ファイルを以前のインストールディレクトリから新しいインストールディレクトリにコピーして、以前のバージョンと同じワークスペース、リポジトリ、およびカスタムグローバルコンポーネントを取得します。
- ☐ 実装が必要な新機能、または有効化が必要な新しいオプションのリストを確認するには、『*Informatica の新機能および変更点*』を参照してください。

付録 B

ディストリビューションパッケージの管理

この付録では、以下の項目について説明します。

- [ディストリビューションパッケージの管理の概要, 120 ページ](#)
- [作業を開始する前に, 121 ページ](#)
- [コンソールモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除, 121 ページ](#)
- [サイレントモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除, 122 ページ](#)
- [インストールした後に, 123 ページ](#)

ディストリビューションパッケージの管理の概要

Integration Package Manager（パッケージマネージャ）を使用して、Informatica サービスマシンおよびクライアントマシンからディストリビューションパッケージをインストールおよび削除できます。

ディストリビューションパッケージは、次の処理要件を満たすためにドメイン内にインストールする一連のディストリビューションバイナリです。

- Hadoop または Databricks 環境に処理をプッシュする場合。
- Informatica ドメイン内で複合ファイルを処理する場合。
- Informatica ドメイン内で処理する際に Hadoop または Databricks 環境に接続する場合。

アップグレードプロセスまたはインストールプロセス中にディストリビューションパッケージをインストールしなかった場合、またはディストリビューションパッケージを追加する場合は、ディストリビューションパッケージをインストールできます。別のパッケージを使用する場合、または使用しないパッケージをインストールした場合は、ディストリビューションパッケージを削除できます。

ディストリビューションパッケージをインストールまたは削除するときは、すべてのサービスマシンとクライアントマシンに対して操作を実行していることを確認してください。

作業を開始する前に

Integration Package Manager を実行する前に、環境変数の設定やファイルのダウンロードなどのタスクを実行します。

1. Informatica Services をシャットダウンします。
2. 次の環境変数のいずれかを設定します。

変数	説明
INFA_JDK_HOME	サポートされる Java Development Kit (JDK) が含まれるフォルダの場所。次の場合は、INFA_JDK_HOME 環境変数を設定します。 <ul style="list-style-type: none">- Informatica ドメインが Windows または Linux プラットフォーム上にある- Informatica クライアントである
INFA_JRE_HOME	サポートされている Java Runtime Environment (JRE) が含まれているフォルダの場所。Informatica ドメインが AIX プラットフォーム上にある場合は、INFA_JRE_HOME 環境変数を設定します。

3. パッケージマネージャを実行するユーザーに、Informatica インストールディレクトリの読み取り/書き込み権限、および実行可能ファイルの実行権限があることを確認してください。
4. Informatica 電子ソフトウェアダウンロードサイトから次のファイルをダウンロードします。
 - [Integration Package Manager](#)
 - [Distribution packages](#)
5. Integration Package Manager の ZIP ファイルをローカルドライブに抽出します。
6. 必要なディストリビューションパッケージの ZIP ファイルを次の場所にコピーします: <Integration Package Manager ディレクトリ>/source
注: ディストリビューションパッケージの ZIP ファイルがソースディレクトリで利用できない場合、パッケージマネージャは失敗します。

コンソールモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除

Integration Package Manager をコンソールモードで実行して、ディストリビューションパッケージをインストールまたは削除できます。

1. 統合パッケージマネージャディレクトリから、次のいずれかのコマンドを実行します。
 - ./Server.sh console (Linux または UNIX の場合)
 - Server.bat console (Windows の場合)
 - Client.bat console (クライアントの場合)

注: Windows でコマンドを実行するには、管理者のコマンドプロンプトを使用します。

2. サービスまたはクライアントのインストールディレクトリを入力し、**Enter** キーを押します。

3. 操作タイプを選択し、**Enter** キーを押します。
 - 既存のディストリビューションパッケージを削除するには、1 を選択します。
 - 1 つ以上のディストリビューションパッケージをインストールするには、2 を選択します。
 インストールまたは削除できるディストリビューションパッケージがコンソールに表示されます。
4. インストールまたは削除するディストリビューションパッケージを、複数の場合はカンマで区切って入力します。**Enter** キーを押します。
5. Integration Package Manager のログファイルで、インストールまたは削除のステータスを確認します。
 ログファイルは次の場所にあります: <Integration Package Manager ディレクトリ>/IntegrationPackageManager_<日付とタイムスタンプ>.log

サイレントモードでのディストリビューションパッケージのインストールまたは削除

Integration Package Manager をサイレントモードで実行して、ディストリビューションパッケージをインストールまたは削除できます。サイレント入力プロパティファイルには、パッケージマネージャをサービスおよびクライアントのサイレントモードで実行するためのプロパティが含まれています。ファイル内の各プロパティに適切な値を設定します。

1. 次の場所で IntegrationPackageManager.properties ファイルを見つけます: <Integration Package Manager ディレクトリ>/
2. テキストエディタでプロパティファイルを編集します。
 以下の表に、変更可能なプロパティを示します。

プロパティ名	説明
USER_INSTALL_DIR	サービスまたはクライアントのインストールディレクトリ。
OPERATION_TYPE	実行する操作: <ul style="list-style-type: none"> - 既存のディストリビューションパッケージを削除するには、DELETE に設定します。 - 1 つ以上のディストリビューションパッケージをインストールするには、EXTRACT に設定します。
SELECTED_HADOOP_LIBRARIES	ディストリビューションパッケージとバージョンを表示します。 インストールまたは削除するディストリビューションパッケージを入力します。複数のパッケージがある場合はカンマで区切ります。

3. プロパティファイルを保存します。
4. 統合パッケージマネージャディレクトリから、次のいずれかのコマンドを実行します。
 - ./Server.sh silent (Linux または UNIX の場合)
 - Server.bat silent (Windows の場合)
 - Client.bat silent (クライアントの場合)

注: Windows でコマンドを実行するには、管理者のコマンドプロンプトを使用します。

5. Integration Package Manager のログファイルで、インストールまたは削除のステータスを確認します。
ログファイルは次の場所にあります。<Integration Package Manager ディレクトリ>/
IntegrationPackageManager_<日付とタイムスタンプ>.log

インストールした後に

パッケージマネージャを使用してインストールしたディストリビューションパッケージを使用するには、サービスマシンおよびクライアントマシンでプロパティまたは環境変数を設定します。

Developer tool の設定

Developer tool にディストリビューションパッケージをインストールした後、developerCore.ini ファイルを、インストールしたディストリビューションパッケージで更新します。

1. 次の場所で developerCore.ini ファイルを見つけます: <Informatica インストールディレクトリ>\clients
\DeveloperClient
2. ファイルを編集して、次のプロパティを更新します。
-DINFA_HADOOP_DIST_DIR=hadoop\<Hadoop distribution name>_<version>
例:
-DINFA_HADOOP_DIST_DIR=hadoop\CDH_7.1
3. Developer tool を再起動します。

環境変数の設定

一部のアダプタでは、データ統合サービスおよびメタデータアクセスサービスがディストリビューションパッケージにアクセスするには環境変数が必要です。詳細については、

[Configure environment variables to process complex files](#) を参照してください。

索引

A

AIX

Java Cryptography Extension [22](#)

Java Runtime Environment [22](#)

D

dbs2 接続

データベース接続のテスト [65](#)

DISPLAY

環境変数 [32](#)

I

IATEMPDIR

環境変数 [17](#), [24](#), [32](#)

Informatica Cassandra ODBC ドライバ

odbc.ini ファイルのバックアップ [39](#)

Informatica services

サイレントモードでのアップグレード [55](#)

Informatica サービス

グラフィカルモードでのアップグレード [42](#)

コンソールモードでのアップグレード [53](#)

コンソールモードでのアップグレード（ノードへの変更あり） [79](#)

Informatica プロセス

ユーザーアカウント [63](#)

isql

データベース接続のテスト [65](#)

J

JRE_HOME

環境変数 [17](#), [24](#), [32](#)

L

LANG

ロケール環境変数 [17](#), [24](#), [32](#)

LC_ALL

ロケール環境変数 [17](#), [24](#), [32](#)

Linux

データベースクライアント環境変数 [65](#)

P

PATH

環境変数 [17](#), [24](#)

S

sqlplus

データベース接続のテスト [65](#)

U

UNIX

コンソールモードでの Informatica サービスのアップグレード [53](#)

コンソールモードでのアップグレード（ノードへの変更あり） [79](#)

データベースクライアント環境変数 [65](#)

データベースクライアント変数 [65](#)

ライブラリパス [87](#)

W

windows

グラフィカルモードでの Informatica サービスのアップグレード [42](#)

Windows

ユーザーアカウント [63](#)

あ

アップグレード

ファイルの事前バックアップ [36](#)

後でファイルをコピー [113](#)

アップグレードエラー

モデルリポジトリサービス [95](#)

アプリケーションサービス

ポート [62](#)

アプリケーションサービスのアップグレード

特権 [92](#)

い

インストール

ファイルの事前バックアップ [36](#)

インストールの要件

環境変数 [17](#), [24](#), [32](#)

ディスク容量 [23](#)

ポートの要件 [62](#)

最小システム要件 [14](#), [22](#)

お

オブジェクト依存関係のグラフ

再構築 [95](#)

オペレーティング システム

サポートの終了 [61](#)

く

グラフィカルモード
Informatica サービスのアップグレード [42](#)

こ

コンソールモード
Informatica サービスのアップグレード [53](#), [79](#)

さ

サイレントモード
Informatica サービスのアップグレード [55](#)

し

システム要件
最小 [13](#), [30](#)
最小インストール要件 [14](#), [22](#)

す

スケジューラ
アップグレード後のファイルのコピー [107](#)

て

ディスク容量の要件
インストールの要件 [23](#)
データベース
接続のテスト [65](#)
データベースクライアント
IBM DB2 クライアントアプリケーションイネーブラ [64](#)
Microsoft SQL Server ネイティブクライアント [64](#)
Oracle クライアント [64](#)
Sybase オープンクライアント [64](#)
環境変数 [65](#)
構成 [65](#)

と

ドメイン
ポート [62](#)

の

ノード
アップグレード時の移行 [86](#)

ノード設定
変更プロセスの完了 [86](#)

は

パッチの要件
インストール [15](#), [22](#)

ふ

ファイルのバックアップ
アップグレード前 [36](#)
インストール前 [36](#)
ファイルをコピーする
アップグレード後 [113](#)

ほ

ポート
アプリケーションサービス [62](#)
ドメイン [62](#)
要件 [62](#)
ポートの要件
インストールの要件 [62](#)

も

モデルリポジトリサービス
アップグレードエラー [95](#)

ゆ

ユーザーアカウント
Informatica プロセス [63](#)
Windows [63](#)

ら

ライブラリパス
環境変数 [17](#), [24](#)

り

リポジトリ
データベースクライアントのインストール [64](#)